

岐 阜 大 学

留学生センター紀要

2014

岐阜大学留学生センター

岐阜大学留学生センター紀要

2014

巻頭言……………竹内豊英（留学生センター長） 1

論文編

【研究論文】

植民地下朝鮮における梨花女子高等女学校

—「光州学生運動」を中心に—……………太田孝子 3
岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—……………土谷桃子 21

【研究ノート】

日本語学習者のためのシャドーイング教材に関する一考察

—会話力育成を目指して—……………田辺淳子 37

【授業報告】

初級学習者を対象とした会話授業

—「口頭表現 A」授業報告—……………三輪実希 49

中級学習者を対象とした聴解授業

—「聴解演習 C」授業報告—……………石井由美 61

中上級学習者を対象とした読解授業

—「文章理解 D」授業報告—……………加藤由紀子 73

年報編（2014年4月～2015年3月）

1. 日本語研修コース…………… 87
2. 日本語・日本文化研修コース…………… 102
3. 日本社会文化プログラム…………… 105
4. 全学共通教育…………… 107
5. 留学生指導…………… 108
6. 留学生センター年間行事…………… 118
7. 留学生センター交流ラウンジの利用について…………… 129

資料

岐阜大学外国人留学生数…………… 131

巻頭言

留学生センター長 竹内 豊 英

日本政府は2008年、「留学生30万人計画」を発表した。これは、日本への留学生を、2020年までに、当時の14万人から30万人に増やそうという計画で、当面の5年間で大幅な拡大を目指している¹⁾。岐阜大学には昨年5月1日現在で295名の留学生が在籍している。このうち国費留学生が42名、外国政府派遣留学生が38名、私費留学生が215名であった。出身国は中国が141名、インドネシアが33名、マレーシアが28名、ベトナムが16名と続く。利用している宿舎としては、民間アパート・下宿に168名、留学生用宿舎に83名、公営宿舎に31名、学生寮に11名などとなっている。

海外から留学生を30万人受け入れるという数値については、他国での留学生の受入状況や、現在の我が国の受入状況など幾つかの状況を比較しながら考えていく必要があるとしている。現在、我が国の大学等の高等教育機関に在籍する学生数は、全学生数で約350万人と言われている。18歳人口の減少に伴い全体として減少傾向にあることには変わりはないが、一方進学率の増加等もあり、今後約300万人をほぼ横ばいに推移するものと仮定できる。他方、海外の留学生受入れの現状について目を向けると、我が国と同様に、非英語圏であり先進国である国として、例えば、ドイツでは高等教育機関に学ぶ学生のうち海外からの留学生の割合は12.3%、同じくフランスでは11.9%となっている。我が国の高等教育機関が、他の先進国と同様に、海外からの留学生の受け入れ数の水準を確保していこうとする際、現在の3%強からドイツ、フランスに届くような10%程度（つまり300万人のうちの10%≒30万人）の受け入れが必要となるということになる。平成26年度の岐阜大学在学学生は、学部生5,719人、大学院学生1,534人で総計7,253人であり、その10%を留学生が占めるとすると725人となる。岐阜大学としても大幅な拡大を目指していくこととなる。また、世界の留学生市場は今後急拡大をするという報告もあり、その報告では留学生数は、2015年には500万人、2025年には700万人規模と試算されている。現在、世界の留学生数における日本の受け入れシェアは約5%程度であるので、仮に中間の2020年を600万人とすれば、現在の受け入れシェアを確保しようとした場合、約30万人程度の留学生を受け入れるということになる。

30万人計画を達成するためには、留学生に対する種々の支援が必要となる。日本留学への関心を呼び起こす動機づけや情報提供から、入試・入学・入国の入り口の改善、大学等の教育機関や社会における受け入れ体制の整備、卒業・修了後の就職支援等に至る幅広い施策を、関係省庁において検討し、その基本的な考え方や施策の方向性を「留学生30万人計画」骨子としてとりまとめている。

そのような中で、留学生センターとしては、受け入れた留学生に対する日本語・日本文化の教育、外国人留学生の修学・生活上の指導やアドバイスをを行うなど役割は大きい。岐阜大学としても住宅環境をはじめとする受け入れ体制の整備、卒業・修了後の就職支援などを拡充する必要がある。

本年度の紀要は、論文2編（太田、土谷）、研究ノート1編（田辺）、授業報告3編（三輪、石井、加藤）および年報編、資料からなります。ご執筆いただいた6名の先生、年報、資料をまとめてくださった留学生センターの先生方に心より感謝申し上げます。

1) <http://www.studyjapan.go.jp/jp/toj/toj09j.html>

論文編

植民地下朝鮮における梨花女子高等女学校

—「光州学生運動」を中心に—	太田孝子	3
岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—	土谷桃子	21
日本語学習者のためのシャドーイング教材に関する一考察		
—会話力育成を目指して—	田辺淳子	37
初級学習者を対象とした会話授業		
—「口頭表現 A」授業報告—	三輪実希	49
中級学習者を対象とした聴解授業		
—「聴解演習 C」授業報告—	石井由美	61
中上級学習者を対象とした読解授業		
—「文章理解 D」授業報告—	加藤由紀子	73

植民地下朝鮮における梨花女子高等女学校

— 「光州学生運動」を中心に —

The Rika (Ewha) Girl's High School during the Japanese Colonization of Korea
— Focusing on “Gwangju Student Independence Movement” —

太田孝子

要旨：

梨花女子高等普通学校は1886年、宣教師メアリー・スクラントンにより創設された朝鮮最初の女学校である。開校当初こそ生徒の募集に苦勞したものの、その後は開明的な学校として順調な発展を遂げた。しかし、日本統治下の影響を受け、1929年10月30日に光州市で起きた「光州学生運動」では、京城へ波及後、梨花女高普が最も活発な動きを見せ、「梨花女学校事件」とも呼ばれている。

本稿は、梨花女高普で展開された光州学生運動の扇動者の一人だった金貞玉（当時86歳）に対して実施した聞き取り調査の内容を関連文献と比較しながら検討し、運動の実態を記述したものである。主導者崔福順が担った諸学校への連絡者という役割を中心に、扇動者12人の動向を探った他、梨花女高普の生徒たちにとって忘れ得ぬ影響を及ぼした事件であったことをアンケート等から検証した。

はじめに

1886年は5月に女子のための梨花学堂が、6月に男子のための培材学堂が、9月には政府によって育英公院が設立し、「朝鮮に近代式学校教育が開始した年」と言われている。それ以前には女子のための教育機関は皆無だったが、近代式教育の出発点においては男子のための教育と時期が同じであったという点で、その意義が評価されている¹。各校の発展過程は、政府の学校である育英公院が最も活発だったが政治性が原因で短命であり（1894年廃校）、培材学堂は男子を対象としたキリスト教系の学校ではあったものの、早くから発展し現在に至っている。上記2校に比べると、梨花学堂は儒教的伝統によって深く幽閉されていた女子を対象としたため、学校運営においては最も苦勞している。

関連のどの文献にも「梨花学堂は一人の生徒から始まった」と記されているように、設立者のスクラントン（注：Mary F. Scranton、アメリカのメソジスト教会海外女性宣教会から派遣された宣教師で、1885年5月に来朝した）は塾を開いたものの生徒が来ないという苦勞の末に、ようやく政府高官の側室を最初の生徒として迎えた。王妃の通訳になりたいというその女性金氏に英語や聖書を教えたものの、3カ月で病気のため学校を去ることになった。しかし、梨花は金氏のために授業を始めた1886年5月31日を創立日としている。2番目の生徒は養育能力のない母親が預けた女子であり、3番目の生徒はコレラに罹患し捨てられた女性の傍らから拾ってきた女子である。創設初期においては、衣食住を提供し、無償の教育を実施しても生徒を集めることは難し

く、翌年正月にようやく7人になった。ぼつぼつやって来る女子のほとんどが庶民階級の出身者であった。このようなスクラントンの努力に応え、1887年2月には大韓帝国初代皇帝（朝鮮王朝第26代国王）高宗が「梨花学堂」という校名を授けている。1918年2月には学則の変更により高等科と普通科を分立して、梨花女子高等普通学校²、梨花女子普通学校（注：小学校に対する朝鮮向け名称）に改称した。本稿の対象は、梨花女子高等普通学校（以下、梨花女高普）である。

その後、生徒数は1899年には47人に、1909年には174人に増加しており、他の私立女学校が20～30人だったことに比べると順調な伸びを示したと言える。後には両班階級、特に開化志士の娘や婦人が入学することもあり、それが朝鮮の根深い階級意識を取り崩す発端になったとも言われている³。しかし、常に日本統治下の政情に左右され、様々な影響を受けた。中でも、1929年10月30日に光州で起きた「光州学生運動」は、首都京城（現、ソウル）に波及するや、梨花女高普が最も活発な動きを見せ、「梨花女学校事件⁴」とさえ記録されている。この名称も筆者の目を引いたが、事件の扇動者だった一人の卒業生と出会ったことが、一層光州学生運動に関心を持つ契機となった。

所属する「高等女学校研究会」では、1996年に植民地下にあった梨花女高普の卒業生に対してアンケート調査を実施し、その回答を読んでさらに何人かの卒業生にインタビューを行ったが、その一人が本稿で取り上げる金貞玉（当時86歳）である。

「昨夜、私は神さまに祈って、私の命をこのように長くし、また、ほげないように私を守って、今日、皆様方に会うようにして下さったことを感謝いたしました。」

日本語で訥々と話されるこの第一声で、丁重に迎えられた我々一行⁵は、淡いピンクの正装のチマチョゴリ姿の金貞玉が、鶴首の思いで今日の日を持ち望んでいたことを痛感した。1999年3月25日午後、ソウル市鍾路区にある金貞玉宅への訪問であった。

インタビューの全文は筆者がテープより起こして、高等女学校研究会プロジェクトチーム編『高等女学校に関する調査資料No.7』（2000年刊）に載せ、さらに同研究会会員の山本禮子が「邂逅—光州学生事件との関わりの中で」という論文を2000年に発表した（和洋女子大学紀要・文系編40号所収、高等女学校研究会プロジェクトチーム編『高等女学校に関する調査資料No.10』、2004年刊に転載）。

しかし、金貞玉の発言及び山本論文を吟味したところ幾多の間違いや齟齬を発見したため、その後刊行された関連資料も検討し、光州学生運動を全面的に捉え直すことにした。本稿は、梨花女高普で起こった光州学生運動の扇動者の一人だった金貞玉への聞き取り調査を基に、光州学生運動を様々な角度から吟味し、梨花女高普の生徒たちに及ぼした影響を考察するものである。なお、文献及びアンケートからの引用には京城とソウル、朝鮮と韓国などが入り混じっていたり、文法的に間違っている文章も見られるが、原文のままとした。

1. 金貞玉のプロフィール

金貞玉は1912年7月、京城府唐珠洞に誕生した。29年梨花女高普に入学し、32年に卒業している。アンケートの「女学校入学時の動機」の欄には、「両親とも死亡、保護者であった叔母（母の妹にあたる梨花女子大学総長金活蘭博士⁶）の勧めで」と記されている。父の仕事の関係で15歳まで北京に住んでいたが、7歳の時に父と死別し、その8年後、母と共に生まれ故郷京城の叔

母の家に身を寄せることになった。しかし、その母も17歳の時に病没したため、以後叔母を頼ることになったのである。長い間北京で生活していたため、日常使用していた言葉は支那語であった。そのため、梨花女高普編入に際して、①学年を2年下げて普通学校の5年生に編入すること、②日本語の平仮名・片仮名、ハングルを学習して一定の成績をおさめなければ退学、という条件が付けられたという。夢中で勉強したという当時の様子を、昨日のこのように「私は、その時15番になりました。だから梨花の生徒になれました。そんなに勉強したことを今も誇りに思っています」と顔をほころばせながら語ってくれた。

アンケートには、印象に残っている教科として、歴史、英語、数学、理科、音楽を挙げている。教師としては、誰もが愛国者として尊敬した朝鮮語と漢文担当の金洵濟先生、担任で数学、物理・化学担当の鞠採表先生（延世大学卒業）が特に印象に残っているという。最も尊敬する日本人教師は、現代国語の二階堂先生（男性）で、哲学の造詣が深い先生だったからという回答であった。また生徒全員が尊敬した古文の平田先生は、教え方が真剣で、日本人としてのプライドは高かったが、醜くはなかったと鋭い評価を残している。その他、朝鮮語と裁縫の文仁順先生（女性）や国語の大島先生の名前が挙がる。特に、「大島先生は優しい先生で、家に呼んでおいしいものを食べながら、日本語の発音を教えて下さり、励ましてくださった」と懐かしそうだ。遠い昔の記憶力に感嘆すると共に、意義深い学校生活だったことが窺えた。

卒業後の進路としては「梨花専門学校、梨花専門の助教として2年間勤務、引き続き同大学で教授として勤務」と記されていたが、次のような証言を得た。1936年から38年まで平壤の栗の多い農村に住んだ。文字を持たない人々に少しでも光をとの信念を持ち、夜学で住民に文字を教え、朝鮮の歴史も密かに教える教師として平壤に行ったのである。しかし、後述する光州学生事件との関わりでブラックリストに載っていたため、刑事の監視が常にあり見つかってしまう。「もう農村には来るな。京城から離れてはいけない。2時間以内に出て行かないと逮捕する」と言われ、梨花に戻ったのである。「農村教育をしたかったが、村を出てきてしまったことを思うと心苦しい。農村で働き続けたかったという思いはずっとあり、今でも気になっています。でもね、梨花に戻ったことはよかったと思っています」とずっと心に秘めてきた思いを吐露してくれた。

この行動には叔母金活蘭の強い影響が窺える。注6に詳述したが、金活蘭がコロンビア大学に提出した学位論文は「朝鮮の復興のための農村教育」であり、1920年代の朝鮮の農村の実態を分析し、教育を通じた農村復興の方法と方向を提示した当論文は、当時農村運動を展開する上で指針とされた⁷。教育を受けることができずに学齢期を超えてしまった女性たちの間に芽生えた教育熱と、教育を受け啓蒙的な思想を持った女性たちの思いが相乗的に結合し、各地に講習会、夜学、伝道活動などのブームが起こったのである。最も社会の注目を集めたのが金活蘭主導の梨花学堂の教師たちによる「七人伝道隊」で、北朝鮮一帯を巡回・講演してキリスト教信仰や愛国心を説き、女性の覚醒を促し、読み書きを教えている⁸。金貞玉の行動は叔母の活動に習ったのものであったのである。

金貞玉は『叔母 金活蘭⁹』の著者でもあり、奥付には金の履歴が以下のように記されている。

梨花女子専門学校文科卒業、米国ワシントン州立師範大学教育学部卒業、梨花女子大学院教育学部修了。この間、教育心理学並びに韓国文化史を専攻。梨花女子大学で名誉文学博士の学位を取得し、米国南カリフォルニア州立大学東洋学部で韓国文化史の講師を勤めた。また、梨花女子大学教授の傍ら、学生課長、韓国YWCA連合会理事も兼任した。1978年に

シン・サイムダン賞を、1982年にソウル教育賞（社会分野）を受賞。

上述のような活動が、アンケートの「女学校教育はどのような意味があったか」という質問に、「20世紀の韓国の女性教育に身心を全的に奉仕したと思っています。一生を梨花大学で教授しました」という力強い回答をさせたのであろう。インタビュー当時は、韓国YWCA連合会後援会理事長ならびに亡夫が校長として勤務した学校法人ドング学院理事長の要職にあり、回答を裏付けるように1998年には名誉梨花人賞を受賞している。

しかし、我々が最も注目したのは「女学校在学中にあなたの生き方・考え方に影響を与えた事件は」の項に「光州学生事件」を、さらに「女学校生活全般を通して印象に残っていることは」の項にも再び「光州学生事件」と記していたことである。インタビューの主目的は、その点を詳しく聴取することであった。

2. 光州学生運動に関する金貞玉の証言

本章は、1929年10月30日に起きた光州学生運動に関する金貞玉の証言を記したものである。日時など金の記憶違いと思われる個所も散見されるが、他の資料・文献と照合しての分析は次章で行った。なお、金貞玉の証言にも出てくるが、各種関連文献でも「光州学生運動」「光州学生事件」「光州学生万歳事件」の用語が使用されているので、証言・引用文等は語句を統一せずそのまま記した。

① 証言一事件の発端と京城への波及

金貞玉が話したいと切望する「光州学生運動」とはどのような事件だったのであろうか。きっかけは、10月30日、朝鮮人と日本人の学生同士の小競り合いから始まる。汽車通学で朝鮮人と日本人は一緒になったが、朝鮮人女生徒が長い髪を結って赤いリボンで結んでいたのを、日本人中学生がひっぱったり、冷やかしたりしたのである。それが、日朝双方の学生間の流血騒ぎに発展し、次第に民族的感情を誘発する導火線となっていく。

朝鮮人学生は怒って日本人学生を打ち、日本人学生は一緒になって朝鮮人学生を打ちました。何日間もケンカが続き、大きな騒動となり駅で双方が争ったわけです。でも警察は日本人学生には関わらなくて、朝鮮人学生たちを獄に送りました。学校に戻れないということを高等普通学校の生徒も知るようになりました。この事件の状況が新聞等で伝わり、ソウルの高等普通学校の学生たちにも影響を与え、決起となったのです。私は12人の煽動者の1人です。主導者は崔福順1人です。その下に煽動者12人がいました。私たち13人がこれを起こすようにしました。今は、みんな死んで私だけが生きています。

その声には、生き証人として、是非とも我々に語らなければならないという意志が感じられた。

光州学生事件を、私たち韓国人は「光州学生万歳事件」と言います。これについては『梨花百年史』に書かれています。けれども主導者と12人のことは書かれていません。私は今日、一人のことを話します。私から聞いたことは、本当に13人の中の一人ですから、確かです。12人は煽動者です。生きている私が本当のことを言う、証言者になることは嬉しいです。

金は、13人のうち記憶している6人の名前を漢字で、2名の名前をハングル表記で紙片に書いたが、それらは、「崔福順（主導者）、揚元淑 4B（注：4年B組の意、以下略）、郭福女 3B、

金貞玉 2B、金鳳凱、尹福、ハングル表記のうち1名の姓は不明、名は玉粉 3A、ハングル表記1名（注：林敬愛を指す）」であった。

私たち13人は一緒になって学校のみんに呼びかけました。崔福順は男の着物を着て、男の格好をして何日の何時に一斉に万歳を叫ぶように決め、私たち12人は、梨花高等の生徒たちみんなに連絡して、一緒に道に集まって万歳を叫ぶようにしました。その日時は11月3日（注：この日付は金の記憶違いであり、次章で言及した）です。初め、朝10時に万歳を叫ぶようにしたんです。男子学生より女子が中心になった動きです。そのうち警察が学校を囲んだので、私たち13人は一緒になって10時にしないで9時に万歳を叫びましょう、と。みんな教室で靴を履いて待っていました。9時になって、私が一番先に「万歳」と叫んで外に出ました。そして林敬愛が続いて「万歳」といって飛び出しました。警察は、梨花と培材学校（注：既述した隣接するキリスト教主義の男子校）の間の鉄条網を閉じて、出ていく人や万歳と叫ぶ人の着衣に白墨で印をつけていました。私の後ろにもマークをしました。そして私が見たら、たくさんの人にマークがありました。だから「注意しましょう。背中にマークしている」と言いました。警察は私たちを梨花学校の教室に閉じこめ、鍵をかけました。その時、林敬愛が教室の窓ガラスを手で破り、外に出ました。彼女は学校の窓を割ったということで破壊罪で逮捕され、6ヶ月以上監獄に入っていました。私はその時2年生でした。実際の年齢に関係なく、2年生は監獄に入れないのです。3、4年生は監獄に入れるのです。私は留置所に2週間引っ張られました。それから梨花学校の寄宿舎に3ヶ月間監禁されました。終日、寄宿舎内に居るように命じられたのです。

② 拷問

でもね、拷問は同じでした。「首謀者は誰か？」それを聞くのです。「分かりません。私は日本語も分からない。支那から来たので誰が誰だかも分かりません。」日本の警察は、尋問だけしました。答えなかったら、「馬鹿」と言って朝鮮人の刑事に私を任せます。その人は非常に怖いのです。朝鮮式の体罰¹⁰をします。それは、指の間に棒を入れて指3本を締め付けるんです。刑事は「誰が首謀者か？」と言って私を跪かせ、「おまえ、早く答えろ」と、やかんの冷水を口に入れる。いわゆる、水拷問です。2、3度やられると私は気絶する。するとうつ伏せにして水を吐かせ、また水を入れるんです。私は、自分が拷問される時はあまり怖くない。殺すなら、殺せと思った。でも、3年生の拷問を立てて見ようとした時、本当に怖かったです。2年生にはそんなひどい拷問をしない。でも、3、4年生にはほんとうにひどい拷問をします。崔福順は最後まで拷問されました。留置所を出るとき、犬の鳴き声のような声を出していました。精神異常になったのです。美人の金鳳凱は刑事に特別扱いされました。12人は拷問されても何も言わなかったで、その後、釈放されました。

金貞玉は、この想いを伝えるために、英語や韓国語、時に日本語を使って表現しようとしたが、その懸命な姿に、聞く我々にも緊張が走った。

留置所にいる時、男子学生がやって来て外でハーモニカで国歌を吹いたという。所内にいる者は皆、外から聞こえてくるハーモニカの国歌の調べに泣き、「万歳、万歳」と叫んで、また泣いたそうだ。西大門警察は女学生は連行後に留置所に収容したが、男子学生は収容しきれないので扉に向かって立たせておいた。後ろ向きになった男子学生たちの近くで、女学生たちは拷問を受

けた。「万歳」と叫ぶ学生に警官はホースで水をかけ続けたという。極寒の中、それがどんなに残酷なことだったかは想像に余りある。それでも「万歳」と言い続ける学生たちを、警官は次々に鞭打ったのである。これらの拷問に対し、日本の警察は直接に手を下さず朝鮮の警官に任せていた、と金貞玉は再三強調した。

③ 崔福順への思い

おもむろに、しかし情熱を込めて、金貞玉は再度口を開いた。

主導者は崔福順、12人は煽動者です。林敬愛は破壊罪で逮捕され、半年牢獄にいたために、解放後、国と梨花学校の両方から賞をもらいました。林さんだけが賞をもらったのはおかしいと思います。一番ほめられるべき人物は崔福順です。韓国では当時のスチューデントパワーのことを知らない。政府が意図的に隠しているとも思えるし、記録を破壊しているとも考えられます。このことを韓国で発表したのですが無視されたので、日本で発表して欲しいと願っています。

光州学生万歳事件の生き証人として、実際に体験したことを語りたいと祈りつつその時を待っていた金貞玉の想いは、ただ崔福順の功績が公に認められ、顕彰されることにあったのである。

3. 証言上の問題点

① 『梨花百年史』に記された光州学生事件とその問題点

梨花女子高等学校編の学校史『梨花女子高等学校100年史（『梨花百年史』と略記）』、梨花女子大学編の学校史『梨花女子大学校100年史（『大学百年史』と略記）』¹¹には、それぞれ「光州学生事件」が記されているが、日付に相違がみられる。『梨花百年史』の記述は以下のとおりである。

1929年に韓国の学生運動において大きな足跡を残した光州学生運動が起こり、梨花の幹部クラスの生徒たちは屋根裏部屋に集まって、光州学生事件擁護同盟中央本部を組織し、大極旗1,000枚とプラカード60枚、多数の宣伝ビラを作って11月15日を梨花の出陣式と定めた。その日、梨花女子高等普通学校の生徒400人余りは、黒い運動靴を最初の授業時間から履き、授業が終わった鐘の音と同時に校庭に集合した。各自は大極旗を手に持ち、あるいはプラカードを高く掲げ、ビラを持った生徒は、12人で組織された煽動隊の指揮に従って一斉に万歳を唱えた。

金貞玉の証言と照合してみると、日付は、1929年11月15日となっている。また生徒たちは煽動者の指示に従って、始めから黒い運動靴を履き、校庭に出る用意をしている。しかし、煽動隊12名とあり、主導者が抜けてしまったか、あるいは、主導者も煽動者の役割を果たしたとしてその中に組み込み、2年生であった金貞玉が抜けてしまったのか、その点は判然としない。当時の事情を教師だったソ・ミョンハクは次のように回顧している。

その時、屋根裏部屋は使えないようになっていたんです。ところが、生徒たちが数人、出入りしているようだったので、一人の生徒をつかまえて尋ねてみると、会長室に行くというのです。一階には会長室はありません。おかしいと思っていましたが、次の日の朝、教室をのぞいてみたら、全員が室外で履く黒い運動靴を履いていました。室内では白い運動靴を履くように定められていたにもかかわらずです。生徒たちが何かをしようとしているのだと思いますが、鐘の音が聞こえると急に外に走って出ていきました。

続く『梨花百年史』の記録は、以下のとおりである。

それに培材の生徒670人が呼応し、両校の生徒が群をなして街に出ていこうとしたとき、西大門警察署が出動し、デモを阻止する一方、主導者54人を連行した。学校は16日から休校となり、チャーチ校長は西大門署の高等係主任、黒沼を訪問し、金マリア他53人の釈放を嘆願したが、聞き入れてもらえなかった。梨花の生徒たちの万歳運動は瞬く間に市内の他の学校に普及し、17日には培花、貞信など、多くの学校が休校となった。その後、総督府の学務局は休校令を出し、抵抗運動を阻止しようとしたが、ソウルの学生運動はさらに激しく拡散し、12月のはじめから10日間で1,000人が検挙される事態となった。そのころ、梨花では新しい幹部クラスの生徒たちが夜になると屋根裏部屋に集まり、第二の万歳運動を計画していた。

しかし、上記には幾つかの問題点が見られる。第一の問題点は、「11月15日が梨花の出陣式」という表記である。金貞玉の言う11月3日は光州市で朝鮮人学生が日本人学生に対抗し、大規模な組織的闘争を展開し始めた日であり、その後急速に抗日運動へと発展する契機となったもののまだ京城には波及していない。

後にも触れるが、10月30日に光州で発生した事件が京城に波及するのは12月に入ってからであり、以下の日程での動きが正確な運動の流れである。

12月2～3日、京城帝大予科、第一高普など各校の教室に檄文が散布されて始まった。(略) 9日からは各校で同盟休校・街頭示威が行われた。(略) 女学校では10～11日にかけて万歳高唱などの動きがあるが、男子校に比べるとずっと小規模であった。この時期の運動で休校となる学校が多く、そのまま冬休みに入っていく。(略) 12月9日夜、許貞淑・朴次貞と梨花女子高等普通学校代表の崔福順(同校基督教青年会会長)の3名が集まり、新学期開始と同時に女学校が一斉に運動することを決めた。(略) 各学校の代表が集まったのは、年が明けた1930年1月14日の夜である。この夜、翌15日午前9時を期して、各学校の女生徒が一斉に立ち上がり、鍾路に集まって街頭示威をすることを決定した¹²。

すなわち、光州学生運動における梨花女高普の出陣の日は金貞玉の記憶違い、『梨花百年史』の記述の間違いであり、金貞玉の示威運動の内容及び検挙等の証言は12月及び翌年1月の出来事(後述)を11月に連続して起こったものと記憶したための齟齬だったと言える。よって「12月のはじめから10日間で1,000人が検挙される事態となった」という記述も、間違いである。

第二の問題点は、「金マリア他53名の釈放」という記述である。この記述に登場する「金マリア¹³」は「3・1運動」(1919年3月1日)で活躍した人物であり、二つの事件を混同したものである。さらに「54人の連行」という記述も、『大学百年史』では57人と記されており、この点にも相違がみられる。

しかし、光州の日朝の学生たちによって始まった騒動は12月に首都京城に波及し、それに呼応して梨花女高普・梨花専門学校でも全校生徒による示威運動が起こったことは事実である。

②『光州抗日学生事件資料』との照合

光州学生運動に関する総督府の文書は『光州抗日学生事件資料 朝鮮総督府政務局極秘文書』¹⁴(以下、『事件資料』の略記も使用)としてまとめられており、最も重要な資料と言える。朝鮮総督府学務局長より兎玉政務総監宛報告書および各道知事宛通牒としての「事件の概要」の

他、「概要」、「状況摘録」、「光州学生事件及其の影響（其の一、其の二、其の三）」、「光州、京城に於ける学生事件の裏面竝学生秘密結社及其の系統」、「秘密結社朝鮮共産党事件」が収録されている。巻頭には姜在彦が解説を書き、凡例からは以下のような資料であったことが分かる。

- 1) 光州学生事件に関して朝鮮総督府警務局が克明に調査した極秘資料を中心に編集したものであるが、[秘密結社朝鮮共産党事件]のみは調査機関、出所も不明である。しかし、同系統の調査によるものと思われるので収録した。各資料にはいずれも秘の印が捺されていた。
- 2) [光州中学校生徒対光州高等普通学校生徒争闘事件の概要] および [秘密結社朝鮮共産党事件] は罫紙に複写紙を入れて鉄筆で複写したものであり、[学生事件裏面系統図] はオフセット印刷、他はタイプ印刷および謄写版印刷であった。
- 3) 人名は原文のままである。

本章では、当時の状況を詳細に収録している「光州学生事件及其の影響」を中心に、他の文献も参照しながら、事件の概要と梨花女高普の動向に焦点を当て検討する。

事件の第1期は、1929年10月30日下校時の汽車の中で、朝鮮人女生徒を日本人中学生がからかったことから、11月3日の明治節に日本人中学生と朝鮮人高等普通学校生が衝突したことに端を発した朝鮮人学生の動きが、「光州学生運動に連帯する京城の学生運動へ」と拡大していった12月までを指す。解説者姜在彦は、11月の動きを次のように記している。

光州学生運動は、朝鮮語新聞に対する厳しい報道管制と検閲による記事削除にも関わらず、ソウル各団体の調査団が派遣されて、その真相が次第に全国的に知れわたるようになった。…光州学生運動に連帯するソウルの学生運動は、培材高普からのろしがあがった。従来校務主任の交代を要求していた培材高普の3、4年生は11月15日から同盟休学に突入し、養正高普でもこれに同調する動きをみせた¹⁵。

上記からも分かるように、梨花女高普に隣接する培材高普では、「校務主任の交代を要求」して、11月15日から同盟休校に突入したのであり、喧騒を伴ってはいない。梨花女高普がたとえ同校に隣接していたとしても、同じ日に『梨花百年史』が記すような光州学生運動関連の動きが起こることはなかったはずだ。もし『梨花百年史』の記述のように、11月15日に梨花女高普で示威運動が起こったとすれば、総督府は必ず記録したはずであり、『事件資料』に言及がないということは、11月15日には何の動きもなかったということの意味する。総督府は各校の動きを確実に把握し、それほど詳細な記録を残していたのである。

さらに、「解説」で「従来基本的には全羅南道に限られていた光州学生運動は、日本警察を中心とした消防隊、青年団、在郷軍人会などによる集中的打撃を受けた。ところが12月に入って、運動の中心舞台はソウルに移り、一部は地方都市に波及していった¹⁶」と記していることから、京城の学校で動きがあったのは12月に入ってからであることは明白である。

この時期の梨花女高普関連の記事は他校に比し些少で、『事件資料』（波及状況の記録）には「12月9日、私立梨花女高普校内に於いて一斉に万歳を高唱し喧躁す」との記事が残るだけであり¹⁷、11月の記録は見当たらない。また「事件及其の影響」には、京城府内27の学校別の動揺状況が表で示されているが、私立梨花女高普の欄には、12月9日「昼休盟休を謀議」、12月11日「本日より臨時休校」とのみ記載され、「12月11日、京城府内朝鮮人各中等学校生徒の動揺」の記事に梨花の校名が記されているだけである。この記述内容は『大学百年史』、他の文献の記事と

も合致している。

京城の各校に関する記事は以下のとおりであり、12月の段階ではそれほど大きな動きには至っていないことが分かる。

前日来動揺の各校は本日（注：12月11日）も依然動揺を続け怠業状況にありたるも、特に不穩の行動に出でたる者なく、連日の状況に鑑み、徽文、普成、敬新、協成実業及び淑明、進明、梨花、同徳の各私立学校は本日より当分休校する旨発表し、夫々生徒父兄に通告せり。尚京畿道に於て去る9日以来検束せる学生に対し9日夜、442名を釈放したるが、更に昨10日深更401名を釈放し、引続き検束中の者211名なり¹⁸。

『事件資料』『大学百年史』『植民地下朝鮮・光州学生運動の研究』などを検討すると、梨花女高普では12月9日に最初の行動が起こったと断定することができる。

いずれにせよ、光州学生事件発生から約1ヵ月後に朝鮮人学生が在籍する京城府内の学校でも、光州の高等普通諸学校と連帯するための同盟休校等の動きと共に植民地教育の問題点を指摘した徽文を撒布する運動が激しくなり、翌1月からは多くの逮捕者を出す事態になっていくのである。

4. 光州学生運動への朝鮮総督府の対応

このような状況への朝鮮総督府の対応として、1930年1月13、14日の道知事会議での関係者の発言を挙げておきたい。以下は、1930年2月発行の雑誌『文教の朝鮮』に記載されたものからの抜粋である¹⁹。

〈朝鮮総督府訓示一抜粋〉

今や疆内概ね靜謐なりと雖接壤地方の政局の転変に伴ひ疆外より匪賊の侵入を見るやも測り難く又輓近不穩の思想を抱き国家社会存立の基礎を危うくせんとするもの漸く多からんとするを以て各位は宜しく当該官憲を督励し之が警防取締を厳にし不良の輩をして蠢動の余地なからしむると共に不穩なる思想運動の根絶に全力を尽さんことを期すべし。

続いて学務局および警務局主管からの指示が記されている。

〈学務局主管7 学生生徒児童の訓育に関する件〉

近時学生生徒児童中往往志操堅実を欠き不穩なる思想に惑溺して貴重なる勉学の途を誤る者あるは真に憂慮すべきことなり此の点に関しては数次指示するところあり各位に於いても夫夫留意せられつつあることと信ずるも今後一層部下職員を督励し校風の作興校規の振肅を図り教導感化の実を挙げ以て学生生徒児童の思想を善導し其の帰趨を誤らしめざるやう勤めらるべし。

〈警務局主管13 学生運動の取締に関する件〉

最近激増せる疆内各種学校の盟休事件は昭和2年以降殆ど共通的に民族主義的及共產主義的傾向を帯び来り其の実行方法も最初より計画的組織的に行はれ単なる年少学徒の行動とのみ見るべからざるものあり殊に昨年11月全羅南道に於て勃発せる所謂光州学生事件竝に之に関連して起りたる不穩行動及京城・平壤・咸興・春川・東萊等の各地に於ける公私立中等学校生徒の動揺盟休等に就き其の状況を仔細に観察するに其の運動手段方法等より見るも決して学生の創意に非ざるべく必ずや裏面に策動の深き根源あるものと認め所轄道に於て捜査の

歩を進めたる結果光州・京城に於ける事件は国際共産党の学生指事方針に基き朝鮮に於ける共産主義者等が各学校の子女に糾合煽動して秘密結社を組織し預て主義の教養に努めつつありたるものにして偶今回の事件発生を機とし之を利用して不穏なる事態を惹起こせしめんとして画策せられたるものなること判明せり蓋し純真にして春秋に富む学生を駆つて主義運動の渦中に投じ或は之を使喚教唆して不穏行動に出でしめ其の前途を誤らしむるは寔に寒心に堪へざる次第なれば各位は平素一般学生思想・言動・主義及思想団体との交遊連絡等に関しては深甚の注意を払ひ苟も事案発生するに於ては極力裏面策動の本源を究め之が禍根を芟除し以て青年学徒の将来を誤らしめざるやう努めらるべし。

上記により、前年の11月及び12月の光州学生運動に関連する学生の動きは総督府にとって、軽視すべからざるものであったことが分かる。この事件を、「学生の創意によるものではなく、共産主義者等が各学校の子女を糾合煽動して秘密結社を組織して起こしたものであり、さらにはこれを利用して不穏なる事態を惹起しようと画策している」ものと捉え、「思想運動の根絶に全力を尽くさん」ために、刑務局から指示を出す等の対策を取っていることが分かる。

姜在彦は、総督府の対応の結果を以下のように綴っている。

このように光州学生運動は、其の中心舞台が11月の光州から、12月のソウルに移り、公然または非公然、社会主義または民族主義的諸団体との結合によって、民族運動全般への発展を志向したが、日本官憲の先制的弾圧によってそれは十分に実ることができなかった。しかし同盟休校と冬季休暇によって帰郷した生徒たちによって、新聞紙上では厳しい検閲のために断片的にしか知りえなかった光州学生事件の真相が各地に伝わるにしたがって、運動の火種は朝鮮の津々浦々にひろがる結果となった²⁰。

5. 光州学生運動—その後

① 梨花女高普生徒の抵抗運動

1930年1月15日午前9時30分、市内の9女子校と5男子校で、一斉に「万歳」の声が挙がった。官憲は既にこの計画を察知し、早朝から各校に待機し警戒していた。梨花女高普はこの示威運動で中心的役割を果たし、「梨花女学校事件」と呼ばれるほどの活発な動きを見せた。『梨花百年史』には、その状況が以下のように記されている。

1930年1月15日、全校生が運動場に集まって万歳を叫び、プラカードを持ってスローガンを叫びながら校外に出て行こうとしたが、警察に止められ、校外に出られなかった。そしてプラカード60枚を取り上げられ、主導者が逮捕された。また、主導者の搜索に非協力的だったソ・グァンジン先生が17日に検挙され、18日に新たに梨花の生徒17人が検挙され、合わせて57人の被検挙者のうち、15人は放免され、42人は引き続き取り調べを受けていた。16日から20日までを休校としたが、事態が収拾されなかったため休校はさらに1ヶ月延長された。18日、学校側は崔福順、林敬愛、アン・イムスン、ナム・ドクンなど12人を退学させ、楊元淑、金鎮賢、崔允淑など数人を無期停学とすることで事態の収拾を図ろうとした。しかし、学生運動はさらに広がり、ソウル市内の30校でもそれに賛同した12,000人が抵抗運動に出るといった結果となった。女学校としては梨花、培花、淑明、進明、貞信、女子商業、同徳、檀花、実践女子美術の9校が参加し、男子校としては培材、養正、普成、第一普高など16校が、

さらに専門学校6校が参加した。

『事件資料』は1月15日の梨花女高普の動きを、次のように記録している。

京城私立梨花女子高普生は始業と同時に喧躁し、2尺四方の白布に「学校警察侵入反対」「植民地教育政策全廃」「光州学生事件に対し憤慨」等墨書せる大旗並旧韓国旗及赤布又は白紙に「無産階級開放万歳」「被压迫民革命万歳」等と記載したる小旗を各自振翳し喊声を揚げて校外に脱出せむとしたるを以て教師1名生徒50名を検束す²¹。

さらに、京城府内私立学校動揺状況として梨花女高普の欄に、不穩行動参加生徒数約600名、不穩行動の内容として以下のような記述が残っている。

第1時間目授業中、3年の動揺と共に全校生徒校庭に集合、白木綿製旗に『学校警察侵入反対、光州学生事件に対し憤慨、学生犠牲者全部釈放』等数項目の不穩字句を記入せるもの及赤旗、旧韓国旗紙製小旗多数を翳して喧躁、万歳を高唱し、隣接培材高普生徒を誘引せんとして阻止されたる為、警戒員に悪罵、反抗的態度に出で窓硝子を破壊する等の暴行に出でしを以て首謀者生徒50名、教師1名を検束、鎮静せしむ²²。

すなわち、梨花女高普の動きは以下のように要約することができよう。

全校生徒が校庭に出、用意したビラと赤旗・旧韓国旗等をかざして万歳を叫んだ。60余名の官憲が校門でさえぎったが、一部の生徒はこれを振り切って、旗を先頭に向いの培材高普へ走り寄り、同校600余名の男子生徒と共に万歳を叫び、呼応しあった。出られなかった生徒たちは窓ガラスを壊し、教室で演説・痛哭するなどした²³。

1月15日から3日間で、京都市内の私立学校22校、生徒数約5,000名がこれらの動きに加わっている。検束者数は410名を上回り、梨花女高普は16日から1ヶ月間休校となった。

その後、3月1日には、3・1運動を記念して再起計画が組まれたが、一大抵抗運動に発展することを恐れた日本の警察は周到な体制をとった。その結果、翌2日の「東亜日報」は、機先を制した警察側の各校撃破によって散発的な「理由の分からない盟休」で終わったと報じている²⁴。

総督府は、2月以降の暴動発生事件の概況を伝えながら、多少の動揺はあるが、「概ね平穏に経過し学生事件も今や終息の観あり、警戒に努めたる結果、平穏に経過す²⁵」等と概況をまとめている。それは、方々で発生する学生の動きを権力で押さえ込んだ結果であり、梨花女高普でもこの時期の表面的な動きは皆無である。

② 処分の状況と解放後の顕彰

『梨花百年史』には、「この運動に同調して参加した学校の総数は、全国194校で、参加学生は54,000人を数え、これによって退学処分を受けた学生は582人、無期停学が2,330人、そのうち送検された学生は1,205人にもものぼった」と記されており、他の資料との間に大きな相違はみられない²⁶。1930年1月15日の行動によって、金貞玉が証言するように、崔福順をはじめとする11人が検挙されたのであり、学校関係者に関する情報は以下のとおりである。

1月18日、学校側は崔福順、林敬愛、アン・イムスン、ハム・ドクンなど12人を退学させ、楊元淑、金鎮賢、崔允淑など数人を無期停学とすることで事態の收拾を図ろうとした。しかし、学生運動はさらに広がり、市内の30校でもそれに賛同した12,000人が抵抗運動に出るという結果となった。(略) 1月31日、崔福順ら11人が検事局に送検された。3月19日には初公判が京城裁判所で開かれ、20日に求刑が出され、23日に刑が言い渡された。崔福順、金鎮賢、

崔允淑、林敬愛は懲役刑を受け、ハム・ドクン、キム・ボンニム、チェ・ヒョンス、楊元淑、アン・イムスン、イ・オンニョンは執行猶予で釈放された。彼女たちの裁判には李仁、許憲、ヤン・ユンシクという3弁護士²⁷の無料弁護と、減刑を陳情したソン・ジヌ東亜日報社長の力が大きかった。この事件に関連してクス会（権友会）の許貞淑、女子商業の宋桂月も懲役判決を受けた。

梨花学生の屋根裏部屋での秘密集会を可能にした隠れた愛国者として、当時の教師ソ・グァンジンとソ・ミョンハク^{ママ}の他に、当時の寄宿舎の舎監朴敬淑を挙げることができる。朴敬淑は1929年11月の集会と、それ以降続けられた秘密集会を密かに知っていたにもかかわらず、学生たちを保護し、秘密を漏らさなかった。一方、梨花で何か事件が起こりそうになるたびに西大門警察署では予備検束を行った。

愛国者としての彼女らの真情に想いを馳せながら、梨花女子高等学校は「解放後、この運動で退学、除籍された愛国学生たちに、1945年と1950年の2回にわたって卒業証書を授与」という措置を執ったのであった。ここに崔福順も含まれていただろうが、金貞玉が望むような形で『梨花百年史』に崔福順の名が記され、顕彰されることはなく、金自身の名もどこにも記されていない。

③ 崔福順が影響を受けた権友会

京城市内の女子校が一斉に万歳を叫んだ示威運動は、「梨花女学校事件」と呼ばれるだけでなく、「権友会事件」とも呼ばれる²⁷。この運動が権友会の指導の下に行われたからであり、梨花女高普の主導者崔福順は権友会メンバーとして重要な任務を担っている。ここでは権友会における崔福順の動きを概観しておきたい。

権友会は、朝鮮女性団体の統一戦線として、1927年5月27日に創立した。1919年の3・1運動後、各地に誕生した女子青年会や基督教女子青年会は、夜学や講演・討論会を行うなど活発に活動していたが、それらは女性の啓蒙活動に過ぎず、階級解放を掲げた最初の女性団体「女性同友会」が1924年に結成される。しかし、メンバーの対立等により幾つかに分団後、26年になってようやく女性運動統一の気運が高まり、社会主義陣営及び宗教団体等左右両陣営の指導者が集まって組織されたのが「権友会」である。金貞玉の叔母であり梨花の総長でもあった金活蘭も結成当時の指導者の一人である。男性側の統一戦線としては、27年2月に新幹会が結成されている。

権友会は40の支部を基盤に労働争議の調査や全国的な夜学の開設などを通して女性の団結と地位向上を目指した他、「教育の性差別撤廃と女子の普通教育拡張」も決議し、学生の同盟休校に対しても関心を持った²⁸。許貞淑は、「女性同友会」の設立時から幹部として活躍し、京城の女子学生示威運動も指導した。それは、12月9日の運動への反省から始まる。男子に比べ、女子は無関心・無気力であり、何かしなければならぬと考えたからであり、その背景は以下のように記録されている。

権友会幹部許貞淑、禹鳳雲等会員数名は男子側生徒検束の実状を目撃し……多数の犠牲者を出し居るに拘はらず女学生側は恰も無関心の状態に在るは甚だ遺憾とする処なるのみならず、全く鮮人女性徒の無気力を表明するものに他ならずとなし……権友会として何等かの対策を講ぜざる可からずと為し……同夜（注：12月9日）は許貞淑方に於て同人及朴次貞、梨花女子高普代表崔福順の3名のみ会合、新学期開始と同時に京城府内各鮮人側女学校をして一斉に不穩行動を断行せしむべく協議し、各学校に対する連絡は崔福順単独にて之を為す

こととしたるも、次の学校に関しては知己なき関係上、許は多少知己の関係ある者を指名せり²⁹。

上記のとおり、この会合で、崔福順は連絡者の役割を任せられているが、そもそもは崔福順の方から許貞淑を尋ねて自分の意思を伝え、賛同を得たため上記の話し合いに至ったと言われている³⁰。しかし淑明の4年生が卒業を目前にしているから等の理由で決起に反対するなど足並みがそろわず、冬休みに入ったこともあって連絡は徹底しなかった。だが、母親が心配すると言って賛同しない学生がいると、崔福順は「母親に対する孝行より、この運動の方がもっと重要ではないか」と言って勧誘した³¹ようであり、崔福順の意気込みの程が伝わってくる逸話である。

次に各校の代表が集まったのは1930年1月14日夜のことである。梨花の崔福順、崔允淑、金鎮賢が連絡に奔走して各学校に連絡を付け³²、14校から50人程が集まった他、3名の男子学生も参加し、男子校への波及の準備もできた。15日午前9時半を期して各校の女生徒が一斉に立ち上がり、鍾路に集合して街頭示威をすることを決定し、「警察官に対しては故意に反抗してその憤怒を激成せしめ、殊更に苛酷なる取扱を為さしめむべく誘導し、一般民衆の同情と昂奮とに依りて一大民衆運動を誘発」すること、検束されたら留置所で同盟断食し、この会合の参加者と内容を秘密にすること等を申し合わせた³³のであった。

1月15日の運動決起の背後には、他校の女学生たちが卒業期であることや冬期休業中であることを優先する中、崔福順、崔允淑、金鎮賢3名の純粋な真情による各校への奔走があったのである。三人の努力が梨花女高普にも影響を与え、「梨花女学校事件」と呼ばれる程の行動につながったことが分かる。

1月15日には、梨花女高普生を含む140名前後の女学生が検束され、前述のように、梨花女高普は1ヶ月間の休校となった。1月31日、80余人の女学生と権友会関係者が検事局に送られ、うち55人は不拘束となり釈放された。そして、残る30余人中、権友会の許貞淑、梨花女高普の崔順副、崔允淑、林敬愛、金鎮賢、梨花専門学校の李順玉、女子商業学校の宋桂月、女子美術学校の朴桂月の8人が保安法違反で起訴されたのである。

公判が開かれたのは3月18日である。崔福順は「同じ学生の立場から[光州の]彼らに対する官憲の差別的処罰に同情せずにはおられなかった」と動機を述べ、「一斉に万歳を示威し、××な処罰で拘禁・呻吟する学生の釈放を要求したのである」と答えている³⁴。翌19日の検事論告では、指導した許貞淑に懲役1年、崔順福に同10ヶ月、他6名に同6ヶ月の求刑がなされた。判決言渡しは3月22日で、許貞淑—懲役1年、崔福順—懲役8ヶ月、李順玉—懲役7ヶ月・執行猶予4年、他5名—懲役6ヶ月・執行猶予3年とされた。執行猶予の6人は25日に出獄し、実刑を受けた許貞淑と崔福順は控訴権を放棄して服役している。

権友会という統一戦線が存在したが故に実行できた運動ではあったが、強まる官憲の弾圧に対しその運動を維持することはできなかった。キリスト教系の女性が権友会の主流となるや、社会主義系の女性たちは支部会単位で解消を決議し始め、同会は1931年に自然消滅している。

まとめ—アンケートに残る光州学生運動とその意義

金貞玉と同世代の人々にとって、光州学生運動に関する想いは強弱の差こそあれ忘れ得ない情景であり、事件であった。それがアンケートには明確に残っている。回答者は1927～36年の卒

業生であり、それ以後の卒業生になると「光州学生運動」に対する言及は皆無となる。

「1929年、光州学生事件があった朝、運動場に出て万歳を唱える学生たちを警官が教室に追い入れて、問題学生を呼んで警察へ連れて行くということがあった。長井先生が心配そうなお顔で『お入りなさい。騒がないことよ』と慰労してくれた優しい姿がいつもうかんできます。」

「影響を与えた事件：光州学生運動」

「先生方は皆韓国の独立を望む方々でした。光州学生事件の時、先生は学生たちを助けてくれました。私たちの学校では先生たちがみんな愛国心が強く、私たちもそれを受けて、私たちの間では日本語を使いませんでした。」

「光州学生事件の時、謀議に参加したが、さいわいにつかまらなかった。だがその時、排日精神、民族精神が定着した。」

「学生たちは民族精神が強く三・一運動の時は柳寛順女学生³⁵が刑務所でなくなり（反日運動）、光州学生運動の時は、梨花の女学生が主動になった。その時、金活蘭のような社会人士がたくさんいた。」

「影響を与えた事件は光州学生事件、影響を与えた人物は林敬愛さん。」

「光州事件の時、聖書担当の徐先生と一緒に警察に呼ばれた。その時、先生が日本の刑事に殴られたことが忘れられない。」

「梨花では日本の先生を除いて先生方は愛国心が強く、その先生方が反日精神、愛国心を起こして下さった。光州学生運動の時、警察と刑務所で学生たちを励ましながら、反日精神を強くした。」

上記のように光州学生運動に遭遇した世代は、そこに直接参加し、見聞きする中で、時代の荒波を乗り越えていく強さと自立心を形成しているが、それは梨花で教えられたと回想する卒業生が多い。以下は、その中の幾人かの回想である。

「高等学校の教育を通して世界をよく知るようになって、政治にも少し目を開くようになった。思春期だったので、感受性も理解力も高かった。自分の国のため何かをしなければならなかったと考えた。自分の人生の中で一番重要な時期だったと思う。希望も理想もあった。何でも出来ると自信に溢れていた。」

「信仰を通して植民地政策の圧迫と苦痛を乗り越えることができました。信仰を通して希望を持ちました。」

「基督教教育のため、愛国の念強く、信仰生活の基礎を築きあげる原動力になり、84歳の老後にも関わらず、強靱な精神と奉仕生活に忠実に励むことができると、女学校・梨花に対して感謝する。」

「女学校の教育は、自分の人生の中で進学・職業・結婚など、自分がやりたいことを考えて決める重要な教育でした。」

女学校での教育の意義を「自我啓発」と一言でまとめた卒業生もいるが、植民地下における学生運動は、女性の自立・解放の一端をも担い、影響を与えたことが窺える回答であった。

金貞玉の回顧談の中心は、光州学生万歳事件が起り、全国的に波及していく時期のごく初期のものである。しかし、新学期開始後、運動が全国的に拡大し、1930年1月8日の開校と共に、あちこちの学校で学生の白紙同盟、街頭示威、登校拒否等が続く。梨花女高普でも崔福順、崔允

淑、金鎮賢が権友会や他の学校の人々と共に街頭示威に参加し、1930年1月15日の梨花女高普の不穏行動に発展していく。金貞玉が運動の主導者として認めて欲しいと願っていた崔福順に対し、梨花女高普は1月18日に「退学」の措置を取る。1月31日には検事局に送検され、3月19日初公判、20日求刑、23日8か月の懲役判決を受けた。

崔福順がどのような最期を迎えたかは定かではない。金貞玉は、3ヶ月間の寄宿舎での監禁生活の身となり、崔福順とはその後、直接相まみえることはなかったのではないだろうか。少なくとも崔福順、崔允淑、金鎮賢は「1930年卒業」となるべき在籍者であり、4年生の揚元淑も卒業を控えていた一人であるが、梨花の卒業生名簿には1930年が存在しない。その厳粛な事実の裏には上述してきたような歴史が詰まっていたのであり、深い寂寥を感じる。

当時の学生運動の特徴は、学校教育における植民地教育政策との対決に始まり、それらを大きくは反帝的民族運動や階級闘争に結びつけていくものであった。姜在彦は「解説」の最後でこの運動を以下のようにまとめている。

1929年10月30日、朝鮮人生徒と日本人生徒との些細なトラブルから始まった光州学生運動は、ほぼ4ヶ月間に国際的ひろがりをもって進展した。この過程の中で先導的役割を果たした学生運動は、日本警察の機先を制した検挙と監視とによって、一般民衆運動と結合し得なかった欠陥はありながら、朝鮮における植民地教育政策への反対意志を行動をもって示し、反帝民族解放運動の重要な一環として大きな意義を持つものである³⁶。

金貞玉の見聞きしないところで、実は「崔福順」の名は多数記されており、その行動も詳しく記録されている。それは、金の望むような形ではないのだが、お会いする前に光州学生運動についてもっとよく学び、崔福順や光州学生運動に言及した文献を持参すべきであったと、悔やまれてならない。

注

- 1 鄭世華「韓国近代女性教育」からの一文であり、原文は梨花女子大校韓国女性史編纂委員会編『韓国女性史Ⅱ』に所収されている。同著は翻訳後、高等女学校研究会プロジェクトチーム編『高等女学校に関する調査資料No.7（韓国の女子高等普通学校・高等女学校の分）』（2000年）に掲載した。引用文はp.88。以後同著からの引用は、『調査資料No.7』を使用した。
- 2 日本の保護国となった大韓帝国では、1906年に教育制度を保護国の情勢に適合するよう改編した。「普通学校令」により初等教育機関の名称を小学校から「普通学校」に改め、1938年には内地の法令に準拠して尋常小学校と改称した。朝鮮人女子に対する学校教育の開始は1876年の開港以降のことであり、その後設立した多くの私立学校も、1908年の私立学校令により、学校の設立基準、教員の採用、授業の内容等が厳しく統制されたため、順調な発展を遂げるには至らなかった。淑明、進明、梨花、培花、同徳などの私立高女が、厳しい統制をくぐり抜けて存在してきた数少ない高女である。1911年の朝鮮教育令により、日本人向けの教育機関とは別に朝鮮人向けの教育機関が組織され、日本人女子は4年制高等女学校へ、朝鮮人女子は3年制女子高等普通学校へという別々の進路が制度化された。1938年の教育令改正によって、ようやく女子高等普通学校は組織上高等女学校に一本化されたが、認可校の多くは私立高女であった。梨花女高普では、1910年、韓国併合の年に4年制の大学科が、1915年には幼稚園師範科が設置された。1925年には専門学校に転換し、専門的な指導者養成学校

として認められるようになった。現在では、人文、社会科学をはじめ、自然科学、工学、医学、薬学など12学部を擁し、女子大学としては世界最大規模の大学に発展している。

- 3 鄭前掲書、p.88
- 4 丁堯燮著、柳沢七郎訳『韓国女性運動史』、1992年、高麗書林、p.198
- 5 高等女学校研究会会員の山本禮子（和洋女子大学教授）、福田須美子（相模女子大学教授）、太田孝子がインタビューを主とする調査に参加した。
- 6 金活蘭は女性運動家、教育者。雅号は又月、‘活蘭（ファルラン）’という名前は、洗礼名ヘレンの漢字表記である。1899年に仁川で誕生。1907年に梨花学堂に入学、小・中・高等科を経て、1918年に大学科を卒業した。しばらく教師として勤務した後、アメリカに留学。ウェスレアン大学、ボストン大学大学院を卒業して梨花女子専門学校教授に就任した。1930年に再度渡米し、コロンビア大学大学院で朝鮮人女性初の博士号を取得した（論文は「朝鮮の復興のための農村教育」）。1932年9月、梨花女子専門学校副学長に就任。YWCAの事業に打ち込み、農村指導に力を入れたが、1937年から朝鮮総督府が主管する親日団体である放送宣伝協議会、朝鮮婦人研究会、愛国金釵会などに参加し、1941年には国民総力朝鮮連盟評議員及び参事として活動した。その頃、「婦人同士の愛情と理解—内鮮婦人の愛国的協力のために」（『東洋之光』1939年6月号）、「徴兵制と半島女性の覚悟」（『新世代』1942年12月）、「男子に負けないよう皇国女性としての使命を完遂」（『毎日新報』1943年12月25日）などの文章・記事を雑誌や新聞に発表する一方、「女性の武装（1941.12.27、於：朝鮮臨戦護国団主催の婦人大会）」、「大東亜建設と私たちの準備」（1942.2.15、於：府民館でのシンガポール攻略大講演会）などの親日的講演を行った。そのため、2002年に「民族の精気を立て直す国会議員の会」が発表した「親日・反民族行為者」リストに載せられている。8・15独立後には、1945～61年まで、梨花学堂理事長兼梨花女子大学校長に在任。1950年に大韓民国公報所長に就任した他、大韓女子キリスト教青年連合会理事長、大韓赤十字社副総裁、韓国女学士協会会長、ユネスコ韓国委員会執行委員など様々な団体で活動し、国際連合総会韓国代表をはじめとし、数十回にわたり国際会議に参加した。1963年には大韓民国章、マグサイサイ賞（公益部門賞）、The Upper Room 賞を相次いで受賞した。5つの名誉博士号を授与された他、外交発展に貢献した功績が認められ、1970年に1等修交勳章が授与されている。同年死去。
- 7 鄭前掲書、p.116
- 8 同上、p.117
- 9 金貞玉著『叔母 金活蘭』は韓国で1977年4月に刊行、1998年11月に再版されている。
- 10 金貞玉は朝鮮式体罰だと言っているが、この方法は第二次大戦中において日本の軍隊が中国人にも適用したことが野田正彰『戦争と罪責』（岩波書店、1998年）等にも記されている。
- 11 梨花女子高等学校『梨花女子高等学校100年史』（1994年12月刊、『梨花百年史』と略記）及び梨花女子大学『梨花女子大学100年史』（1994年5月刊、『大学百年史』と略記）は、翻訳後、高等女学校研究会プロジェクトチーム編『高等女学校に関する調査資料 No.8』に掲載した。以下、同書からの引用に関してはページを付記しない。
- 12 若生みすず「光州学生運動と権友会」、むくげの会編著『植民地下朝鮮・光州学生運動の研究』所収、1990年、むくげの会刊、pp.30～31

- 13 金マリアは、1893年6月18日黄海道長淵郡の富豪の家に誕生した。この地はアメリカ北長老教会の初期の伝道地で、マリアの両親は宣教師アンダーウッドから洗礼を受け、三番目の娘にマリアと言う名前を付けた。しかし、マリアは4歳の時父に死別し、10歳の時に母にも死別したが、母はマリアの姉に「聡明なマリアを外国に留学させるように」と遺言していた。北長老教会の経営するソウルの貞信女学校に入学し抜群の成績で卒業したマリアは、一時母校の教師を勤めた後、日本の広島高等女学校（現、広島女学院）を経て、東京に移り、貞信女学校と同じ北長老教会系の女子学院に入学した。1918年に東京留学生独立団に参加し、東京女子医専の学生黄愛徳と出会う。東京留学生による「2・8独立宣言」があった後、朝鮮国内での独立運動工作のため2月17日に帰国した。その後各地で活動を続けたため、金マリアと黄愛徳は3・1運動に関連して保安法違反嫌疑で収監されたが、同年8月5日に予審免訴で出獄、愛国婦人会秘密地下組織の会長として活躍した。しかし、同年11月28日には兩名他幹部10人が逮捕された。金マリアは3年の刑を受けて服役したが、1920年に病気のため保釈となり、療養中の1921年に上海へ脱出した。上海では臨時政府の黄海道代議員、在上海愛国婦人会幹部として活躍したが、南京金陵大学を経て1923年米国に亡命した。翌年ミネソタ州のパーク大学文学部に入学し、苦学しながら卒業したが、その間も独立運動を続けている。1933年に帰国後は、教育を通して若い人々を独立戦線に立たせようと決意し、元山のウィルソン神学校に勤めた。日本官憲は神学校の門を閉じるよう命じたが、金マリアは最後まで後輩の養成に専念し、1945年3月13日平壤の病院で死去した。祖国の独立のために献身した53年の生涯であった。（丁堯燮著・柳澤七郎訳『韓国女性運動史』、高麗書林、1992年、大島孝一「金マリアと日本—3・1独立運動のころの女子留学生」、『季刊三千里』17号所収、1979年2月、を参照。）
- 14 『光州抗日学生事件資料 朝鮮総督府警務局極秘文書』は1979年に風媒社より刊行されている（全424ページ）。
- 15 同上（姜在彦解説）、p.29
- 16 同上、p.30
- 17 同上（状況摘録）、p.67
- 18 同上（姜在彦解説）、p.21
- 19 『文教の朝鮮』第54号、昭和5年2月1日発行、朝鮮教育会（復刻『文教の朝鮮』第22巻、エムティ出版）、pp.119～124
- 20 前掲『事件資料』（姜在彦解説）、pp.32～33
- 21 同上（状況摘録）、p.74
- 22 同上（影響 其の二）、p.173
- 23 若生前掲論文、p.32
- 24 姜在彦「1920年代の抗日民族運動」、『季刊三千里』39号所収、1984年、p.212
- 25 前掲『事件資料』、p.125
- 26 朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配』p.326では、参加学校数194校、参加学生数約6万人、退学処分者数582人、無期停学者数2,330人、被検挙者数1,642人となっている。
- 27 若生前掲論文、p.28
- 28 同上、p.29

- 29 前掲『事件資料』、p.209。知己のない学校は、女子商業学校、女子美術学校、槿花女学校、淑明女高普、新明女高普の5校であり、それぞれの連絡係を指名した。
- 30 丁前掲書、p.198
- 31 同上、p.198
- 32 その様子は、「新学期開始後1月13日、更に裏面行動を開始し梨花女高普崔福順、崔允淑、金鎮賢の三名主として奔走、各学校に連絡を取り1月14日夜の会合に於いて具体的協議を遂げるに至りたり」と記されている（『事件資料』、p.210）。
- 33 同上、p.210
- 34 若生前掲論文、p.34。これは『朝鮮日報』（3月20日付）に掲載された記事である。
- 35 柳寛順（1902～1920）は、忠清南道に誕生。父は開明的な人物であり、「興護」という私立学校を設立したが多額の借金を抱えたため、貧しい家庭に育った。アメリカ人宣教師の援助により、梨花学堂に給費生として入学した。1919年、3・1運動が勃発すると、総督府から各学校に休校命令が下ったため故郷に帰った柳は、教会関係者などを通じて万歳デモを計画、4月1日に市場に集まった群衆に対して独立運動の演説を行い、デモ行進に移った。この時、憲兵の発砲により父母が死亡した。柳はデモを主導した罪で懲役3年が宣告されたが、獄中デモを主導するなどの抵抗を続けたと言われている。1920年10月、西大門刑務所内で残酷な拷問により獄死したとされるが、死亡日時には諸説ある。1962年、韓国政府がその功績を認めて「建国勲章」を授与し、独立烈士と呼ばれるようになった。『梨花百年史』には「殉国少女‘柳寛順’」として十数ページにわたり柳の生い立ち、3・1運動での活躍の内容、裁判記録などが克明に綴られ、記念碑文、記念歌、追悼歌、追慕歌、柳寛順烈士語録等が詳細に記されている。かつて筆者が梨花高女を訪問した際にも、校長室に柳寛順の胸像が飾られていたのを記憶している。
- 36 前掲『事件資料』（解説）、pp.38～39

岐阜の伊奈波の芝居小屋

— 末広座と国豊座 —

Theaters in *Inaba* area of Gifu: *Suehiro-za* and *Kunitoyo-za*

土谷 桃子

要旨：

明治初年、岐阜の伊奈波神社の近隣に末広座、国豊座という芝居小屋が開場した。同地域は明治以前から繁華な地であったが、明治期に入ると「座」を名乗る小屋が複数開場し、「伊奈波三座」という呼称も生まれた。本稿では、伊奈波三座のうち、規模が大きく本格的な芝居を上演し得た末広・国豊両座を取り上げ、両座の開場時期や存在地、開場後の変遷について、現時点までの調査（関係者との面談、文献資料）で判明した事実を述べた。末広座は個人が開いたもので、焼失の憂き目に遭って再建されている。一方、国豊座は会社組織で運営されており、末広座焼失の間は唯一の本格的な芝居小屋であった。岐阜での興行には東西から役者が訪れているが、今回は、雑誌や新聞の記事が比較的多く残っている、東京の大物役者9代目市川団十郎、5代目尾上菊五郎、初代市川左団次の両座での興行実態を洗い出した。その結果、彼らが名古屋の興行の間に岐阜を訪れていることや、末広・国豊両座で役者を取り合う事態もあったこと、役者たちが岐阜興行の際に鵜飼などの岐阜の風物を楽しんでいたことが明らかとなった。今後は、両座の興行実態を時系列に整理すると同時に、上方役者や地元役者の動向を解明する必要がある。

はじめに

岐阜の伊奈波神社界隈は、濃尾地震（明治24（1891）年10月）等の影響で娯楽の中心地が柳ヶ瀬に移るまで、芝居や見世物が集まる繁華な地であった。明治期には「伊奈波三座」と呼ばれる末広座、国豊座、相生座（あるいは花角座）があったと伝えられる。

筆者は以前「板垣退助岐阜遭難の芝居～明治十五年の作品を中心に～」(『岐阜大学国語国文学』38、2012.3)を著し、岐阜の末広座において明治15年7月18日から板垣遭難劇「花吹雪伊奈波の黄昏」が中村七賀十郎一座によって上演されたことを述べた。現在の伊奈波神社近辺には、芝居小屋があったことをうかがわせるものは皆無であり、いったいどこに末広座があったのだろうかという素朴な疑問が生じた。末広座や本稿であわせて取り上げる国豊座については、『岐阜市史 通史編 近代』（1981）や『岐阜県史 通史編 近代下』（1972）に記載があり大いに参考になるが、より詳細に調べてみたいとの思いが募り、調査を開始した。調査はまだ道半ばであるが、現時点までに判明した事柄も少なからずある。本稿は中間報告として、伊奈波地域の芝居小屋の双壁である末広座と国豊座について述べることにする¹⁾。両座の姿を浮かび上がらせることが、同地域の明治期の芸能状況を明らかにする端緒となることを期待している。

1. 末広座 ～開場とその後～

末広・国豊の両座は、岐阜で最初に「座名」をつけられた古い劇場であるが（『岐阜市史通史編 近代』、p.1056）、両座が設けられる以前から伊奈波地域は賑わいの地であった。江戸時代について言えば、東伝寺人形浄瑠璃の興行（延宝4（1646）年～）、辻能興行（享保14（1729）年～）、岐阜大桑町の孫兵衛による歌舞伎芝居興行（享保16（1731）年以降～）が行なわれ、『天保十一年伊奈波神社境内図』（伊奈波神社蔵）には、「芝居小屋」「茶店」「揚弓小屋」が記されている。同地における江戸時代の芝居についての論考としては、岩佐伸一「岐阜いなば芝居と七代目団十郎」（岐阜県博物館『平成十三年度秋季特別展 七代目団十郎と国貞、国芳』図録、2001）があり、江戸期については約三十点の番付が確認できると指摘している。

この伊奈波地域に、いつ「座」を名乗る劇場が始まったのか、資料から類推していく。まず、末広座であるが、明治9年1月6日の『貳大学区愛知新聞』に以下の記事がある（空欄挿入、下線筆者。以下の引用にても同様）。

岐阜県旧官邸ヲ^{ヒラキ}開拓シテ一條ノ市街ヲ成セリ 此レヲ^{スエヒロ}末廣町ト云フ 新築ノ芝居小屋ガ出来マシテ 本月三日舞台開ヲ致シマシタ ^{ヤクシヤカンジャク}倡優翫雀中村賀七などにて ^{ヒイキ}最貞連中の ^{リツハ}幕水引立派に三番叟が有ましたと申うわさです

記事中の「旧官邸」は、現在の岐阜市新桜町から末広町にかけて存在した尾張藩の岐阜奉行所のことである。記事には座名が明記されていないが、『岐阜市史 通史編 近代』にある「末広座」番付－明治九年第一月吉日より岐阜末広座にて。（p.1056）に挙げられている主な役者に中村翫雀、中村賀七があり、新聞記事と一致することから、この「新築ノ芝居小屋」が末広座だと考えられる²⁾。

年代から考えて、この中村翫雀は幕末から明治初年に上方中心に活躍した3代翫雀（1841～81、文久3（1863）年襲名）であろう。中村賀七は、尾張名古屋の芝居に勤めることが多かった4代中村嘉七（1817～81）である。明治8年正月に七賀助を中村嘉七に改めている（『近代歌舞伎年表 大阪篇』1、p.272）。嘉七については、坪内逍遙が「少年時に観た歌舞伎の追憶」の「10章 実川延若と中村七賀助」で絶賛している³⁾。嘉七及びその一門と思われる「七賀」を名に持つ役者たちは、明治期にしばしば名古屋で興行し、近隣の岐阜にも訪れている⁴⁾。末広座の柿落しの舞台の役者に嘉七は適任である。

『岐阜市史 通史編 近代』には同年10月の番付（p.1057）もあり、嵐三五郎（6代、1851～1925、明治8年襲名）、嵐璃笑（2代、1849～1886、同5年襲名）といった名が見える。8年以降で筆者が確認できたのは15年の興行で、その間の末広座の動向は謎である。同座は、名古屋の『扶桑新報』が19年11月30日紙面に「去廿八日岐阜通信」として「末広座焼失 昨廿七日午後六時頃 当地末広町の同座にては 失火の為焼失及び類焼家屋二棟許りありたり」と掲載しているように、火事による焼失の憂き目に遭っている。そして、その後の再建も速やかではなかった⁵⁾。

先に述べたように、現在の伊奈波神社周辺には、芝居小屋があった名残は何もない。いったいどこにあったのだろうか。この疑問を解いてくれたのは、特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館編『ふるさと岐阜・魅力発見大作戦 岐阜町金華の誇り』（岐阜新聞社、

2009)であった⁶⁾。末広町を含む金華地区の歴史を多くの写真とともに丹念に記した書籍である。末広座について以下のようにある。

末広町は、新たに県都になった岐阜町の中心部にできた貴重な空き地だったので、新時代の賑わいが流れ込み、随一の繁華街に生まれ変わった。その中心は、明治七年ころにできた芝居小屋末広座（現国島歯科医院）で、団十郎を始め多数の名優が来演した。（p.62）

現在の国島歯科医院は、1979年築の4階建てのビルである。残念ながら末広座の面影はない。

場所が分かると、次に気になるのはだれが末広座を始めたのかという点である。この点については、末広座の所有者の後裔である国島幹名子氏から直接詳しくお聞きすることができた。

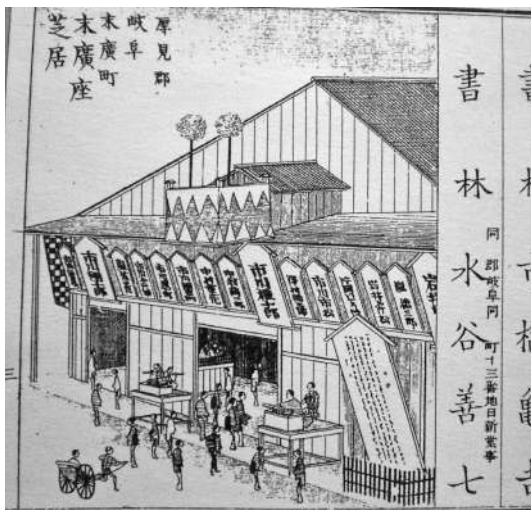
末広座の所有者は、国島氏の父である安藤作次郎という人物であった。安藤氏はもともと長良地域に住する一族であったが、末広町が新しく開けることに商機を見出し、同地へ移ったものらしい。作次郎は末広座のオーナーではあったが、没年から考えて明治10年頃の生まれであるため、彼自身が末広町への進出を決めたり、芝居小屋を開いたりしたのでは当然ない。おそらく作次郎の父安藤半助のアイデアであろう。末広町に移った安藤一族は、芝居小屋の他にも小間物を扱う勧工場「白木屋」を開くなど、同地の発展に尽力した。安藤半助、作次郎の詳細は不明である。今後の課題としたい。

三男である作次郎と長兄安次郎が写った写真も残されている。末広座には、上村松園の最初の師匠である日本画家鈴木松年（1848～1918）筆の緞帳があったのだが、その緞帳の前に作次郎と安次郎が並んでいる写真である。緞帳には「鈴木松年画伯筆」とある。末広座は昭和3年に火事に遭い、その際に緞帳にも火が移ったが、残存部分を生かして製作した屏風や、燃え残った端切れが保管されており、国島氏面会の折にそれらも見せていただいた。

国島氏によると、作次郎は真面目な人物で、芝居に熱中するような性格ではなかったそうである。軽薄のきらいがある役者とは交わらなかったが、各務原出身の役者市川百十郎（1882～1969）とは気が合い、よく行き来していたという思い出を語ってくださった。また、作次郎は、繁華の中心が柳ヶ瀬に移った後、出遅れたと言って残念がっていたという。しかし、もし作次郎が末広座を手離しその地が過去を知らない者の手に渡っていたら、平成の世に末広座の縁を尋ねることは不可能であっただろう。作次郎が末広町から離れなかったことに感謝しながら国島氏宅を後にした。

在りし日の末広座の姿を思い起こさせるものが2点ある。ひとつは、明治16年刊行の福井熊次郎編輯『農商工技芸 美濃乃魁 名所国産の手引』にある末広座の挿絵である⁷⁾。同書は美濃各地の名産・産業を全国に紹介するため、業種別に屋号・住所・取り扱い品目を記したもので、名所の挿絵も付されている。その1枚が「厚見郡岐阜末広町末広座芝居」と付された芝居小屋の絵で、役者名の看板が並んでいる。中央に市川権十郎、左端に市川団十郎、右端に下が切れているが岩井姓の役者名が確認できる。時期と役者名から類推するに、明治16年2月の末広座での団十郎一座の興行を写したものであろう⁸⁾。もうひとつは、末広座の鬼瓦である。1976年1月11日『岐阜日日新聞』朝刊掲載の「岐阜歳時記 伊奈波かいわい4 全盛築いた末広座」では、貸家として利用されていた旧末広座の建物に鬼瓦があることが記載されていることから、1979年に現在の4階建てビルに建て替える際に撤去されたと思われる。この鬼瓦は、現在岐阜県博物館に収

蔵されている。横77cm、縦（最大）47cmのずっしりと重い鬼瓦で、「末広」の文字がくっきりと浮かび上がっている。末広座が存在したことを雄弁に語っているように感じられた。



末広座の挿絵『農商工技芸 美濃乃魁 名所国産の手引』
(岐阜県郷土資料研究協議会復刊 1975)



末広座の鬼瓦（岐阜県博物館蔵 2014.10.23 撮影）

2. 国豊座 ～開場とその後～

国豊座がいつ開場したのかを明示する資料は残念ながら見当たらない。同座の最も古い資料は、管見では明治11年の役割番付（岐阜市歴史博物館蔵）である。「当る明治十一年寅の四月吉日より 岐阜稲葉桜町国豊座において」とあり、この時までには開場していたことは間違いない。演目は本朝出世鑑、妹背山婦女庭訓、男競三国湊で、役者名には実川延若、嵐三右衛門、中村雀右衛門等が確認できる。実川延若は、幕末明治初期の上方役者初代実川延若（1831～85）である。

少年時代を名古屋で過ごした坪内逍遙が、前掲「少年時に観た歌舞伎の追憶」で「10章 実川延若と中村七賀助」と題しているように、名古屋劇壇にも馴染み深い役者であった⁹⁾。岐阜での興行は、名古屋興行に前後して行なわれることが多く見受けられるのだが、この興行も同年5月の名古屋橘座の興行の役者名(『近代歌舞伎年表 名古屋篇』1、p.248)とほぼ重なることから、岐阜の後名古屋で一座が興行したと考えられる。名古屋に行くついでに岐阜に寄ると言うては言い過ぎだが、東西の芝居が集まる名古屋の地に近いことで、岐阜に豊かな芝居がもたらされていたことは事実である。

その後の国豊座の興行は、末広座と同様謎が多い。『岐阜市史 通史編 近代』には明治14年に松井須磨子が「白鳥の湖」を公演したとある(p.1058)が、根拠不明である。『岐阜日日新聞』で追うと、15年8月24日に、古川歌右衛門の一座が不人気で戯題替を相談中とあり、同9月17日には、首振り人形演劇が大入りとある。一方、この時期の末広座では21日から15代目岩井源水(松井の誤りか¹⁰⁾)一座の独楽廻し興行が行なわれている(同9月21日)。この後も末広・国豊両座で賑やかに芝居や相撲や見世物を興行し続ける。しかし、末広座が19年11月に焼失すると、国豊座の興行記録が際立つようになる。同座を末広座焼跡へ移転させる話もあったようだが¹¹⁾、末広座が後年再建されていることから、実現には至らなかったものと思われる。国豊座は濃尾地震で焼失したが再建¹²⁾、後に明治座、岐阜劇場と名前を変えて柳ヶ瀬に移転した。

国豊座がどこにあったのかを明らかにしてくれたのも『ふるさと岐阜・魅力発見大作戦 岐阜町金華の誇り』であった。同書によれば、現在賃貸マンション「イナバホームズ」が建つ地が国豊座跡地だそうである(p.68)。イナバホームズは伊奈波神社の登り口にある善光寺のすぐ目の前にあり、まさに盛り場の中心であったろうと想像される。同地にはイナバホームズ以前には紙器を扱う会社があったという(篠田氏、国島氏談)。

国豊座をだれがどう始めたのかは不明であるが、明治20年代後半には会社組織となっていたことが確認できる。岐阜の土地・産業・教育・警察等全般を調査した『岐阜県治一斑』の第1回実施分(明治28年)を見ると、「商業 会社」の項目に「国豊演劇合資会社 演劇場ヲ建設シ之ヲ賃貸若ハ演劇ヲ興行ス」とあり、「払込済資本金」が3,000円と記されている。同調査には67社が列記されているが、演劇に関する会社は国豊演劇合資会社のみである¹³⁾。国豊座の後身である明治座や岐阜劇場の経営母体から遡って調査することができるかもしれないが、現時点で明らかにできたのはここまでである。

3. 両座の興行資料

末広・国豊両座の姿を浮き彫りにするために、いつどのような役者が訪れていたのか、一覧を作るべく調査中である。現時点までに調査した資料、今後調査すべき資料を以下に列挙する。

【調査済資料】

A) 『歌舞伎新報』1号(1879)～2巻6号(1897)

同誌は、東京の歌舞伎新報社のち玄鹿館が刊行した演劇雑誌で、明治期の演劇研究に欠かせない資料である。東京の劇場を中心に、興行の筋書や劇評、時事情報等が豊富であるが、上方をはじめとした東京以外の地域の興行についても随時記載がある。同誌の「名古屋通信」

「名古屋便り」「音信」「雑録」等で岐阜に言及しているものを抽出した。

- B) 『明治十五年七月十二日～二十二年十二月二十九日「岐阜日日新聞」見出し一覧（発行順）』岐阜市歴史博物館、1988
『岐阜日日新聞』は、東京大学大学院法学政治学部研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫所蔵の原紙（明治15年7月12日以降）がマイクロ資料化されている¹⁴⁾。本書は15年から22年までの同紙の見出しを一覧にしたもので、手書き原稿がそのままコピーされているものである。見出しの取り方が21年分から簡略になり芝居関連記事はほぼ拾われていないため、21・22年については元資料に目を通して芝居に関するものを抽出した。
- C) 『岐阜市史 通史編 近代』岐阜市、1981
「第四節 芸能」内「伊奈波周辺の芝居小屋」に挙げられている末広・国豊両座の興行を整理した（pp.1054～1059）。
- D) 『岐阜県史 通史編 近代下』岐阜県、1972
「第一〇章 民俗」内「第三節 娯楽・観光」の「一 娯楽」に、演芸興行（一）、（二）がある。主に国豊座についての記載がある（pp.1005～1008）。
- E) 『近代歌舞伎年表 名古屋篇』1～2 八木書店、2007～08
岐阜の芝居に関連する記載を抽出した。
- F) 倉田喜弘編『明治の演芸』1～6 国立劇場調査養成部芸能調査室、1980～85
岐阜の芝居に関連する記載を抽出した。
- G) 清信重『岐高百年史』岐高同窓会、1973
芝居や見世物に関連する記載を抽出した。

【今後要調査資料】

- H) 『岐阜日日新聞』明治23（1890）年以降
B) がカバーしていない部分の調査が必要である。
- I) 該当年代の名古屋地区の新聞記事
岐阜地域で発行された新聞が欠けている時期については、名古屋の新聞を調べる必要がある（一部参照済）。有力紙と目される『金城新報』『新愛知』『扶桑新聞』等が対象となる。

A)～G)は、末広・国豊両座が芝居に限定した小屋ではなく、奇術、軽業、見世物、浄瑠璃等も行なわれていることを示している。また、芝居と言っても、経歴の分かる役者の興行がある一方、他では見たことのない役者名が並ぶ興行もある。芸妓芝居、女芝居もかなり頻繁である。このような雑多とも言える状況が、地方芝居小屋の生き生きとした姿だったのだろう。H)、I)の調査結果を盛り込んで、いずれ明治の岐阜の芸能の実態を一覧で示すつもりである。

現在までの調査で浮かび上がってきた両座をどう切り取って示すのがよいか、難しいところであるが、今回は、東京に基盤を置くA)『歌舞伎新報』が詳しいこともあり、東京の団菊左の岐阜での興行を取り上げることとした。

4. 団菊左の来岐興行

9代目市川團十郎（1838～1903）、5代目尾上菊五郎（1844～1903）、初代市川左団次（1842～1904）は「団菊左」と並び称された明治の東京の大役者である。彼らの末広・国豊両座での興行は、明治15年、16年、20年、29年が確認できた。それぞれについて以下に述べよう。なお、本章で述べる名古屋興行については、多く『近代歌舞伎年表 名古屋篇』1に拠っている。

① 明治15（1882）年2月 末広座（菊五郎、左団次）

演目は、義経千本桜、慶安太平記。菊五郎・左団次の一行は、前年12月末に東京を立ち名古屋に向かった。名古屋の橘座で、1月13日から26日に西南戦争記、大盃智勇賜、東土産開花夜嘶、2月24日から3月25日まで義経千本桜、嶋衛月白浪を演じた。岐阜の末広座には、名古屋の両興行の間に訪れている。

○又橘座の跡興行も 月白浪と大切の操三番は已に据りしが 都合に依て廿六日に打上 一座は其儘岐阜県へ行って興行と極り（中略）二月一日初日の見込なりと云（『歌舞伎新報』200号、明治15.1.27）

○岐阜末広座にて興行の菊五郎左団次は 去十三日同地打上 再び名古屋へ戻ると彼地より報（同203号、明治15.2.20）

末広座では菊五郎・左団次の出迎えにも大いに力が入った様子である。

○名古屋打上一月卅日午後三時美濃路をさして出立 笠松の渡船場に着す 此川向ふは笠松宿とて繁栄の地 爰へ岐阜末広座の者一同揃ひの着物にて出迎ふ 是迄は名古屋の者送り来り 爰にて別れ帰る 兼て人力車数輛を雇ひ 是へ印として笹の枝へ白金巾の旗を付 是へ俳優の名前を名々に記あるを建る 夕刻末広座へ乗込 芝居の前には 昔し顔見世に付しといふ場釣提灯の様なる 役者名前付の提灯を沢山に灯し 見物黒山の如し 舞台へは椅子を並べ 是へ役者一同かける 是が着祝ひの手打あつて 各々旅宿へ退散す（略）（同206号、明治15.3.2）

これだけ力を入れて迎えた一行の興行は大好評で、「我勝に見物はいり 忽ち小屋中一ぱい立錐の隙なし」、「此地の見物は名古屋の違ひ 至つて人気よく 悪口わるほめなぞするもの更になく 真の御見物計り それゆゑわれかへる程の人なれど 極穏やかに二日目に出揃ひ 至つて景気よく 大入〜」（『歌舞伎新報』203号）とある。後者では名古屋と比較して岐阜の見物はマナーが良く、行儀よく大勢が詰め掛けていると述べられている。

橘座に戻ってからの彼らの興行も好評で、もう一興行をと要望されたが「菊五郎・左団次の両人は、先づこゝらで帰京するのが上首尾ならんと其頼みを堅く謝して断りしよし。」（『官報雑誌』3月14日）、「久しく当地に滞留せし俳優菊五郎・左団次もいよいよ明日勢州へ向け当地を出途すると聞く。」（同紙3月16日）とあるように、名古屋の地を離れた。菊五郎は岐阜滞在中に養老の瀧の見物に出掛け（『歌舞伎新報』206号）、岐阜ならではの風物も楽しんだようである。

② 明治16 (1883) 年 2 月 末広座 (団十郎)

演目は、伽羅先代萩、極付幡随長兵衛。この興行も①と同じく、団十郎一座は名古屋での興行の合間に岐阜を訪れている。1月13日から24日に名古屋の末広座で、着三升伊達襦袢、東名物演劇錦絵、極付幡随長兵衛。いったん岐阜を訪れた後、2月23日に名古屋の末広座に戻り、二の替りで鏡山錦栞葉、名筆反魂香、小野道風青柳硯を出した。

○名古屋末広座は大当りにて 一月廿四日千秋楽 翌廿六日同地出立 岐阜の末広座へ一興行 廿九日に大入の由 当狂言は矢張先代萩と長兵衛 是を打上 又名古屋へ帰り二の替りなり (『歌舞伎新報』282号、明治16.2.2)

上記記事では29日初日(大入)としているが、実際には次掲引用にあるように、2月5日初日、11日千秋楽だった。すなわち岐阜での興行は正味7日間である。当初の予定も8日であり(『歌舞伎新報』280号、明治16.1.27)、名古屋興行の間に挟まった岐阜興行は、このくらいの長さが適当だったのだろう。

○兼て御披露した岐阜の三升の一座は いよへ去る五日が大入にて 相変わらず(でんばう故か) 一ぱいの見物にて例の団十郎の長兵衛には感心のよし 又兼て同地では国豊座と末広座の両方より団十郎を所望せしが 終に末広座の方へ相談極りしゆゑ 国豊座では向張る気で 同八日大入にて 木戸銭三銭の大安値にて 尾上いろは、三杵源五郎、嵐理之助、尾上多見太郎、中山駒五郎などの一座にて 狂言は花上野に布引の三段目 巴御前の飯焚に菜種の御供にて 是も景気がよいとのこと 彼地より報知のまゝ (『歌舞伎新報』285号、明治16.2.17)

○兼て美濃岐阜にて興行の団十郎権十郎の一座も 先づ可成なる入にて 目出度去十一日に舞ひ納め 直に一同名古屋へ戻り同十五六日頃は入の積りにて稽古にかゝりし由 (同286号、明治16.2.22)

この岐阜興行で注目したいのは、引用前者の二重下線部にある国豊座と末広座の団十郎の取り合いである。有名役者団十郎がぜひ欲しいと張り合った両座は、やはり岐阜の伊奈波の芝居小屋の双壁であった。この争いでなぜ末広座が団十郎を勝ち得たのか、その経緯をぜひ知りたいものである。団十郎を得られなかった国豊座は、負けじと「大安値」の芝居を出し、双方好評だったとは目出度いことである。同地の賑やかさが目に見えるようである。なお、国豊座の役者たちは詳細不明の役者ばかりで、名古屋または岐阜の地元役者であると考えられる。彼らの解明も今後の課題である。

もう一点注意したいのは、「1. 末広座」で挙げた『美濃乃魁』の挿絵である。挿絵中の役者名看板と名古屋末広座興行役者で一致するのは、確認できただけでも市川団十郎、市川権十郎(1848～1904、2代、明治7年襲名)、片岡いてう鶴、沢村国三郎(3代、生没年未詳、慶応2(1866)年襲名)、中村重作、市川団右衛門(不明～1889、初代、明治7年改名)、市川今戸助である¹⁵⁾。姓のみ判読できる岩井某は、看板が大きいことから類推して岩井紫若(4代、1854～1889、明治11年襲名)だろう。これだけの役者名の一致と同書が7月に刊行されている事実から、

2月の末広座興行を写した挿絵と考えていい。この3年後に焼失する末広座の姿が、図らずも残されていたことになる。

岐阜末広座で7日間興行した団十郎一座は、名古屋での二の替りも好評のうちに終えた。3月30日に東京へ戻った団十郎は、新富座一同に迎えられた(『歌舞伎新報』291号、明治16.3.31)。筆者の現在の調査では、明治期に団十郎が岐阜を訪れたのはこの一度しか確認できていない。

③ 明治20(1887)年9月 国豊座(菊五郎)

演目は、四千両小判梅葉、一谷嫩軍記。前年に末広座が焼失し、大掛かりな劇場としては国豊座しか存在しなかった時期である。①②と同様、名古屋での興行の間に岐阜興行をしている。9月8日から17日に名古屋末広座で四千両黄金白浪、銀世界箱根根道、音菊左小刀。岐阜興行を挟んで二の替りが10月8日から19日に同座で五十三駄扇宿附、一の谷嫩軍記、勢獅子牡丹花笠である。国豊座の初日については、以下の記事がある。

○大入の景況 国豊座一昨日大入の景況は 前夜即ち二十二日の夜より当市中及び近郷近在より夥だしく詰掛け 二十三日午前三時頃に至りては 小屋前きより善光寺辺迄 見物の者立錐の地なく満ち渡り 其混雑は実に非常にして 三時三十分頃より札を売出せしに 四時半頃にて既に見物場は塞がり 木戸をメ切り 来客を断りたるを以て 後れ馳せの三百余名は遂に入ることを得ず 失望して帰りたり(後略)(岐阜日日新聞、明治20.9.25)

○岐阜来状 同地より廿九日付にて弊社へ届きし来状に(前略)去る十七日名古屋打上 同廿日岐阜の相談整ひ 同日同所伊奈波(地名)の国豊座へ乗込 同廿三日大入 名古屋同様人気よろしく 狂言は名古屋で興行した「四千両、左り甚五郎」の中へ「一の谷陣屋」を出す(後略)(『歌舞伎新報』826号、明治20.10.4)

初日23日の前日に、菊五郎は岐阜県庁に挨拶に行き、夜は知事の接待を受けている。①②では見られなかった行動で、20年頃までにこうした慣例ができたものであろうか。役者一行は鵜飼を楽しんだ模様である。

○尾上菊五郎 目下伊奈波国豊座にて興行中なる尾上菊五郎は 去二十二日 本県知事書記官の邸に伺候せし由にて 同夜は知事より 菊五郎 家橘等を長良の双碧楼にて饗応せしめられ 鵜飼を見物したるよし(岐阜日日新聞、明治20.9.25)

○(前略)サアサア一同船へ乗るべしと 家形船二はいに人数を分ち 鵜船数艘附属船として長良川へ押出す 此屋形には同地ゑりぬきの芸子八名乗込 お酌の役を勤め 鵜遣ひは爰を晴といろいろの芸を遣り 鵜の遣ひ方も別段の腕前を現し 是を一杯遣りながら見る心地よき 言わん方なし(後略)(『歌舞伎新報』826号、明治20.10.4)

後者の引用を見ると、芸子がお酌してくれる酒を飲みながら、かなりいい気分で鵜飼を見物したことが分かる。鵜匠も、県知事や大物役者に見せるということで、張り切っているも以上の技量を見せたとある。翌日の初日の芝居に影響はなかったのだろうか若干心配になる。菊五郎は名古屋での興行が終了すると、滋賀県知事に会ったり、愛知県知事や特別に愛顧を受けた各紳士

の邸を訪問したりしている。岐阜の場合と同様、土地の有力者への挨拶を欠かさない配慮である。岐阜興行の後、大垣から興行の引き合いがあったが（岐阜日日新聞、明治20.9.29）、結局は大垣ではなく、伊勢山田で興行してから帰京したらしい（同11.11）。

④ 明治29（1899）年6月 国豊座（左団次）

演目は、菅原伝授手習鑑、慶安太平記。岐阜市歴史博物館にこのときの番付が所蔵されている。左団次一座は、京都から岐阜へ来て、それから伊勢、名古屋を回るというルートで動く。5月11日から26日に京都常盤座で、有職鎌倉山、箱根靈験鬘仇討、菅原伝授手習鑑、源平魁躰躑、暗闘伊達模様好織分、慶安太平記を上演し、非常の大入りであったという¹⁶⁾。京都から岐阜へ来ることは4月末から定まっており、その移動も記事で確認できる。

○国豊座と左団次 岐阜市伊奈波国豊座に於ては 昨今京都に於て興行中の左団次一座を招きて開演する計画あり 狂言には一番目菅原伝授手習鑑 大序より寺子屋迄 中幕鬘の仇討 二番目未定にて乗込は多分六月初旬になるべしと（扶桑新聞、明治29.4.26）

○高島屋一座は予定の如く 去月廿六日を以て京都常盤座を愛でたく打上げ 左団次は翌廿七日稲荷へ参詣し 次の日京都三番汽車にて岐阜へ着すれば 当地の芸妓等一同出迎へて賑はしく豊竹座（ママ）へ乗込み 頗る上景気の由 七日頃には同座を打上げ 名古屋の末広座か伊勢の古市かの中に乗込む筈なりとは 過日同一座よりの消息（『歌舞伎新報』1643号、明治29.6.8）

引用後者の「豊竹座」は、他の資料から考えて国豊座の誤りと判断した。後出の豊国座も同様である。国豊座の初日は6月1日、千秋楽は8日で大変な人気であった¹⁷⁾。

○高島屋一座の消息 別項に掲げたる如く 同丈一座は初岐阜豊国（ママ）座に初日を打つや 小屋の前に大丸太を以て二三重に矢来を組み 夕六時にいたりて幕を明け 当日総幕出揃となりしが 前に京都にありしと同じく上景気にして 舞台花道の大半は見物に埋もれ 続いて日に〜大入極めたれど 九日を以て千秋楽とし 直に伊勢山田古市長盛座に乗込みて八日間興行 続いて名古屋城下新築の劇場にて開業式として 狂言は一番目『真書太閤記』中幕『大盃』二番目『松田喧嘩』を演じ なほ伊勢興行より小団次も加はる由（『歌舞伎新報』1644号、明治29.6.18）

○また 当日は国豊座前混雑の為め 軽傷者五名を出したる程なりしといふ（扶桑新聞、明治29.6.2）

怪我人が出るほど見物が殺到したとは恐れ入る。『岐阜日日新聞』には連日左団次一座の興行人気の記事が見られる。前者の引用にあるように、左団次一座は岐阜・伊勢・名古屋と回ったのだが、実際は更にその後豊橋でも興行してから東京に戻っている。「名古屋城下新築の劇場」というのは、7月1日開場の西栄座で、左団次一座の興行は12日までである。この興行の背後には、先年来左団次の出勤の約束を取り付けて手附金も払っていた名古屋の末広座が、なぜうちではなく西栄座に出勤するのかと立腹し、遂には左団次を解約してしまったというトラブルがあっ

た。西栄座に関しては、開場に際して「名古屋同盟五座」が反対して衣装等を同座に貸与しないといた騒ぎも起きている¹⁸⁾。

左団次の岐阜滞在に話を戻そう。興行中の6月5日、左団次一行は鮎漁を楽しんだ。その賑やかな様子を、以下長文になるが引用する。

○同丈の長良川の鮎漁 同一座のなほ岐阜豊国（ママ）座にて興行中左団次丈は 去る五日同座打出の後 清涼丸、牡丹丸、藍見丸等なほ数艘の屋形船をしつらへ 之に幔幕を張り高張を掲げ その間口には岐阜提灯を列らねたり 県下の紳士数名を招待し 同丈妻女を始として 門下には米蔵、小米、升若、荒次郎、菊四郎、菴女等門弟一同より 作者衣装方床山に至るまで 一座を従へて夕六時某長良橋より乗込み 同地に有名なる松半主人所持の周旋行届き 且屈指の芸妓等は席に侍したりしが 八時と覚しき頃 川上より六艘の鵜飼船を漕出しぬ 此夜月こそなけれ星きらめきて 清風徐に袖を払ひ 船は金花山 稲葉山の絶壁に沿ひて縦横に舵を操る 此光景を弄して 傍には鵜飼の鮎漁に打興じけるに 之を聞付けたる芝居戻りの人々は更なり 市中の豪家等は又船に乗り来り 忽にして数十艘は爰に浮び出て 歌ひつ舞ひつ 一向我をもてなしたり 我等はその捕へたる鮎を其場に料理して 之を肴に一門の芸尽しなどして笑ひさゞめき 充分に歡を尽くして十時を過ぐる頃に長良川を下りて帰路につきたりと（『歌舞伎新報』1644号、明治29.6.18）

芝居を終えた役者と芝居の関係者の一団が、心づくしの準備が整えられた船で賑やかに漕ぎ出し、涼風に吹かれながら風景を楽しみつつ鮎漁に興じる。それを見た芝居戻りの人々や豪家の者が我も我もと船を出し、歌と舞と料理をともに楽しんだ様子を羨ましく想像する。実際左団次たちの興行は観光振興にも一役買ったようである。

○鵜飼の繁昌 国豊座の左団次一座の演劇見物を掛けて来岐する人多き故 昨今長良川の鵜飼も毎夜遊船多く出て 繁昌の体なり（岐阜日日新聞 明治29.6.7）

役者とその仲間たちは、訪れたいずれの地においても、その土地ならではの楽しみを持ったであろうが、彼らが岐阜の地で鵜飼や鮎漁を堪能していたと思うと愉快である。

以上、現時点の筆者の調査で判明している団菊左の岐阜での興行について述べた。①②③は名古屋興行の間に岐阜興行を挟んでおり、やはり名古屋劇壇との関連が深いことが分かる。③④では岐阜の地を役者たちも楽しんでいたことを示している。②では末広・国豊両座の団十郎争い的事实や『美濃乃魁』挿絵を参照することで、多面的に状況を示すことができた。今回は東京の団菊左を追ってみたが、典拠として『岐阜日日新聞』と『歌舞伎新報』に大きく頼っていることは自覚している。今後は前出の実川延若等の上方役者や、名古屋もしくは岐阜地元役者の興行についても解明したい。

おわりに

本稿は、末広座と国豊座の姿をより鮮明に具体的に描くことを目標にしていた。不十分な点は多々あるが、両座の開場後の動向や、団菊左の来岐の事実を手がかりとした岐阜興行の特徴、岐阜を楽しむ役者の姿などを示せたと自負している。しかし、当然ながら行く道は遙か遠い。本稿のまとめに代えて、今後の課題を記すこととする。

① 伊奈波地域の芝居興行一覧

「3. 両座の興行資料」で挙げたH)、I) の資料を確認し、情報をまとめる。その際に芝居以外の見世物等を含めるかどうか、検討が必要である。また、新聞記事だけではなく、番付も残存しているはずなので、それらを探索する必要もある。

② 上方役者、地元役者の興行

名古屋を訪れた上方役者が、団菊左と同様に岐阜にも立ち寄り興行していることが予想される。また、人名事典等には全く現れないが名古屋や岐阜の芝居ではたびたび名前が出ている役者たちのことも知りたい。4代中村嘉七の一門と思しき「七賀」のつく役者が突破口になるだろう。

③ 相生座、花角座の動向

伊奈波地域にあった小規模の小屋についても整理する。相生座については、所有者が加藤与三郎であると判明しているので、この人物を手掛かりにできるだろう¹⁹⁾。

④ 興行実施までの段取り

両座の団十郎の取り合いのとき、両座のだれがどう交渉をしたのだろうか。名古屋興行の合間に岐阜に役者を呼ぶ段取りをつけたのはだれか。個人所有の末広座と、会社組織となっている国豊座では興行の段取りに違いはあるのか。勧進元、差配人などについて調べなければならない。

⑤ 地歌舞伎・地芝居との関連

岐阜県は全国的に見ても地歌舞伎・地芝居が非常に盛んな地である。伊奈波地域ではあまり見られないようだが、全く無関係と言い切ってしまうことは躊躇される。地歌舞伎・地芝居について知見を深めてから、この問題について考察するつもりである。

本稿の調査の延長線上にある①②については、着実に実行していきたい。③については、末広・国豊両座と並行して相生座等のデータも拾っているため、時系列で整理することは難しくないだろう。不明点が多くまだ焦点を絞りきれていない④⑤については、先行研究を参照しながら、今後踏み込んでいきたい。本稿及び今後の調査が、岐阜の芸能の一端を明らかにできれば本望である。

謝辞

本稿を成すにあたり、多くのご教示、ご協力を得ました。岐阜の伊奈波地域の芝居についての調査で試行錯誤しているところに、岐阜市立図書館から「第32回文学ライブ」（2014年10月31日）の講師の依頼を受けました。岐阜に関連あるトピックが望ましいということだったので、それま

での調査で判明したことを中心に講演をさせていただきました。同講演でいったん調査内容をまとめる機会を得られたことは大変ありがたく、岐阜市立図書館の皆様には感謝申し上げます。

その講演にお越しくくださった篠田壽夫先生（元豊田工業高等専門学校教授）には、講演終了後お話をうかがうだけでは時間が足りず、後日面会のお時間をとっていただきました。お忙しいなか快くご面会くださり、非常に有益なお話をうかがい、資料をご教示いただきました。先生からのご教示がなければ、本稿は成立しませんでした。どうもありがとうございました。

篠田先生から、末広座所有者の後裔である国島幹名子様のお名前をお聞きし、無礼を承知のうえで国島様にご面会をお願いしたところ、ご快諾をいただきました。血縁者ならではの具体的なお話をお聞きし、貴重な写真や末広座の緞帳から製作した屏風をお見せいただいたことで、末広座が本当にこの地にあったという事実が圧倒されました。人から人へと続く縁が本稿を豊かにしてくれた僥倖に感謝しております。改めてお礼申し上げます。

資料の閲覧については、岐阜県博物館で末広座の鬼瓦の現物を見せていただき、撮影もご許可いただきました。また、同博物館の図録『平成十三年度秋季特別展 七代目団十郎と国貞、国芳』収載の岩佐伸一先生のご論考「岐阜いなば芝居と七代目団十郎」をご教示いただきました。岐阜市歴史博物館では、国豊座の番付の閲覧と写真撮影を許可いただきました。両博物館の皆様にお礼申し上げます。

縁あって職を得た岐阜の地に、ささやかながら研究を続けることで貢献していきたいと思っております。今回ご協力、ご教示くださった皆様には心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、JSPS 科研費25370213の助成を受けたものです（研究課題名：幕末から明治初期の岐阜の芝居（劇場と役者）の実態）。

注

- 1) 「伊奈波三座」のもう一座とされる相生座または花角座は、末広座や国豊座より規模の小さい小屋であった。相生座は明治23年4月に寄席から「演劇場」に改築されている（岐阜日日新聞、明治23.3.7、同4.8）。本稿では開業当初から本格的な芝居の上演が可能だった末広・国豊の2座を取り上げた。
- 2) 残念ながら、この番付及び後掲の同年10月の番付の現物は未見である。
- 3) 「私は、或ひは即き、或ひは離れて、巧みに歌舞伎を淡化し、現実化し、自然化し得て、而も作為をも舞台上の調和をも破壊するに至らなかつた俳優を、明治年間に求めて、上京以前には、嘉七の七賀助、上京後には九代目団十郎を憶ひ出すと言つておく。」（『逍遙選集』12、春陽堂、1927、pp.141-142。下線筆者。以下の引用にても同様）
- 4) 「七賀」を名に持つ役者については、稿を改めて検討するつもりである。
- 5) 明治24年の濃尾地震前に再建されたのかは不明。22年10月1日の『岐阜日日新聞』に、「旧末広座跡」で相撲興行とあることからこの時点では未再建である。時期が飛ぶが、34年刊の『岐阜県案内』の「劇場及寄席」に「末広座 劇場にして末広町に在り」とあることから、このときまでには再建されていることが分かる。
- 6) 同書を中心となり執筆した篠田壽夫氏（元豊田工業高等専門学校教授）には、直接面会し詳しい情報を教えていただく機会を得た。後述の国島幹名子氏についても、篠田氏からご教示いただいた。篠田氏からは、新聞記事「岐阜歳時記 伊奈波かいわい4 全盛築いた末広

- 座」(岐阜日日新聞、1976.1.11朝刊)もお教えいただいた。
- 7) 岐阜県郷土資料研究協議会が1975年に復刻したものを参照した。
 - 8) 本興行については後述する。
 - 9) 逍遙は「延若は、僅か二度しか観なかつた」と言いつつ、「如何にもふっくらとした自然の情味があつて」、「自然味と柔らかみを見せたのを憶ひ出す」(『逍遙選集』12、p.138)と評している。
 - 10) 該当するのは15代松井源水(1834～1907)。
 - 11) 「国豊座移転 国豊座近傍には 今後倶楽部を設置するに付 同座は今後末広町旧末広座焼跡へ移転する由にて 目下其地主と談判中なりと聞く」(岐阜日日新聞、明治20.10.1)
 - 12) 例えば『岐阜県案内』(明治34)「劇場及寄席」に「国豊座 劇場伊にして奈波社頭に在り(字順ママ)」とある。
 - 13) 国豊演劇合資会社は『岐阜県治一斑』の第2回(明治29年)～4回(31年)調査にも見られる。第5回調査から、同書の「商業 会社」の記載方法が、規模別に会社数を記すのみに変更されているため、個々の社名を確認することはできない。
 - 14) ただし欠号が多い。例えば、明治22年までの欠号は、16～18年、19年5～12月、20年1月1～24日、同3～5月、21年5～10月。
 - 15) 生没年等を記さなかった役者は、詳細不明の者である。
 - 16) 常盤座興行については、『近代歌舞伎年表 京都篇』3に拠った。
 - 17) 当初は9日千秋楽の予定だったが、1日早まった(岐阜日日新聞、明治29.6.9)。
 - 18) 西榮座については、『近代歌舞伎年表 名古屋篇』1に拠った。
 - 19) 例えば、『岐阜日日新聞』の明治22年12月8日「相生座の大普請」に加藤与三郎所有とある。

参考文献

- 『岐阜県史 通史編 近代下』岐阜県 1972
『岐阜市史 通史編 近代』岐阜市 1981
『近代歌舞伎年表 名古屋篇』1～8 八木書店 2007～14
『近代歌舞伎年表 京都篇』1～10・別巻 八木書店 1995～2005
『近代歌舞伎年表 大阪篇』1～9 八木書店1986～95
- 岩佐伸一「岐阜いなば芝居と七代目団十郎」岐阜県博物館『平成十三年度秋季特別展 七代目団十郎と国貞、国芳』図録 2001
倉田喜弘編『明治の演芸』1～6 国立劇場調査養成部芸能調査室 1980～85
国立劇場調査記録課編『歌舞伎俳優名跡便覧(第四次修訂版)』日本芸術文化振興会 2012
清信重『岐高百年史』岐高同窓会 1973
坪内逍遙「少年時に観た歌舞伎の追憶」『逍遙選集』12 春陽堂 1927
特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館編『ふるさと岐阜・魅力発見大作戦 岐阜町金華の誇り』岐阜新聞社 2009
富澤慶秀・藤田洋監修『最新歌舞伎大辞典』柏書房 2012
福井熊次郎編輯『農商工技芸 美濃乃魁 名所国産の手引』岐阜県郷土資料研究協議会 復刊

1975

野島寿三郎編『新訂増補 歌舞伎人名事典』日外アソシエーツ 2002

『明治十五年七月十二日～二十二年十二月二十九日「岐阜日日新聞」見出し一覧（発行順）』岐阜市歴史博物館 1988

「岐阜歳時記 伊奈波かいわい4 全盛築いた末広座」『岐阜日日新聞』1976年1月11日朝刊

「わがふるさと百年の歩み 盛り場・南下・劇場」『市政グラフ コミュニティぎふ』7 1989

『歌舞伎新報』

『岐阜日日新聞』、『岐阜新聞』、『貳大学区愛知新聞』、『扶桑新聞』、『扶桑新報』、『金城新報』

日本語学習者のためのシャドーイング教材に関する一考察

－会話力育成を目指して－

A Study on Shadowing Materials for Japanese Language Learners:
Aiming for Development of Conversational Proficiency

田 辺 淳 子

要旨：

本稿は日本語学習者向けのシャドーイング教材に関する研究ノートである。元々シャドーイングは同時通訳の訓練方法の1つであったが、外国語学習のリスニング指導方法の1つとして取り入れられるようになり研究や実践報告が進んできている。日本語においても2000年代から研究が行なわれるようになり、英語と同様の結果も多くあるが、独自の研究成果も得られている。

シャドーイングの効果としては、リスニング力、復唱力、プロソディ、構音・発話スピード、言語処理能力、語彙力、文法力、読解力があげられており、シャドーイングのメカニズムや注意点も明らかになってきている。一方で、シャドーイング教材についてはほとんど注目されておらず、研究も進んでいない。シャドーイングに特化した日本語の教材も数えるほどしか市販されていない状況である。

シャドーイングの多岐に渡る効果を最大限に活かせるのは、その効果の多くを必要とする会話であると考え、本学の中級レベルの口頭表現クラスにおいて会話力向上を目指し会話のシャドーイングを実施した。その実践報告をまとめ、さらに、理想的なシャドーイング教材とは何か、会話力向上のためのシャドーイング教材にはどのような教材が考えられるか、どのように実施したらよいかについて考察を行なう。

1. はじめに

外国語学習においてコミュニケーションを考えた場合、相手の発話を正しく聞きとるリスニング力と復唱力は重要である。リスニング力や復唱力の向上のために様々な教授法や指導方法があり実践されており、シャドーイングもその1つである。元々シャドーイングは同時通訳の訓練方法の1つで、聞こえてくる音声に対して影（シャドウ）のようについて発話するものである。玉井（2005）はシャドーイングを「聞こえてくるスピーチに対してほぼ同時に、あるいは一定の間においてそのスピーチと同じ発話を口頭で再生する行為、またはリスニング訓練法」と定義している。斎藤他（2006）ではシャドーイングの練習方法として、1）聞こえてくる音を声に出さず頭の中で言うサイレント・シャドーイング、2）聞こえてくる音をはっきり発音せず、ブツブツ小声でつぶやくマンブリング、3）リズムやイントネーション等、プロソディに注意するプロソディ・シャドーイング、4）意味を理解することを意識するコンテンツ・シャドーイングの4つ

に分けている。

シャドーイングは、外国語学習で古くから実践されているリピーティングやディクテーションと類似点がある。聞こえてくるスピーチを認識して口頭で再生するという点ではリピーティングと似ており、聞こえてくるスピーチに対してほぼ同時に、あるいは一定の間をおいて再生するという点ではディクテーションとも似ている。しかし、時間（発話タイミング）を考えた場合、発話が終わってから行なうリピーティングと、ほぼ同時に、あるいは一定の間をおいて行なうシャドーイングではタスクの負荷が異なる。書いて再生するディクテーションと口頭で再生するシャドーイングでは再生方法と継続時間が異なる。高度な認知作業を必要とするシャドーイングはリスニング力、復唱力のみならず、構音・発話スピード、プロソディ、言語処理能力、語彙力、文法力、読解力にも効果があることが先行研究や実践報告から明らかになっている。その多岐に渡る効果が注目され、10分程度で実施できるという手軽さもあり、授業に取り入れられるようになってきている。しかし、どのようなレベルに対し、どのような能力を向上させるために、どのような教材がふさわしいか等を検討するだけの情報は十分ではない。

本稿ではシャドーイングに関する先行研究から日本語を対象としたものを中心に取り上げ、その成果と知見を概観し（2章）、日本語のシャドーイング教材について、先行研究の実験・授業で使われた教材、および市販のシャドーイング教材についてまとめる（3章）とともに、本学の中級レベルの口頭表現の授業における会話のシャドーイングを報告する（4章）。最後にまとめとして、理想的なシャドーイング教材、会話能力向上を目指すシャドーイング教材、シャドーイングの実施方法について考える。

2. 先行研究

2.1 玉井（2005）のシャドーイング研究とワーキングメモリ

玉井はシャドーイング研究において先駆的な存在であり、日本語教育におけるシャドーイング研究に与えた影響も大きいといえる。玉井（2005）は日本人高校生・大学生を対象とした英語のシャドーイングに関するそれまでの実験・研究をまとめている。その中で、リスニング力を、「処理を可能にするための蓄えられた背景知識・言語知識・方略知識」と、「入力情報を保持し処理する認知システムの機能面における能力」に大別した。シャドーイングは後者に効果があるとし、Baddeley（1986）のワーキングメモリのモデル¹を基にシャドーイングと音韻ループとの関係を説いた。入力された音声は意味があると判断されると注意が向けられ、意味がないと判断されると消える。注意が向けられた音声情報は音韻ループ上で内語発生（subvocalization）されリハーサルが続くことにより、入力情報が保持され処理が進むという考えに基づき、内語発生を意識的に声に出す行為としてシャドーイングを位置づけた。保持と処理の容量には限界がありトレード・オフが起きるため、シャドーイングにより保持能力が上がれば、より多くの情報を意味処理にまわすことが可能であるとした。玉井の一連の実験からは、1）シャドーイングは構音速度、発話スピード、復唱力、リスニング力に効果がある、2）その効果は5日間のような短期間の訓練でも現れる、3）中・下位群で積極的な効果がある、4）シャドーイングの教材の難易度は「i - 1」（通常のレベルよりやさしいレベル）が望ましいことが判明した²。

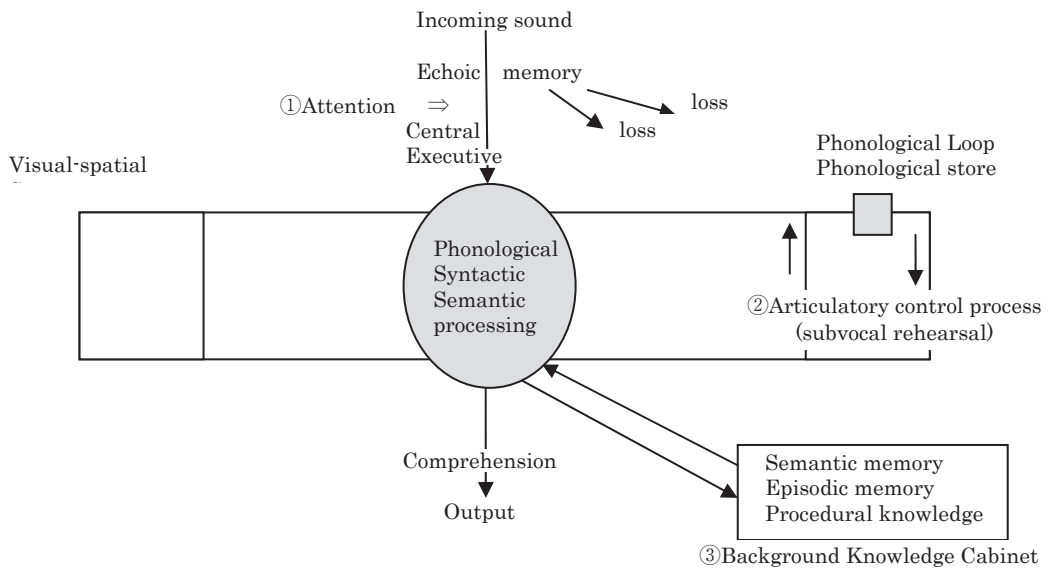


図 1. Baddeley (1986) に基づくワーキングメモリのモデル (玉井、2005より)

2.2 日本語教育におけるシャドーイングの先行研究

日本語教育におけるシャドーイング研究では、迫田 (2010) は2004年～2009年に迫田他によって行なわれた一連のシャドーイング研究の成果を以下のとおりまとめている。

- ・シャドーイングはワーキングメモリを増大させる (シャドーイングとワーキングメモリの関連性を示唆)
- ・音読や書写との比較から、シャドーイングは意味処理まで含めた言語処理を促進する可能性がある
- ・学習者のレベルによって、シャドーイングの効果がみられる側面が異なるが、1ヶ月のシャドーイングはレベルの低い学習者のリスニング能力、日本語運用能力に有効である
- ・教材の難易度に関係なく、ある程度効果が期待できる
- ・教師指導型の方がペア学習型より日本語能力の伸びが見られたが、学習者同士のフィードバック、教師からのフィードバックを複合させることが重要である

英語教育における玉井 (2005) の研究結果と同様の結果を示しているものもあるが、教材の難易度など、「i-1」を主張した玉井の結果と異なるものもある。また、迫田他 (2011) では習得しやすい音声の特徴は撥音・長音・イントネーションであり、母語の影響がある文頭のアクセントは改善されにくかったと報告している。

上級レベルの学習者に対するシャドーイングの効果に関しては、岩下 (2008) は上級レベルの学習者にとっても、シャドーイングは言語情報の処理と保持を支える能力に影響を及ぼす可能性がある」と指摘している。高橋他 (2010) においても発音が向上することを指摘している。邱 (2013) は速聴との比較から、聞き取り、聴解、復唱の全てのテストで効果があり、速聴より音声処理能力の伸びが大きかったことを報告している。倉田・松見 (2010) は上級レベルの学習者

の認知メカニズムに着目し、迫田他（2005）同様、音韻処理だけでなく意味処理も並行して行なっていることを示唆した。また、記憶容量が大きいと音韻処理と意味処理が同時に、小さいと継続的に行なわれる可能性を指摘した。

唐澤（2010）は日本語においても玉井（2005）同様、5日間でシャドーイングの効果が現れ、発音が改善できるとしている。発音に関しては、荻原（2005）もシャドーイングにより単音（促音、長音、撥音）の矯正に効果があり、アクセントの矯正においても一定の効果があつたと報告している。

シャドーイングの実施に関しては、望月（2006）はシャドーイングの背景理論や効果に関する事前の説明が役に立ったという学習者の評価を伝えている。また、シャドーイングの前後に、シャドーイング・トピックに関連したネット検索やマッピングやスピーチを行ない有効的だったと報告している。築山（2013）はシャドーイング活動が特に下位群の言語運用面の向上に効果があつたとしながらも、全ての文法や表現が身につくわけではなく、さらなるアプトプットが必要であると指摘している。城（2010）はシャドーイング遂行時の学習者のメタ認知に関する研究で、シャドーイングを苦手と感じたり、ストレスを感じたりする理由は日本語能力とはあまり関係がなく、イントネーションやアクセントに過度の注意が向いているためだとした。

3. シャドーイング教材

3.1 先行研究、および授業報告で使用が報告されたシャドーイング教材

先行研究からシャドーイングのメカニズム・多岐に渡る効果・注意点等が明らかになってきていることがわかる。では、先行研究ではどのようなシャドーイング教材が使われていたのだろうか。表1は日本語教育におけるシャドーイングの研究やシャドーイング活動を取り入れた授業の報告で使用が報告された教材を、研究・授業内容と期間を合わせまとめたものである。シャドーイング活動回数が極めて少ない研究、活動時間や回数が不明な研究は除いた。

表1. 研究・授業で使用されたシャドーイング教材一覧

研究・授業	研究・授業内容	期間	シャドーイング教材
岩下（2008）	上級学習者に対するシャドーイングの有効性	週5日毎日15分、1ヶ月	『日本語ジャーナル』（アルク）から同一著者によるコラム4つ
荻原（2007）	日本語音声教育（単音・アクセント中心）における有効性	45～60分を20回	『中級へ行こう日本語の文型と表現59』（スリーエーネットワーク）
唐澤（2010）	短期練習による発音および学習者意識の変化（対象者1名）	30～40分を5日間	『日本語ジャーナル』（アルク）から2分程度の時事ニュース
木下他（2011）	シャドーイング活動におけるリスニングの意義と役割	15分を12日間	『上級で学ぶ日本語』（研究社）から2つのテーマ
迫田（2010） （2004発表）	シャドーイングによって変化が見られる運用能力	週1回授業＋週2・3回自主、9ヶ月	中級レベルのテキストから1500字程度のもの
迫田（2010） （2005発表）	音読練習との比較	毎日15分、1ヶ月	初中級レベルのテキストから500～600字程度のもの

迫田 (2010) (2007発表)	レベル差のある学習者への シャドーイングの有効性	毎日15分、1ヶ月	初中級レベルのテキストから 2つ (267字、313字)
迫田 (2010) (2008発表)	シャドーイング教材のレベル は「i + 1」か「i - 1」か	毎朝15分、1ヶ月	i - 1レベル：『中級から学 ぶ日本語』（研究社）から2つ、 i + 1レベル：『上級で学ぶ 日本語』（研究社）から2つ
迫田 (2010) (2009発表)	ペア学習型と教師指導型授業 の比較	15分、12日間	『上級で学ぶ日本語』（研究社） から2つ
迫田他 (2011)	習得しやすい音声的特徴	10分、週1回を8回	日本語教科書、および日本語 能力試験練習問題から計11
城 (2010)	シャドーイング遂行時の学習 者のメタ認知（ストレスや苦 手意識）	40分、8日間	初中級レベルの学習者にも理 解できる難易度で音声教材付 きの複数の聴解教材から
高橋他 (2010)	上級レベルの学習者への1年 のシャドーイング（気づきと 教師の支援）	自宅で毎日10～15分 +週1回支援教師との セッション、1年	『聴解・発表ワークブック』（ス リーエーネットワーク）
築山 (2013)	初中級レベルの学習者の運用 力向上を目的としたシャドー イングの授業での活用	10～20分、週5日、 4月～7月末	『初級から始めよう にほん ご会話トレーニング』からの 会話
土居 (2011)	初級授業へのシャドーイング 活用	5分を毎回、5ヶ月 活用	『初級日本語げんきII』（ジャ パンタイムズ）から会話
望月 (2006)	シャドーイングの効果に対す る学習者評価と日本語能力と の関連性	30分、春学期9回、 秋学期の一部で8回	春学期：『日本語ジャーナル』 （アルク）からNJ ニュース （300字程度で現時点でも情報 価値のあるもの）、秋学期： ニュース、NHK 教育の科学 番組の一部、いくつかのタイ プのスピーチなど
邱 (2013)	シャドーイングと速聴、およ び作動記憶容量が音声処理力 の向上の及ぼす影響	週5日15分、3週間	市販の日本語能力試験2級聴 解問題集から会話と独話を計 15

市販のシャドーイング教材や自作のシャドーイング教材を使用しているものではなく、市販の（シャドーイング専用の教材以外の）教材や雑誌から学習者のレベルに合わせて使用されており、3つのタイプに大別できる。1）総合教科書の会話、2）総合教科書の読み物、3）『日本語ジャーナル』のエッセイやニュースである。概して初級では1）、初中級、中級では2）、上級では3）が選ばれている。多くの場合、教材の選択理由は述べられていないが、荻原（2007）のように付属CDが異なる速さで収録してあるためという音声上の理由や、高橋他（2010）のように対象学習者が大学院生で口頭発表する機会が多いためという学習者ニーズを理由としてあげる研究もあった。シャドーイングの研究・活用は進んできているが、シャドーイング教材に関しては、どのような能力を伸ばすために、どのような内容・レベルのシャドーイング教材を使用すべきか、まだ十分検討されていないといえる。

3.2 市販のシャドーイング教材

現在シャドーイング教材は英語を中心に様々な言語で様々なタイプの本が市販されている。日本語に関しては管見する限りでは、タイトルにシャドーイングとうたっているのは、斎藤他『シャドーイング日本語を話そう・初～中級編』、同じく斎藤他『シャドーイング日本語を話そう・中～上級編』、戸田（編）『シャドーイングで日本語発音レッスン』のみで、ほかには表紙に「シャドーイングにも最適！！」とある松浦他『まねして上達！にほんご音読トレーニング』が存在する。

斎藤他による『シャドーイング日本語を話そう』は初～中級編、中～上級編ともに短い会話形式から成り、複数言語での対訳が付いている。戸田（編）『シャドーイングで日本語発音レッスン』は、対象は初級～中級で、単語、会話、独話から成り、英語、中国語、韓国語の対訳が付いている。特徴としてはアクセントとピッチカーブが付けてあり、練習問題も設けられている。タイトルの通り発音に重点をおいている。どちらもシャドーイングについての解説と実施方法が書かれており、1回10～15分で実施できるようになっている。

一方、松浦他『まねして上達！にほんご音読トレーニング』は会話で使われる表現やエッセイから成る。早口ことばやことわざ、名作・名文のコーナーもある。対訳はウェブサイトを含むと英語、中国語、ベトナム語がある。特徴としては、付属CDに「きほん」「ゆっくり」「1行ずつ」の3種類の音声録音されていることがあげられる。実施方法にリピーティングの方法とともにシャドーイングの方法も簡単に説明されている。

『シャドーイング日本語で話そう・初～中級編』を除くと、ほかは2010年以降に出版されており、今後増えていくことも予想されるが、現時点において2～3種類しか市販されていないことから、シャドーイングの教材やその開発には注目が集まっていないことは明白である。

4. 会話力向上のためのシャドーイングの実践報告

4.1 実践の概要

シャドーイングの効果がリスニング力、復唱力、プロソディ、構音・発話スピード、言語処理能力、語彙力、文法力等にあるとするなら、その全てが必要とされる会話力の向上にシャドーイングが寄与するところが大きいと予測される。そして、会話力向上には会話をシャドーイングすることがより有効であると考えられる。そこで、本学の中級レベルの口頭表現クラスにおいて会話力向上のための活動の1つとして会話のシャドーイングを取り入れた。

2014年4月～7月（前学期）15回と、2014年10月～2015年2月（後学期）14回の中級レベルの口頭表現クラスで実施し、受講生は前学期が5名、後学期が9名であった。全員シャドーイングの経験はなかった。

クラスの大目標は「研究活動・研究生生活を支える日常日本語会話力の習得」とし、そのためのサブ目標として以下の習得をかかげた³。

- ・聞き取りやすい発音
- ・日本語でのコミュニケーションへの慣れ
- ・待遇を含む、場面・状況・相手を考えた談話構成・談話展開
- ・語用論的能力
- ・定型表現・慣用表現・オノマトペ

・研究活動で必要とされる言語機能の一部

シャドーイング教材は『シャドーイング日本語で話そう・初～中級編』を選んだ。理由は、会話のシャドーイング教材であったことが最大の理由であるが、お互いに丁寧体、お互いに普通体、一方が普通体、もう一方が丁寧体の3種類のスピーチ・スタイルを含み、学校場面の会話が多く、上記の全てのサブ目標に関係がある項目を含んでいたためである。

授業は、1) シャドーイング、2) 前回のロールプレイの発表、またはスピーチ、3) 会話に必要な文法・表現項目の明示的導入・練習、4) タスク（ロールプレイ）という、互いに関連がある一連の活動サイクルから成り、シャドーイングは授業開始時に行なった。シャドーイング活動が単調にならないよう、時々変化をつけたが、基本としては以下の流れで実施した。

1. 前回のシャドーイングの復習（全体、または個別発表）
2. 新しいセクションのCDを聞く（サイレント・シャドーイング、またはマンブリング）
3. 教科書を見ながらシャドーイング・必要に応じて解説
4. 練習

授業内だけでは十分でないため、学生には自宅での練習を推奨した。また、その場の解説だけでは不十分だと思われる項目は、授業内の「明示的導入・練習」の時間で取り上げた。但し、シャドーイングはクラス活動の中で独立した活動ではなく、そのほかの「発表・スピーチ」「明示的導入・練習」「タスク」と互いに関係をもち、全体として「研究活動・研究生活を支える日常日本語会話力の習得」を目指した。そのため、助詞の省略、相槌、縮約形、オノマトペ等を扱った明示的導入・練習がシャドーイングを補足するためだけに実施されたわけではない。明示的導入・説明で補強した「わかった」内容をシャドーイングのほかのセクションで練習し、タスクや発表で使うことにより、実際の生活で使える・「できる」ようになることを目指した。

4.2 アンケート結果

上記のようなサイクルの中でシャドーイングを実施したため、シャドーイングの効果だけを数量的に測るのは不可能だと判断した。しかし、学習者がシャドーイングをどのようにとらえ、どのような効果を感じられたかを知ることは重要であるため、前学期、後学期それぞれ学期末にアンケートを実施した。口頭表現の授業全体に関するアンケートから選択式のシャドーイングに関するところのみ抜粋する。質問5)は、上達を感じている項目が複数あると思われたため、複数回答を可とした。実際多くの学生が複数選んでいた。質問6)の「シャドーイング時に意味を考えているか」は後学期のアンケートに追加した質問のため、回答数は9名である。

表2. アンケート結果 (表示は%)

1) 授業でシャドーイングを扱うことについて	大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	やらない方が良かった
	28.57	64.28	7.14	0.00	0.00
2) 教材のレベル・内容	適切だった	難し過ぎた	普通	あまり良くなかった	良くなかった
	35.17	0.00	57.14	0.00	7.14
3) 授業内での実施時間	適切だった	長すぎた	短すぎた	その他	
	100.00	0.00	0.00	0.00	
4) 自宅でのシャドーイング回数	ほとんどなし	週に1回	週に2~3回	週に4~5回	毎日
	14.29	28.57	35.71	14.29	7.14
5) シャドーイングをしたことで上達したこと (複数回答可)	聞く力	発音	イントネーション	話すスピード	語彙数
	78.57	35.71	35.71	57.14	28.57
	待遇への意識	自然な会話への慣れ	助詞の省略、縮約形など自然な会話で使われる文法	その他	
	14.38	50.00	21.43	0.00	
6) シャドーイング時に意味を考えているか	必ず考える	たいてい考える	時々考える	あまり考えない	全然考えない
	77.78	22.22	0.00	0.00	0.00

アンケートの最後に自由に感想を書くようにしたが、「前よりもっと日本人と話を自然にするようになった。」「シャドーイングは新しい経験だった。歌でシャドーイングしてみた。」「シャドーイングは良いところが多いと思います。」「アルバイトの友達から、日本語が上手になったとほめられた。」という意見が見られた。

4.3 考察

アンケート結果からシャドーイングが好意的に受け入れられ、学習者も効果が実感できたことがわかる。聞く力と自然な会話の慣れに関しては、ほかの授業での学習内容の効果や日本の生活への慣れもあり、シャドーイングの効果を過大評価することはできない。しかし、発表・スピーチでは回を重ねるごとに長音・母音の無声化等の発音の向上やイントネーションの改善が見られた。また、シャドーイングで練習した語彙や表現を教室内外で使っているところを目にすることがあり、語彙や表現が身につけていることが伺えた。

シャドーイングが好意的に受け入れられ、目標の達成に一定の効果が見られた理由としては、学習者のニーズと授業の目標・内容とシャドーイング活動が合っていたことが考えられる。また、初回授業でシャドーイングを取り入れる理由や練習方法等、シャドーイングに関するガイダンスを行い、録音・録画を行わなかった⁴こともシャドーイングに対するフィルターを下げる効果があったと思われる。アンケートでは教材のレベル・内容に関して「良くなかった」と回答し、その理由として「時々簡単過ぎた」と書いていた学生もいた。「普通」と回答した学生も多かった。クラスの目標を日常会話力の習得としたため、場面や待遇が明確で、ターンが少なく、終助詞・

相槌・縮約形・助詞の省略等、日常会話で使われる機能に着目しやすい会話がが多く、汎用性が高いことを重視し初～中級編を選んだ。しかし、学生のレベルが中級の中でも中級後半の学生が多かったため、初～中級レベルのシャドーイング教材を簡単だと感じた可能性が高い。

先に述べたとおり、シャドーイングを一連の会話力向上のサイクルの中で取り上げた授業実践であり、プレ・ポスト試験の実施、会話のシャドーイングとほかの内容のシャドーイングでの比較等を行ない、その結果を数量的に測ったわけではない。そのため、会話のシャドーイングが会話力向上にどれほど貢献したか数値で実証することはできないが、会話のシャドーイングの実施により、学習者は自らの会話力とそれに関連する能力の向上が実感でき、教師側も学生の上達が観察できた。会話のシャドーイングは会話力の向上の一定の効果があったといえる。

5. まとめ

5.1 理想的なシャドーイング教材とは

本稿では、シャドーイングの先行研究や実践報告からシャドーイングにどのような効果があるか概観し、どのような教材が先行研究や実践報告で使用されたかをまとめ、現在ではシャドーイングに特化した教材が十分でないことを指摘した。また、シャドーイングの効果を幅広く必要とする会話力の向上のために、会話のシャドーイングを実践した本学での授業を報告し、今まではほとんど注目されることのなかったシャドーイングの教材について考察を行ってきた。最後にまとめとして、理想的なシャドーイング教材について考えてみた。

シャドーイングは1回10～15分で手軽に「聞く・意味を考える・話す」活動・練習ができる。しかし、玉井（2005）では実験協力者のジャーナルからシャドーイングは負担が大きい訓練法であるとしている。そのため、どのような教材を選ぶかは効果の面からだけでなく、学習者のモチベーションの面からも重要である。鳥飼他（2003）では英語のシャドーイング教材に関して、内容は原則としてはどんなものでもかまわないとし、ほかの条件として、1）難易度は未知語が最大5%を超えない、2）速さは初・中級者で分速120±20語、中・上級者で分速160±20語程度、3）1回で扱う教材の長さは初・中級者で1～3分、中・上級者で3～5分、4）原稿があることをあげている。日本語に関しては管見の限り上記のようなまとまった記述はない。シャドーイングの効果が多岐に渡ることを考えると、理想的なシャドーイング教材はどのような能力の向上を目的とするかによって変わるといえる。望月（2006）はシャドーイングとオーディオ・アプローチのパターン・プラクティスに共通する側面を見出しているが、意味を考えない機械的な聞き取り・発話行為にならないよう、レベル・時間・実施方法・教材の内容に配慮が求められる。シャドーイングには聞こえた音に反応するという運動的・ゲーム的な要素もある。唐澤（2010）は「慣れてくると面白くなってきて、楽しんでできました（ママ）」という学習者のコメントを紹介している。シャドーイングは高度な認知行為を含む負担の大きい学習法であるが、伸ばしたい能力・学習者のニーズに合った興味のある内容で適切なレベルの教材を使用し、効果が自覚できる形で実施すれば、楽しんでできる学習法でもある。

5.2 会話能力向上のためのシャドーイング教材

日本語の会話習得に対するニーズやシャドーイングの背景理論やプロセス・効果・手軽さを考えると、会話能力が必要とされる日本語学習者を対象とし、そのニーズに合わせた会話シャドー

イング教材の開発が今後求められるだろう。例としては、経済連携協定（Economic Partnership Agreement）により来日する介護福祉士候補者向けの介護場面に基づく会話シャドーイングが考えられる。日本語研修の早い時点から会話シャドーイングを導入することで、介護施設での日本語の実践に備えられるだろう。ほかにも、ビジネスパーソン向けの会話シャドーイングが考えられる。従来のビジネス日本語は日本企業に就職し、日本国内で働く非日本語母語話者対象の中～上級レベルの教材が多く、敬語や「ウチとソト」の使い分けに重点を置いたものが多かった。しかし、ビジネスで日本語を使うのは、日本国外の日系企業に勤める社会人、日本で一定期間就労する出向者や技術研修生等、様々である。短い会話ではあるが、応用が利くビジネス会話をシャドーイング教材に入れることで、より幅広い層に対応できるのではないだろうか。上記のようなシャドーイング教材は、対象者の生活の中心が学習ではなく仕事であるため、自主学习に向くように作る必要がある。使用場面を明確にした短い会話を多く取り上げ、学習者が後に自らの接触場面に合わせ、パッチワークのように繋ぎ合わせ使える教材が望ましいであろう。

5.3 シャドーイング教材と実施方法

シャドーイング教材の違いによる効果の違いに関しては調査・研究が必要であろう。また、授業や自習でどのようにシャドーイングを扱うのか、実施方法についてもさらなる検討が必要である。ターゲットとする効果が異なれば、実施方法も当然異なる。例えば録音が必要かどうかについては、プロソディを最優先とするなら、録音は欠かせないであろうが、言語処理能力や語彙・表現をターゲットとするなら、録音は必須ではなくなるはずである。また、授業で扱う際には、意味処理が行なわれているか注意を払う必要がある。単調な聞き取り・発話活動にならないよう、時にはペアでの練習や数秒遅らせて発話することでさらに負荷がかかるディレイド・シャドーイングも有効であろう。会話のシャドーイングの場合は、練習したことを応用するロールプレイで、「わかる」から「できる」実体験も可能である。シャドーイング教材の開発、そしてその教材をどう扱うのか、実践と検討の繰り返しの中でよりよい教授法に発展していくであろう。

注

- 1 ワーキングメモリは、その後 Baddeley が自身の1986のモデルの視空間スケッチパッドと音韻ループの間にエピソード・バッファを加え、下図のモデルを提案している。エピソード・バッファは音韻ループ、視空間スケッチパッド、エピソードの長期記憶からの情報、知覚的入力からの情報をまとまりのあるエピソードに一体化することができる、一時的貯蔵システムであると仮定している。

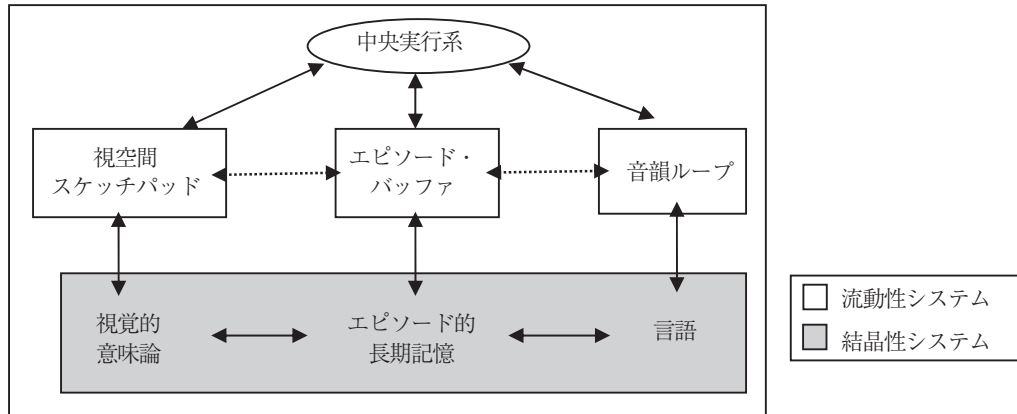


図2. ワーキングメモリの改定版モデル (バドリー、2012より)

- 2 英語のシャドーイング研究ではほかに、音声と意味の結びつきを意識した練習の重要性を説く佐藤・中村 (1998) やシャドーイングによる下位群のリーディング力の向上を報告した氏木 (2006) 等もある。
- 3 授業計画の詳細は田辺 (2014) を参照。
- 4 一部の受講生から録画・録音はしないでほしいという意見が授業参加前にあった。

参考文献

- アラン・バドリー (2012) 『ワーキングメモリ 思考と行為の心理学的基盤 (Working Memory, Thought, and Action)』 井関龍太・齊藤智・川崎恵里子訳、誠信書房
- 岩下真澄 (2008) 「日本語学習者におけるシャドーイング訓練の有効性—1ヶ月間の縦断的調査による検討—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第二部、57号、pp.219-228
- 萩原廣 (2007) 「シャドーイングの日本語音声教育における有効性—単音、アクセント指導を中心に—」『國文學論叢』 第52輯、pp.112-126
- 唐澤麻里 (2010) 「シャドーイングが日本語学習者にもたらす影響—短期練習による発音面および学習者意識の観点から—」『お茶の水大学人文科学研究』 第6巻、pp.209-220
- 木下藍子・福田規子・迫田久美子 (2011) 「シャドーイングにおけるリスニングの意義と役割—日本語短期集中コースでの実践報告—」『広島大学日本語教育研究』 21号、pp.63-68
- 倉田久美子・松見法男 (2010) 「日本語シャドーイングの認知メカニズムに関する基礎研究—文の音韻・意味処置に及ぼす学習者の記憶容量、文の種類、文脈性の影響—」『日本語教育』 147号、pp.37-50
- 斎藤仁志・吉本恵子・深澤道子・小野田和子・酒井理恵子 (2006) 『シャドーイング日本語を話そう・初～中級編』 くろしお出版
- 斎藤仁志・吉本恵子・深澤道子・小野田和子・酒井理恵子 (2014) 『シャドーイング日本語を話そう・中～上級編』 くろしお出版
- 迫田久美子 (2010) 「日本語学習者に対するシャドーイング実践研究—第二言語習得研究に基づく運用力の養成を目指して—」『第二言語としての日本語の習得研究』 pp.5-21

- 迫田久美子・Fellner 宮良真理子 (2011)「シャドーイングによってどの音声的特徴が習得しやすく、どの音声的特徴が習得しにくいのか」『日本教育心理学会総会発表論文集』2011、pp.248
- 佐藤敏子・中村典生 (1998)「Shadowing の効果と学習者の意識」『つくば国際大学紀要』4号、pp.47-57
- 氏木道人 (2006)「シャドーイングを利用したリーディング指導の実践：復唱訓練が読解力に与える効果について」『関西外国語大学研究論集』84号、pp.213-230
- 城保江 (2010)「シャドーイング遂行時における学習者のメタ認知に関する研究—ストレスや苦手意識に視点をおいて—」『佐賀大学留学生センター紀要』9号、pp.115-123
- 高橋恵利子・福田規子・岩下真澄・迫田久美子 (2010)「上級レベル学習者に対するシャドーイングの研究—学習者の気づきと教師の支援—」『広島大学院教育学研究科紀要』第二部59号、pp.299-308
- 田辺淳子 (2014)「研究生・大学院生主体の中級口頭表現クラスを考える—先行研究および本学における事例から—」『岐阜大学留学生センター紀要2013』pp.17-28
- 玉井健 (2005)『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』風間書房
- 築山さおり (2013)「初中級日本語学習者の運用力向上を目的としたシャドーイングの活用について」『同志社大学日本語・日本文化研究』11号、pp.39-57
- 土居美有紀 (2011)「初級授業にシャドーイングを取り入れる—先行研究から学ぶ—」『南山大学国際教育センター紀要』12号、pp.77-91
- 戸田貴子 (編) (2012)『シャドーイングで日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク
- 鳥飼玖美子 (監) (2003)『はじめてのシャドーイング』学習研究社
- 松浦真理子・福池秋水・河野麻衣子・吉田佳世 (2014)『まねして上達！にほんご音読トレーニング』アスク出版
- 望月通子 (2006)「シャドーイング法の日本語教育への応用を探る—学習者の日本語能力とシャドーイングの効果に対する学習者評価との関連性を中心に—」『関西大学視聴覚教育』29号、pp.37-53
- 邱學瑾 (2013)「日本語音声処理力の向上に及ぼす練習法と作動記憶容量の影響」『Japanese Studies Journal』29号-2、pp.1-11
- Baddeley, A. D. 1986. *Working memory*. New York: Oxford University Press.

初級学習者を対象とした会話授業

— 「口頭表現A」授業報告 —

A Class Report of “Conversation A” for Novice Japanese Learners

三 輪 実 希

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける初級学習者を対象とした会話授業「口頭表現A」について報告するものである。2014年度後期の授業でどのような授業を行ない、どのような活動をしたか、その内容について報告し、今後の課題、問題点を考える。

1. はじめに

本稿が対象とする初級学習者の会話授業は、集中コースの初級レベルである「集中Aクラス」の一授業である。2014年度後期の受講者は学期途中でクラスを変更した者がいたが、最終的には11名になった。11名の受講者は来日前に平仮名、片仮名を習得してきた学習者もいるが、ほとんどの学習者はこのクラスで初めて日本語を勉強する者である。また出身国も中国、アメリカ、インドネシア、エクアドル、タイ、バングラデシュ、ベトナムと多国籍であった。

集中Aクラスの授業では、『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』（1課～50課）をメインテキストとして初級文法を学ぶ「総合A」の授業コマが週11コマ（1コマ90分）ある。本稿が対象とする「口頭表現A」の授業は週1コマ（全14コマ）である。口頭表現Aの授業を行なうにあたっては、初級文法を学ぶ総合Aの授業進度を考慮した。これは初級文法の導入、練習が済んでからその文法の定着を図ることが口頭表現Aに求められているからである。また、初級学習者にとって、日本語で話せるようになることは大きな目標であり、学習者からの期待も大きい。そのためには既習文法だけではなく、場面にあった表現や新出語彙も正しく理解し使えるようになることが求められる。つまり、どのような場面でどのように既習文法や表現を使うかということである。また、だれに対して使うかなど、その場面や状況、人間関係を理解することは初級学習者にとって大きな課題である。口頭表現Aでは既習文法や場面にあった表現の使い方、新出語彙の定着を図るとともに、場面や状況を正しく理解し、相手と対話できる会話対応能力も備え、コミュニケーションがスムーズにできるようになることが重要であると考え、これを念頭に、口頭表現Aの授業を進めることにした。

2. 使用教材について

口頭表現Aでは、『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』（1課～21課）を使用した。この教科書は、場面や機能に応じた表現や談話構成を学習すると同時に、会話の当事者として、相手の発話を聞き、適切な応答を考え、話す能力を養成するためのテキストである。

『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』には目的が4つ提示されている (p viii)。第1に、ある状況下において話し手として、自身の既習知識でどのように表現するかということを考える。第2に、自身が話しかけられたとき、聞き手としてどのように応答するかを考える。第3に、ある表現が文脈の中でどのような意味、機能を持つかを考える。第4に、不適切な会話例を見て、何が不適切で、なぜ不適切なのか、そしてどのような表現が適切かを考える。以上の4つの本書の目的にそって、口頭表現Aの授業内容を考えた。

『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』は、課によってはないものもあるが、各課は、「絵」、「考えよう」、「聞いて答えよう」、「聞いて考えよう」、「練習A」、「練習B」、「ロールプレイ」、「応用練習」、「練習C」、「NOTES」の10の項目で構成されている。

「絵」は、学習者がどんな状況にいるかをイメージさせるものである。そのイメージした状況の中で、どのような表現を使用して発話するかを「考えよう」で、考えさせる。「聞いて答えよう」では、ある状況下で話しかけられたとき、どのように応答するかを考えさせ、「聞いて考えよう」では、2つの異なる発話を聞いて、その意味の違いを考えさせたり、相手の発話のあとにどんな表現が続くかを予測させたりする。「練習A」では、学習項目の表現の置き換え練習をし、「練習B」では、会話例を使ってペア練習をさせる。「ロールプレイ」では、より実際のコミュニケーション場面に近い練習をさせる。「応用練習」、「練習C」では、少し難しい文型や表現が含まれるが、より自然な会話練習をさせる。各課の最後にある「NOTES」では、学習項目の表現の意味や運用法を学習者に確認させる。

集中Aクラスのメインテキストである『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』にも「会話」があり、それを使用するか否か検討した結果、より実用的に会話練習ができ、学習者自身が考え、会話を発展させることができるほうがよいとの判断により、『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』を使用することに決めた。口頭表現Aで求められている会話対応能力を養うには、適切な教材であると考えた。

3. 授業実践

3.1 授業の進め方

先にも述べたが、本稿が対象とする初級学習者の口頭表現Aの授業は、集中コースの初級レベルである集中Aクラスの一授業である。そのため、このクラスのメインである初級文法を学ぶ総合Aの授業進度を考慮し、課を進めていくことにしたが、幸いなことに、2014年度後期の口頭表現Aの授業初日が例年と比べ遅かったため、導入する課を特に考慮する必要がなかった。つまり、総合Aの授業において、すでに『みんなの日本語初級Ⅰ』第8課まで文法導入が済んでいたため、結局、1課から順に課を導入することにした。

授業では各課の「絵」、「考えよう」、「聞いて答えよう」、「練習A」、「練習B」、「応用練習」を主に扱った。学期当初はまだ簡単な日本語しか理解できない学習者が多かったため、練習A、練習Bを中心に進めた。練習Aでは置き換え練習をし、学習項目や文型、表現の定着を図った。練習Bは会話例を使ってペア練習をし、受け答えの練習、発話の練習を中心に進めた。このようにまずは日本語で話すこと、会話を続けることを第一に考え、口慣らしのような練習を進めた。その後は、絵を見て状況を考えたり、状況設定されたなかでどのように話したらいいか、また会話相手の発話のあとにどのように会話を続けたらいいかという発展的な内容を取り入れ、授業を

進めていった。

2014年度後期の口頭表現 A で扱った課は12課あるが、次節から報告するのはそのなかの後半で扱った課について課ごとに報告するものである。報告にあたって学習者が書いたものについては原文のまま提示する。

3.2 実践例①：第10課 事情を説明する・頼む

第10課では、事情を説明したり、何かを頼んだりする場面での会話を学ぶ。定着を図りたい文型・表現は、1) 相手に何かを頼んだり相談したりするとき、用件に入る前に相手の都合を聞く「今、(お) 時間 (が) ありますか」、「今、ちょっといいですか/いいでしょうか/よろしいですか/よろしいでしょうか」、2) 話し手の状況を説明して、相手の反応を待つ「わからないんですが……」、3) 依頼するときに使う「教えてください/教えてくださいませんか」、4) 依頼されたとき、それを受ける「はい、いいですよ」、5) 依頼をして、相手が受諾してくれたあとにその行為が確かに行われるように頼む「お願いします」の5項目である。この5項目の定着を図るために、「絵」、「聞いて答えよう」、「練習A」、「練習B」、「応用練習」を順に進めていった。

「絵」と「聞いて答えよう」は関連性があるため、まず日本語の教室で友だちAが友だちBに話しかける場面の絵を見てどのような状況下であるかを考えさせたうえで、「聞いて答えよう」につなげていった。「聞いて答えよう」は、ある状況下で話しかけられたとき、どのように応答するかを考えさせるための練習であり、第10課では、相手に都合を聞かれたときの応答が求められる。たとえば、「友だちはあなたに「アレンさん、今、時間がありますか。」と言いました。あなたはへと答えますか。」という問いに答えるのだが、学習者の答えは次のようなものであった。

- (1) a. はい、あります。
 b. はい、ありますよ。
 c. ええ、あります。
- (2) a. ええ、あります。何でしょうか。
 b. ええ、あります。どうしたんですか。
 c. ええ、ありますよ。何ですか。
 d. はい、時間があります。何ですか。
- (3) a. ああ、すみません。ちょっと時間がありません。

このなかで(1a-c)のように、時間があることを伝える返事をしたのは6名であった。ここで考えたいのは、(2a-d)のように時間があることだけを答えるのではなく、相手が用件を言いやすいように「何でしょうか」などを付け足して答えた学習者が4名いた点である。これにより、会話がより自然な流れになっているので、高く評価したい点である。また、ほとんどが肯定的な返事をしてきたなかで、1名が(3)のように否定的な返事をする学習者がいたが、時間がないことを伝えるだけでなく、「すみません」や「ちょっと」という表現を添えて答えていた。これは、断るときは相手に配慮した言い方をするという日本語らしい表現が使えることを示しており、評価できる点である。

同様に、「アレンさん、今、ちょっといいですか。」と都合を尋ねられる問いかけに対して、学

習者は以下のように答えていた。

- (4) a. はい、いいです。
b. はい、いいですよ。
c. ええ、いいです。
d. ええ、いいですよ。
e. ええ。
? f. ええ、ちょっといいです。
- (5) a. ええ、何でしょうか。
b. うん、どうしたんですか。

(4a-e)のように、都合がいいことだけを答えた学習者は7名で、相手が用件を言いやすいように質問を加えたもの(5a,b)や、少しおかしな表現を使っているものもいた(4f)。最初の問いで、相手が用件を言いやすいように質問を加えて返事をした学習者は4名いたが、後者の問いでは2名だったことから、最初の問いである「今、時間がありますか。」よりも「今、ちょっといいですか。」の応答のほうが、自然な流れを促すような表現の使用が少ないように思われる。しかし、この後者の問いに対する応答で問題となるのは、終助詞「～よ」の使用である。

第10課では、相手に何かを頼んだり相談したりするとき、用件に入る前に相手の都合を聞くことと、都合を聞かれたときの応答を学ぶ。学習者の回答を見ると、概ねその状況が理解でき、適切な応答ができたと判断できる。しかし、「はい、あります」と「はい、ありますよ」、「ええ、いいです」と「ええ、いいですよ」のそれぞれの違いについてはまだ十分に認識できていない。つまり、終助詞「よ」の使い方、意味が定着していないという問題である。最初の問いで、「あります」と答えた学習者は7名、「ありますよ」は3名、後者の問いで、「いいです」と答えた学習者は2名、「いいですよ」は4名いた。最初の問いでは、「あります」と「ありますよ」の答えの違いは問題ではないが、後者の問いにおいては「いいです」の答えでは不適切に感じる。ここに至るまでに、本書を使用した授業の第3課「場所を聞く」と第7課「誘う・断る」において「～よ」の使い方、意味については説明してきたが、「聞いて答えよう」の回答を見ると、学習者にとっては難しい項目の一つであると考えられる。そのため、「～よ」の使い方、意味の再確認として、「練習A」で状況を把握することと置き換え練習を繰り返した。その結果、「～よ」を使用した場合と使用しない場合の印象の違いやだれに対して使えるかを考えながら練習できたので、「～よ」の使い方を正しく認識できる学習者が多くなったと感じられた。

引き続き、「練習B」、「応用練習」においても「～よ」の使い方を重要視しながら、応答だけでなく、依頼する側の会話練習も行なった。たとえば、状況を説明する「わからないんですが……」という表現や、依頼するときに使う「Vてくださいますか」の表現、依頼したことが確かに行われることを頼む「お願いします」の使い方も練習した。「お願いします」は依頼するときを使う表現としてクラス開始直後に「教室のことば」として導入される。また、口頭表現Aにおいても第1課「自己紹介」で「どうぞよろしくお願いします。」を導入し、練習した。しかし、依頼したことが確かに行われることを頼む表現、念押しの意味でも使えることはこの課で学習する。学習者にとって特に難しい表現ではないため、導入後すぐに使えるようになっていた。

3.3 実践例②：第11課 けんそんする・ほめる

第11課では、褒められたときに謙遜したり、人を褒めたりする場面での会話を学ぶ。定着を図りたい文型・表現は、1) 相手の発言が事実と大きく違うという気持ちを表す「いえいえ……」「とんでもない」、2) 数量・程度が大きいことを表す形容詞であるが、この課では驚きを表してほめる表現「すごい!」、3) 文脈や状況から話し手が推測したことを示して、それを確認し説明を期待し質問するときに使う「～んですか」、4) その質問について説明するときに使う「～んです」の4項目である。この4項目の定着を図るために、「聞いて答えよう」、「練習A」、「練習B」、「応用練習」を順に進めていった。

「聞いて答えよう」では、「あなたは西川さんのうちでホームステイをしています。みんなで日本語で話しています。お母さんが「アレンさん、日本語、上手ですね。」と言いました。あなたは、何と答えますか。」という問いに答えるのだが、学習者の答えは次のようなものであった。

- (6) a. いいえ、まだまだです。
 b. いいえ、まだべらべらじゃありません。
 ? c. いいえ、上手じゃなくて。でも、またいつも勉強しています。
 ?? d. いいえ、まだ上手です。
- (7) a. ありがとうございます。
 b. ありがとう。
 c. ありがとう。まだまだです。

学習者の答えとしては、謙遜する、お礼を言う、の二通りで、「はい」と答えた学習者はいなかった。「はい」と答えると、自信過剰な印象を与えることを学習者は既に理解できているからである。実際に学習者からは「はい、上手です。」と答えるのは不適切であるとの回答が得られた。

自分の能力などを褒められて、謙遜する表現は『みんなの日本語初級 I』第16課練習C2で、「いえ、まだまだです」が導入されている。そのため、学習者はこの表現がすでに定着しており、「いえ、まだまだです」と返答ができたと考えられる。しかし、「いえいえ……」「とんでもない」は未習表現であるため、学習者からの回答にはなかった。また、褒める際に使用する「すごい!」という表現も未習であったため、導入し、「練習A」で置き換え練習を、「練習B」でペア会話練習をした。このような表現は学習者にとって使いやすく覚えやすいのか、すぐに使えるようになっていた。そこでさらに「応用練習」へと進めていき、少し長めの会話にも挑戦した。この「応用練習」では、留学生と日本人学生が研究室で日本語で話しているという状況設定で、モデル会話が提示されている。まずはこのモデル会話を使って、「～んです」の使い方や謙遜する表現、褒める表現を確認した。次に「ギターが上手な友だちと話す」という状況設定で、「～んですか」を使って質問したり、「～んです」を使って説明したりする会話を作り、10分ほど練習し、各ペアが順に発表した。どのペアも発表がきちんとでき、表現の使い方も適切であった。

3.4 実践例③：第12課 謝る

第12課では、約束したことができなかつたとき、その理由を言って謝る場面での会話を学ぶ。

定着を図りたい文型・表現は、1) しようと思っている行為がまだ終わっていない場合に使う「レポート(を) まだ書いていないんですが……」、2) 話し手が言いにくい状況を説明して、相手の反応を待つ「まだ書いていないんですが……」、3) ある状態が変化していないことを示す「まだなんです」、4) 約束や指示が確実に行われるようにする「かならず」、5) 以前と比べて、状態が大きく変化したことを示すが、まだ完全になっていない状態の「だいぶよくなりました」の5項目である。この5項目の定着を図るために、「練習A」、「練習B」を順に進めていった。

練習Aの置き換え練習をする前に、誤用例として次のような会話が教科書では提示されている。

(「きょうは宿題の締め切りですが、アレンさんはまだしていません。」という状況下での会話である。)

森先生：もう、宿題を出しましたか。

アレン：すみません。まだ宿題を出しません。

まず、この会話のどこが誤用かを学習者に考えさせた。すると学習者は、「まだ宿題を出しません」が誤用であることに気付いた。次に、それを正しく直すよう指示したところ、「出しませんでした」、「出しません」のような誤答が見られた。それぞれの答えがどのような状況で使用されるのかを説明した。たとえば、「出しません」と答えると、「これから宿題を出さない」という意志を示すことになると説明した。さらにほかの答えを考えさせたところ、「まだ出していません」という正答が出てきた。「まだVていません」の文型は、『みんなの日本語初級Ⅱ』第31課で学習する。この時点では既に導入が済んでいた文型であるが、なかなか正答が出なかった。その理由として、『みんなの日本語初級Ⅰ』第7課で学習した「まだです」が定着しているからではないかと考えられる。実際に先の誤用例の答えとして「まだです」が出されていた。もちろん、この答えは誤用ではないが、しようとしている行為やしなければならない行為がまだ終わっていないことを相手に伝えるときは、「まだVていません」を使ったほうがより相手に伝わることを説明した。

この表現を確認しながら、「練習A」、「練習B」へと進めていった。さらに、応用として、「謝る」場面を設定し、ペアで会話を作成し発表する活動を行なった。「作文の宿題の締め切りはきょうです。でもあなたは宿題をして来ませんでした。あなたは専門の学会があって京都へ行っていました。先生に理由を言って、謝ります。」と「あなたは友だちから本を借りました。きょう返す約束をしましたが、まだ全部読んでいません。理由を言って、謝ります。」という二つの状況設定から一つを選び、ペアで会話を作り、発表した。ここでは、状況を説明する→行為が未完了であることを伝える→理由を述べる→許可を求める→謝るという流れを理解し、会話を作らせた。どのペアも会話の流れと学習項目を意識しながら作ることができ、3分ほどの発表だったが、しっかりできていた。「謝る」という行為は、ただ謝ればいいというわけではなく、状況を説明し、理由を述べ、その後の対応までを相手に伝える必要があることを学習者は確認できたと思う。

3.5 実践例④：第13課 苦情を言う

第13課では、トラブルにあったときに相手に苦情を言う場面での会話を学ぶ。定着を図りたい

文型・表現は、1) 程度が低いことや、量が少ないことを表す言葉で、苦情や断りなど、言いにくいことを言うときにも使う「ちょっと」、2) 話し手がはっきり言いたくない場合などに省略するときの「ちょっと～んですが……」、3) ある状況を理由としてその結果を示す「それで」の3項目である。この3項目の定着を図るために、「考えよう」、「練習 A」、「練習 B」を順に進めていった。

「考えよう 2」で、「あなたは飛行機に乘りました。あなたの席は C-20 です。その席にだれかが座っています。あなたは何と言いますか。」という問いに対する学習者の答えは次のようであった。

- (8) a. あのう、すみません。この席はわたしの席ですから……。
 b. あなたのチケットをチェックして。
 c. わたしはここに座りたい。
 d. 立って!

学習者の多くは、(8a) のようにまずは相手がすでに座っている席が自分の席であることを伝えると答えた。しかし、それ以外に「立って!」のようにストレートに伝えるという学習者もいた。

同じく「考えよう 2」で、「あなたは電車の禁煙車両に乗っています。隣の人がたばこを吸い始めました。あなたは何と言いますか。」という問いに対する学習者の答えは次のようであった。

- (9) a. ここでたばこを吸わないでください。
 b. (禁煙マークを指差して) 見て!

ここでも学習者の多くが、「ここでたばこを吸わないでください」と言うことと答えた。また少数ではあるが、先の例と同じく「見て!」とストレートに言うことと答えた学習者もいた。

ここで考えなければならないのは、「たばこを吸わないでください」と言う前に、「ここは禁煙である」ということをまずさきに相手に伝えることが友好的ではないかということである。日本では、たとえ自分が間違っていないくても相手との関係が悪くならないように、また周囲のことも考え、相手にやわらかく伝えることがある。つまり、配慮するということである。学習者はその重要性を理解しなければならないと考える。これは先の飛行機の席の例についても同様である。しかし、学習者の母国語との関連性を無視することはできない。「立って!」「見て!」のようにストレートに伝えると答えた学習者の多くは母国語でそのように言うからと説明していた。これらを踏まえ、日本語ではどのように対応するかを十分に説明する必要があり、それを学習者が理解し使えるようになることが求められる。

「練習 A」、「練習 B」で話し手が苦情を言うという状況を設定し、「ちょっと～んですが……」の使い方を練習した。「ちょっと」は『みんなの日本語初級 I』第 6 課で「少し」の意味(例: ちょっと休みましょう。)として、第 9 課で相手からの誘いを断る表現(例: 金曜日の晩はちょっと……。)として、『みんなの日本語初級 II』第 28 課で依頼するときに使う表現(例: ちょっとお願いがあるんですが。)として導入されている。学習者にとって、言いにくいことを

やわらかく相手に伝えることができ、また婉曲的に苦情を言うときにも使えることが理解でき、有効的な練習になったと思われる。また、「あした、試験があるんです。それで、今、勉強しているんですけど……。」のように、ある状況を理由としてその結果を示す「それで」の使い方も再確認できた。「それで」は『みんなの日本語初級Ⅱ』第28課練習C1、C2で導入されるが、定着には時間がかかる。その理由として「それで」は接続詞であるため、文型と比べると練習が少なく、重要性が認識できていないからだと考えられる。口頭表現Aの授業で確認、練習ができたことは有効的であったと思う。

3.6 実践例⑤：第16課 許可を求める1

第16課では、相手に希望を伝えて許可を求める場面での会話を学ぶ。定着を図りたい文型・表現は、1) 話題を提示するときに使う「Nのことなんですが／だけど」、2) 相手に自分の希望を伝える「早く帰りたいんですが／けど」、3) 話し手のしたい行為(V)の可否を聞き、許可を求める「Vてもよろしい／いいでしょうか」の3項目である。この3項目の定着を図るために、「考えよう」、「練習A」、「練習B」を順に進めていった。「考えよう1」で、「あなたはあしたの日本語のクラスを休みたいと思っています。先生に何と言って話し始めますか。」という問いに対する学習者の答えは次のようであった。

- (10) a. すみません、先生。今よろしいですか。あしたやくそくがありますから、日本語のクラスを休ませていただきますませんか。
b. 先生、こんにちは、すみません。わたしはいまあたまがいたい。たぶんびょうきですから、あしたのクラスをやすませていただきますませんか。
c. すみませんが、わたしはあしたやすませていただきますませんか。あしたはしけんがありますから。
- (11) a. すみませんが、明日研究室に用事がありますから、日本語のクラスを休まれただけませんか。
b. 先生、あしたのクラスはちょっと…。あしたはしけんがありますから、クラスにやすんでいただけませんか。
- (12) a. 先生、すみませんが、あしたびょういんいかなければならないので、あした私はやすみたいよろしいでしょうか。
b. すみませんが、今、じかんがありますか。今日のクラスへまいりません。やくそくがありますから。
- (13) a. すみませんが、あしたは日本語のクラスへこられないんです。それはいいですか。

以上の学習者の回答例をみるとわかるように、どの答えにも問題が見られ、間違いのない正しい話し始めの発話とは言えない。まず、学習者は「話し始める」ために何が必要なのかがわかっていないように思われる。授業ではまず「話し始める」というのは、重要な用件を伝える前に相手の時間の都合を伺うことであると説明してから学習者に考えさせたが、その意味を十分理解できていない学習者がいたため、回答が統一されていない。そのため、多くの学習者は用件をすぐに伝えることを優先していた。また、話題を提示するときに使う「Nのことなんですが／だけ

ど」が未習であることも要因の一つと考えられる。『みんなの日本語初級Ⅰ』第25課会話で、「東京へ行っても、大阪のことを忘れないでくださいね。」と「Nのこと」はあるが、授業では会話を扱っていないため、学習者は意味も使い方も未習である。そこで、口頭表現Aの授業で「Nのこと」を導入し、練習した。

さらに目に付いた問題として、使役動詞を使って許可を求める「Vて（使役動詞）いただけませんか」を正しく使える学習者が少なかった点が挙げられる。既習文型を使って話そうという意志は見られたのだが、正しく使えるという段階には達していなかった。この点について詳しく見ていきたい。

(10a-c)のように、使役動詞「休ませて/やすませて」は正しく使えているが、「いただきませんか」となっており、可能形への変換ができていない。

(11a,b)のように、「いただけませんか」は正しく使えているが、(11a)では「休まれ」、(11b)では「やすんで」という動詞の形の間違いが見られる。(11a)においては、使役動詞ではなく受身動詞になっているうえ、て形での接続ができていない。(11b)においては、「やすんで」という動詞を使うことで「休む」行為をする人がだれなのか、理解できていないと考えられる。

『みんなの日本語初級Ⅱ』第26課では相手の行為を依頼する「Vていただけませんか」(例：コピーしていただけませんか。)、『みんなの日本語初級Ⅱ』第48課では自分の行為の許可を求める「Vて（使役動詞）いただけませんか」(例：コピーさせていただけませんか。)が導入されている。それぞれの課で文型の説明と練習が済んでおり、その違いは理解できているはずである。しかし、この時点ではまだ定着するまでに至っていなかった。確かに使役動詞は難しいと感じている学習者も多く、また受身動詞と混乱してしまう学習者もいる。そこで、本来なら口頭表現Aで使用しているテキスト第20課「許可を求める2」において、使役動詞を使って許可を求める練習をするのだが、時間的な問題があり練習できないため、この課で使役動詞を使った文型とその使い方、意味の違いを再確認した。

そして、「練習A」、「練習B」においては、話題の提示と許可を求める言い方を繰り返し練習した。さらに、「日本語の授業に遅れる」という状況を設定し、ペアで会話を作り、発表した。話題の提示→理由を述べる→許可を求めるという流れで会話を作ることができ、発表もよくできていた。

4. 指導について

4.1 目的を振り返る

ここで、2節で述べた4つの目的が授業での実践活動でどのように達成できたのか、振り返ってみる。

まず、第1の目的である「ある状況下において話し手として、自身の既習知識でどのように表現するかを考える」については、第13課(3.5節)、第16課(3.6節)で考えることができた。既習知識というのは、文型や表現、語彙を学ぶだけではなく、経験も重要であると感じたが、学習者はその時点での既習知識を駆使し、答えられていたと思う。

次に、第2の目的である「自身が話しかけられたとき、聞き手としてどのように応答するかを考える」については、第10課(3.2節)、第11課(3.3節)で考えることができた。学習者は、既習

表現を使って答えられていたことを評価したい。

また、第3の目的である「ある表現が文脈の中でどのような意味、機能を持つかを考える」については、今回はこの目的の授業報告ができなかったが、第3課「場所を聞く」と第7課「誘う・断る」において「すみません」を取り上げたことがあった。第3課では、人に話しかけるときの表現として、また、相手の時間を取って済まないという気持ちと「ありがとう」という気持ちの表現として取り上げ、第7課では、謝りの表現として取り上げた。このように他の表現においても授業で取り上げていけばよかったと反省している。たとえば、「じゃ／では」は、会話を切り上げるときに使う場合と相手の話や状況を受けて、話し手が今、判断した結果を話すときに使う場合があるが、授業では十分な説明ができなかった。

最後に、第4の目的である「不適切な会話例を見て、何が不適切で、なぜ不適切なのか、そしてどのような表現が適切かを考える」については、第12課（3.4節）で考えることができた。たった一文ではあるが、それを適切な表現にするのはなかなか困難であると感じた。もっと練習を重ねれば、きっと正しく判断できるようになると思う。

4.2 今後の課題

学習者にとって、文型は一つの形として覚えることができるが、場面にあった表現はなかなか容易には使えない。その理由として、その場の状況を認識し、それを判断し、どう表現するかについては、学習すると同時に経験も必要となってくるからである。つまり、学習者の生活環境により、その定着や達成度も変わってくるのではないかと感じている。積極的に日本での生活を楽しみながら、学習に取り組んでいける環境の学習者はやはり定着も速く、達成度も高いようである。今後は学習者の生活環境も考えて授業を進めることができれば、学習者の理解も深まり、達成度も高くなると思う。

今回使用した教材『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』（1課～21課）の全ての課を扱うことができなかった。また、課によって扱えない項目もあった。これは、時間的な問題もあるが、集中Aクラスは初級レベルということで、基本練習を中心とした活動になってしまったことも一つの原因である。また、目的を考えながら授業を進めていったが、どの課で、どのトピックスで、どの目的で授業を進めていくか、その判断力が足りなかったと痛感している。それから、もっと自由に学習者に会話をさせることも必要であると考え。自由という判断は難しいが、学習者の興味があることや必要性があることなども取り上げていけばよいかもしれない。

そもそも使用教材についても検討が必要であるかもしれない。今回使用した教材『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』と集中Aクラスのメインテキストである『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』の「会話」との比較検討である。先にも述べたが、より実用的に会話練習ができ、学習者自身が考え、会話を発展させることができるほうがよいとの判断により、使用する教材を『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』に決定した。しかし、集中Aクラスのメインテキストである『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』で導入した文型に沿って会話練習ができるのは、学習者にとっては利点であると考えられる。したがって、使用教材の選定は今後の課題として考えていきたい。

5. おわりに

学習者にとって、「日本語で話せる」ということは大きな目標である。いつか流暢な日本語で話せる 때가来るのを願っているはずである。その思いを受け止め、少しでも役に立つような授業を心がけてきたが、限られた時間内ではその手助けがほんのわずかしかなかったことは事実である。それでも、日本での生活において、その場の状況を把握し、それに対応していく練習が少しはできたのではないかと感じている。これから学習者の生活の一部にでも、このクラスで学習したことが活かさればうれしく思う。

参考文献

- 小池真理・中川道子・宮崎聡子・平塚真理（2011）『聞く・考える・話す 留学生のための初級にはんご会話』スリーエーネットワーク
- 小池真理・中川道子・宮崎聡子・平塚真理（2007）『聞く・考える・話す 留学生のための初級にはんご会話 教師用』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語初級Ⅱ 本冊』スリーエーネットワーク
- 吉成祐子（2014）「初級学習者を対象とする作文授業—「文章表現 A」授業報告—」『岐阜大学留学生センター紀要2013』 pp.29-37

中級学習者を対象とした聴解授業

— 「聴解演習C」授業報告 —

A Class Report of “Listening Comprehension C” for Intermediate Japanese Learners

石井由美

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける中級学習者を対象とする聴解授業「聴解演習C」についての報告である。2007年度後期から2014年度後期まで担当した中で、主に2014年度前期・後期に行った授業内容や指導方法を報告し、今後に向けての課題をまとめる。

1. はじめに

2007年度後期に「聴解演習C」を担当することになって以来、試行錯誤の連続の中で少しずつ改善を加えながら担当を続けてきた。聴解の授業に何が期待されているか、その期待に答えるにはどのような授業内容が適切か、日本語力の差があるクラスにおいて授業の進め方にどんな工夫が必要か、教室外での学習を促すための宿題や小テストの頻度や難易度はどの程度が適当か、などを常に念頭に置いてきた。初回授業に行うアンケート結果やコース途中での受講者からの意見・要望も大いに参考にした。特に、メイン教材のレベルについては受講者と話し合って決めるようにしてきた。その結果、2014年度の前期と後期では授業内容が一部異なり、前期は中上級レベルの教材を後半に使用したのに対し、後期はコースを通じて初中級レベルの教材のみを使用することになった。受講者のニーズや日本語力によって柔軟性を持たせることも重要だと考えての判断だ。

聴解の授業では当然「聞く」力を伸ばすことが目標となるわけだが、「聞く」ためには語彙や文法がわかっていることが前提となる。そのため、必要に応じて新しい語彙・文法を覚えることも求められる。また、「話す」など他の技能と完全に切り離すことはできない。聞き取れるようになった表現を使ってみる、つまり「話す」ことで会話力の向上にも表現の定着にもつながるだろう。週1回90分という限られた時間の中ではあるが、語彙・文法の導入や話す練習にも一定の時間を割いてきた。同時に、聞く練習を十分に確保するために教室外で何ができるのかも重視してきたつもりだ。だが、これまでのやり方で十分であっただろうか、よりよい授業にするためには何か違ったアプローチがあるのではないだろうか、と日々頭を悩ませている。

本稿では、「聴解演習C」の授業実践について報告し、中級レベルの学習者にとって聴解授業はどうあるべきかを考えるきっかけにしたい。

2. 授業計画

2.1 受講者の特徴

「聴解演習C」は中級レベルの学生を対象としたクラスである。一口に中級レベルと言っても、これまでの学習時間や学習環境の違いによって実際には受講者の日本語力にかなりの差がある¹。よって、日常的なことであれば問題なく聞き取れるレベルから教師が話すコントロールされた指示の聞き取りが困難なレベルまでの受講者が同じクラスで学習することになる。また、「集中コース」と「一般コース」の共通開講のため受講者数が多くなる傾向があり、日本語力のばらつきが大きい原因の一つとなっている²。一般コースとして受講できる最上レベルがCクラスという事情から上級レベルの学生が受講する例もある。ただし、一般コースの学生については専門の研究を優先させるために出席数が足りず修了できないケースも少なくないことから、授業のレベルは集中コースの学生を対象に設定するようにしている³。2014年度については、前期は集中コースの学生の日本語力が高めであったため、コース後半はレベルを少し上げた授業内容にした。後期は通常のレベル設定で実施した。

2.2 受講者へのアンケート調査

受講者のニーズ分析をするため、2014年度後期の初回授業で以下のようなアンケート用紙を配布し、受講者にはその場で回答を書いてもらった。

参考資料1. アンケート用紙

聴解演習C アンケート

- 1) 日本語学習歴： _____ 年 (_____ 時間)
- 2) 今までどこで日本語を勉強しましたか。(国、学校名)

- 3) 聴解教材は何を使いましたか。

- 4) 日本語の聞き取りはむずかしいと思いますか。(はい ・ いいえ)
「はい」の人 → 何がむずかしいですか。
(話すスピードがはやい ・ ことばがむずかしい ・ その他： _____)
- 5) 何のために日本語が必要ですか。
例：研究室の先生と日本語で話す／日本語で論文を書く

- 6) どのレベルまで日本語を上達させたいですか。

- 7) 何かこのクラスについてリクエストがあったら書いてください。

回答を見ると、日本語を学習する目的は「専門の授業が聞いて理解できる」「日常生活やアルバイト先でのコミュニケーションが潤滑にいく」「日本語で論文が書ける」ことを目指すものがほとんどを占めていた。また、「聴解演習C」のクラスに対する要望としては、「聴解力が伸びるように」といった漠然としたものが多かったが、「日本の文化に関する文章（モノログ）を聞きたい」とするものもあった。要望についてももう少し具体的な回答を得るため、授業内でさらに口頭にて確認したところ、会話の聞き取りに加えて、社会問題からポップカルチャーまで幅広いトピックについて聞きたいとのことだった。こうした受講者の要望は教材を選定する上で参考にした。

2.3 使用教材の選定

教材の選定にあたっては、前担当者が使用していた『聞いて覚える話し方 日本語生中継・初中級編2』を検討するところから始めた。この教材は、トピック（「出会い」「趣味」など）が身近で話しことば特有の縮約形やくださった表現を多く含み、日常での実際の場面で役に立つと判断した。それぞれのトピックに合わせた機能（「出会い」というトピックで「名のある」「人を紹介する」など）が学べるように構成されている点も決め手となり、メイン教材として使用することにした。レベルとしては初中級であり、ほとんどの受講者に適応する。成績上位グループの受講者には同シリーズの「中～上級編」も十分に使用できるが、クラス全体での使用となると慎重に考えなければならない。集中コースの学生から要望があった場合に限り、学期後半から中上級レベルに教材を切り替えることにしている。

『日本語生中継』ではダイアログを聞くタスクが中心になるので、説明や解説スタイルのモノログを聞くための教材も選んだ。2014年度前期は『毎日の聞きとり plus 40上巻』（中上級レベル）を、後期は『中級日本語音声教材 新・毎日の聞きとり50日下』（中級レベル）を使用した。どちらも幅広い分野からトピックが選ばれているため、内容を楽しみながら語彙を増やすことができる。2回の授業でメイン教材を1課分進めていき、時間に余裕があるときに『毎日の聞きとり』シリーズを使っている。

なお、一部の学生からJLPT対策をしてほしいとの声があったが、日本語力の差があるクラスでは実施しにくいことから、基本的に授業内でJLPT対策はしていない⁴。2014年度については、前期の初回授業で『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N2聴解』を一部使用するにとどめた。これは、受講者の聴解力を客観的に測り、授業内容のレベル設定をする上で参考にしたもので、学期途中や学期終了時での使用はなかった。

3. 授業内容

先に述べたように、学期ごとに受講者のレベルやニーズは違う。そのため、毎回同じ授業内容を実施しては行かないが、メイン教材である『日本語生中継』シリーズを2回の授業で1課分進め、時間の余裕があるときに『毎日の聞きとり』シリーズから学生の興味があるトピックを選んで聞くという基本的なスケジュールは変わっていない。予習の一環として宿題を課し、学期中に何度か小テストを実施することもパターンとして定着してきた。ここでは、2014年度前期および後期で実施した授業内容の概要を述べる。

3.1 2014年度前期

初回授業で受講者の聴解力を測ると、通常より全体的にレベルが高いことが判明した。学習意欲が非常に高く、「できるだけ多くのものを」「少し難しいものを」聞きたいという要望もあった。集中コースの受講者5名のうち、3名がコース修了後は上級クラス（Dクラス）へ進む予定であることを考慮し、全15コマのうち最後の5コマについてはメイン教材として『聞いて覚える話し方 日本語生中継・中～上級編』を使用することにし、次のような予定を立てた。

表1. 授業内容（2014年度前期）

回	メイン教材（『日本語生中継』）	宿題の提出	小テスト
1	初中級編 2	1 課 出会い	
2			
3		2 課 ホテルで	2 課 ホテルで
4			
5		4 課 機械のトラブル	4 課 機械のトラブル
6			
7		7 課 健康のために	7 課 健康のために
8			
9		9 課 趣味	9 課 趣味
10			
11	中～上級編	2 課 一緒に行ってみない？	2 回目
12			
13		4 課 渋滞してるらしいですよ	
14			
15			3 回目

取り上げる課（場面）は毎回決まっているわけではないが、受講者にとって身近なものを選ぶようにしている。また、中～上級編へ移行する際、受講者がレベルアップに適応できるよう、最初に学習する課は慎重に選んだ。2課「一緒に行ってみない？」は、すぐ前に学習する初中級編9課「趣味」と共通の機能表現（「誘う」「誘いに受ける／断る」）が扱われていることから、学習のつながりを持たせやすかった。そのため、順調に上のレベルに移行できたように思える。

受講者の予習・復習がしっかりできていたこともあり、授業は問題なく予定通り進んでいった。時間の余裕があるときに使用する『毎日の聞きとり plus 40上巻』（中上級レベル）についても2コマに一度定期的に使用する時間が取れた。宿題の提出状況、小テストに向けた復習の実施状況も概ねよく、受講者のレベルアップにつながったという実感があった。

宿題および小テストについては後述する。

3.2 2014年度後期

前期とは対照的に、集中コースの受講者の日本語力が通常程度であると判断したため、メイン教材は『聞いて覚える話し方 日本語生中継・初中級編2』のみの使用とした。また、小テス

トに関して、「テスト範囲が広いと大変だから何とかしてほしい」「他の科目の試験や宿題の提出、発表などと重なると困る」といった過度の不安を訴える受講者がいたので対策を講じる必要があった。その結果、小テストは課ごとの実施へと変更し、以下のスケジュールで授業を進めていくことにした。

表 2. 授業内容 (2014年度後期)

回	メイン教材 (『日本語生中継』)	宿題の提出	小テスト	
1	初中級編 2	1 課 出会い		
2				
3		3 課 うわさ	3 課 うわさ	
4				1 課 出会い
5		4 課 機械のトラブル	4 課 機械のトラブル	
6				3 課 うわさ
7		5 課 失敗	5 課 失敗	
8				4 課 機械のトラブル
9		7 課 健康のために	7 課 健康のために	
10				5 課 失敗
11		8 課 駅で	8 課 駅で	
12				7 課 健康のために
13		10 課 抱負	10 課 抱負	
14				8 課 駅で

レベル設定および小テストの実施方法に無理がなかったためか授業の進行に大きな問題は生じなかったが、一部の受講者から挙手による質問・発言が頻繁にあり、時間内に予定していた内容が終えられないことが続いた。他の受講者への影響を考え、できるだけ授業後に対応するなど努めたものの、メイン教材 1 課を 2 コマ分の時間すべてを使ってやっと終える状態で『毎日の聞きとり』シリーズに時間をあてることがほとんどできなかったのが残念だった。小テストは課ごとの実施に変更したことで準備がしやすかったようで、結果はまずまずだった。受講者の状況に合わせ、じっくり進めていった成果だと前向きにとらえたい。

3.3 予習としての宿題

2007年度後期から一貫して「予習としての宿題」を課してきた。あらかじめ次のようなタスクシートを配布しておき、受講者は各自 CD を聞いて問題に取り組む。その課を学習する 1 回目の授業の始めに回収して添削し、次の授業でフィードバックをしながら返却する。予習によって授業の進行が潤滑にいくだけでなく、受講者の聴解力を把握するのにも役立っている。授業の開始とともに宿題を回収するのは、教室に来てから慌ててクラスメートのものを書き写したり、授業中に CD を聞きながら答えを書いたりするのを防止するためである。

参考資料2. 宿題のタスクシート (例)

聴解演習C 宿題

名前: _____

第5課 失敗

*スキット1を聞いて次の問題に答えてください。

1. ディクテーション

- A: 水野さん、()、どうでしたか。
B: ええ、それがね、ひどい失敗しちゃったの。
A: え? どうしたんですか。
B: 課長に資料のコピーを頼まれてたんだけど、()、
コピーしちゃったのよ。
A: ええー、大丈夫でした?
B: ()。
課長も私も、()に言われるまで気がつかなかったのよ。
A: うわー。
B: もう()。どうしてあんな失敗しちゃったんだろう。
A: 課長、だいが怒ってるんですか。
B: うん。今日の会議のために、がんばってたからね。
A: そうですよ。毎日()よね。
B: ()で、この企画だめになっちゃうかも。
A: でも、まだ決まったわけじゃないだし、()くださいよ。
B: うん、ありがと。

2. 質問

1) 誰と誰が、どこで話していますか。

2) 誰がどんな失敗をしたのですか。

3.4 小テストの実施

評価の一環として小テストを行っている。2014年度前期まではコース中に3～4回実施し、1回のテスト範囲はメイン教材2～3課分で30分以内に終わるものを用意してきた。主にディクテーションと会話の内容を問うものから構成される出題形式は一定であったが、学期ごとに問題の内容は変えるようにした。先に述べたように、2014年度後期は小テストの実施について見直し、回数を増やして1課ごとに行う方法に変更した。テスト時間は15分を想定して作成したが、実際には解答を書くのに時間がかかる受講者がいたため20分以上かけることになってしまった。

問題はすべて教室で聞いたものから出題し、授業中にぼんやりしていない限り解答できるものを作成した。受講者の実力ではなく授業の理解度を測るためのテストなので、日本語力の低い受講者であっても復習をすれば点数が取れる問題構成になっている。

3.5 課ごとの学習の流れ

ここでは、メイン教材である『聞いて覚える話し方 日本語生中継・初中級編2』を使った授業について、教室内外での「学習の流れ」という観点から実際の活動を図1にまとめ、以下で詳述していく。

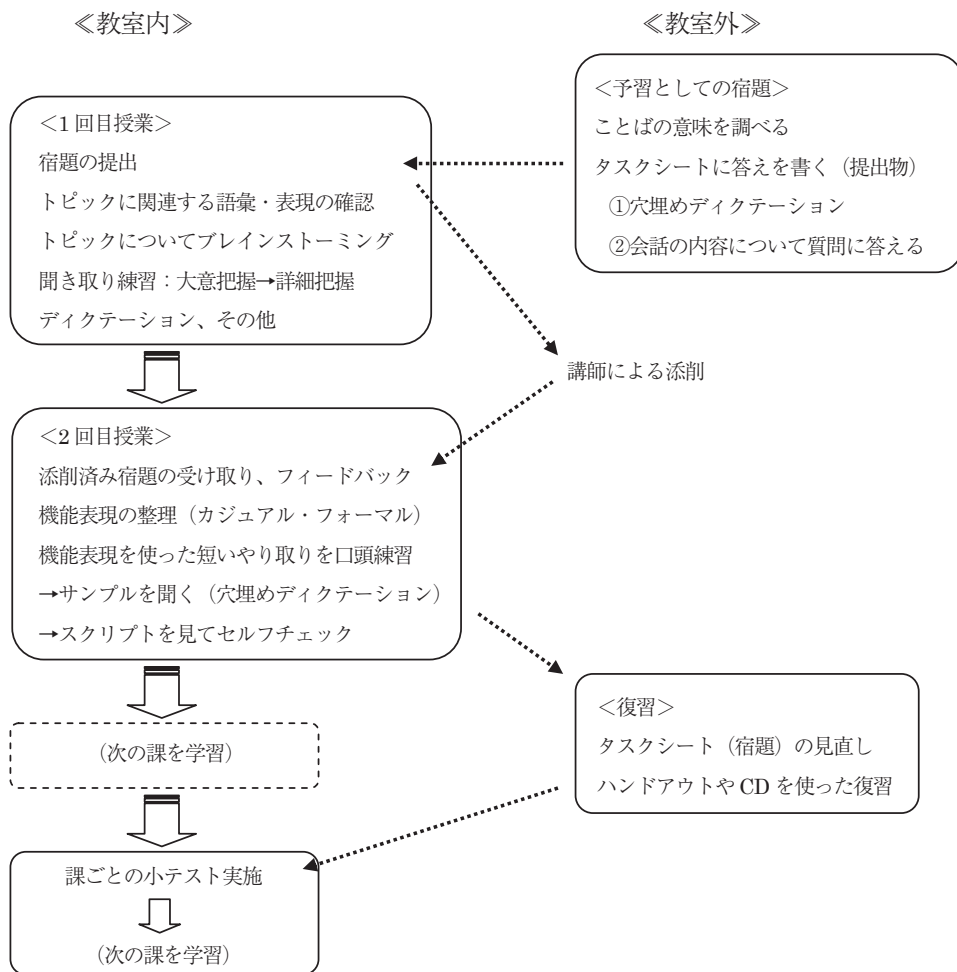


図1. 課ごとの学習の流れ

3.5.1 準備：予習としての宿題

特に日本語力の低い受講者にとって予習は重要だと考える。聴解本文に出てくる語彙の意味をおさえておくことや、授業で行う練習の一部を前もって学習しておくことで、気持ちにも余裕が

生まれ、落ち着いて授業に参加できる。メイン教材は受講者全員に貸し出しを行っており、いつでも自分のペースで音声教材を使った聴解練習ができるようになっている。熱心な受講者はCDからスマートフォンなどに音声を取り込み、ちょっとした時間を見つけては聞いている。

自分のペースで予習するのは難しいという受講者も多いので、「参考資料1. 宿題のタスクシート（例）」のような宿題を課している。この宿題に取り組むまえに、テキストにまとめられたキーワードの意味を調べるように推奨している。受講者のレベルにもよるが、会話特有の縮約形や文末の省略が多いこと、自然なスピードの会話が速く感じられることなどから、どうしても聞きとれない箇所がある。それでも、回数を重ねることで聞き慣れてくるようで、「宿題が難しくできない」といった苦情はなかった。

3.5.2 課の前半：1回目授業

授業での課の学習は、聞き取りの準備としてトピックに関する語彙や表現を確認するところから始める。トピックについてのブレインストーミングがこれに続く。あくまでも聞き取りのためのウォーミングアップという位置づけであり、時間をかけすぎるのは望ましくない。目安として語彙・表現の確認とブレインストーミングを合わせて15分、活発な発言があっても20分を超えないよう時間をチェックしながら進めている。

次にCDを使った聞き取り練習に入る。各課4つの会話があるのだが、最初の会話は宿題としてすでに聞いたものを授業で扱うことになる。自習の段階ではよく聞き取れなかった箇所をこの段階では明確に理解できるようにするねらいがある。1つの会話についてCDを3回聞く。1回目を聞いたあと、会話の内容が大まかに聞き取れているかどうか確認する。話している人物の関係、場面（場所、時間帯など）、話の結論、といった基本的なことを口頭で質問する。人物の関係は話している文体から推測するように促している。また、この程度の質問ではやや物足りないと感じる受講者への対応として、他に聞き取れたことを何でもいいから言ってもらうようにしている。2回目は途中で止めながら、細かい内容について聞き取っていく。3回目は確認のために通しで聞く。同じパターンで4つの会話の聞き取り練習を進めていく。

続いて、縮約形など口語的な表現や機能表現を含む文を正確に聞き取れているかの確認としてディクテーションを行う。テキストに練習問題として載っているものを使用し、5つの文で練習する。CDを2回聞いてから板書を見てセルフチェックさせ、助詞の省略や縮約形、受身や使役といった文法、敬語などの復習も必要に応じて行う。最後は「ポイントリスニング」という単文レベルの聞き取り練習で、イントネーションの違いや表現の小さな違いによって意味が異なるものを聞き分けることを目的とする。

3.5.3 課の後半：2回目授業

授業の始めに宿題を返却し、簡単にフィードバックを行う。その後、課の後半の学習に入る。課の前半は「トピック」に重点を置くのに対し、後半はトピックの中でよく使用される「機能表現」を中心に学習を進める。1回目授業での会話の聞き取り練習で機能表現はすでに使われているが、2回目授業では口頭練習を取り入れ定着を目標とする。

まず、テキストに「カジュアル」「フォーマル」に分けて整理された機能表現を音読してみる。イントネーションや発音に注意し、相手に伝わるように声を出して練習をする。次に、状況設定

をして機能表現を使った短いやり取りを考える発展練習へと進む。状況が思いつかない場合はテキストに練習問題として設定されている状態で練習する。数分ペア練習をする時間を取り、指名されたペアが発表する。次は穴埋めディクテーションのタスクである。タスクシートを配布し、受講者はCDを聞いて答えを書き入れていく。聞くのはテキストにある練習問題のやり取りのサンプルだ。自分たちで考えたものと比較することで何が足りなかったかを考える機会になる。課ごとに機能表現は2つか3つあり、それぞれ「機能表現の音読」→「機能表現を使った会話練習（ペア）」→「サンプル会話の穴埋めディクテーション」の流れに沿って進めていく。サンプル会話は機能表現ごとに4つあり、最後にスクリプトを見てディクテーションのセルフチェックをするのだが、スクリプトは課の前半（1回目授業）に聞く部分を含めこの段階まで一切見ないようになっている。

これでメイン教材を使った学習は一通り終了する。時間の余裕があれば、『毎日の聞きとり』シリーズなど他の教材で学習する。

3.5.4 定着：復習・小テスト

「表2. 授業内容（2014年度後期）」を見るとわかるように、小テストの実施日は宿題の提出日と重ならないように予定が組んである。授業での学習から小テスト実施まで少し間が空けてあり、受講者は各自のペースで授業を振り返ることができる。宿題のタスクシートを見直し、ハンドアウトやCDを使って復習し、小テストの準備をしておくよう指導している。小テストの結果が成績に反映することもあるが、準備は概ねしっかりしているようで、点数としてはクラス平均で80%以上のことが多かった。当然のことながら欠席した次の小テストでは点数を落とすことがあり、授業への出席があってこそその復習だと言える。

4. 中級聴解授業での指導について

2007年度後期に初めて中級聴解授業を担当して以来、反省と試みを繰り返して3章で述べたような方法で指導するに至った。その中で工夫してきた点、今後に向けて改善すべき課題を以下にまとめたい。

4.1 工夫してきた点

最も気を配ったのは、レベルがまちまちである受講者が同じクラスで学習しなければならない状況でどうすれば皆がそれぞれの目標に合わせてレベルアップできるかということだ。この点に関してこれまでに次のような方法を試みた。

- 1) 使用する教材のレベルに変化を持たせる
- 2) 成績上位者向けの特別宿題を用意する（通常宿題と特別宿題の2種類を用意する）
- 3) 聞き取り練習の際、基本的なタスクと応用的なタスクを設定する

1) について、1回の授業の中に難易度の高い教材（JLPT対策など）を使用する時間を取るようにした時期もあったが、メイン教材である『日本語生中継』の学習にあてる時間が十分に取れなくなるなどの問題があった。学期の始めは全員が十分対応できるレベルであるべきとの反省からこのやり方は中止した。現在は、先に述べたように集中コースの学生のレベルによって学期

の後半に少し上のレベルの教材へ移行する方法でレベルに変化を持たせている。

2) のように宿題を2種類用意するに至った経緯を説明すると、一般コースの受講者に JLPT N1 合格者が複数いたため、クラスのレベルを少し上げざるを得なかったことがある。集中コースの学生の同意を得てメイン教材は上のレベルのものを途中から使用したが、宿題も簡単すぎては意味がないので成績上位者には別のものを配布することにした。通常に比べて、①ディクテーションで書き取る箇所が長い、②内容に関する質問の数が多く、といった違いを持たせた。ただ、通常宿題をやってほしい受講者まで特別宿題を希望するという問題が生じたこともある。2014年度については、特別宿題が必要な受講者がいなかったため、全員に通常宿題を配布した。

3) のタスク設定だが、授業内で会話の聞き取り練習をする際、①会話をしている人物の関係、②何について話しているか、③会話の場面（場所、時間帯など）、④話の結論、を聞き取るのを基本的なタスクとして設定している。これは全員が取り組むタスクだが、一度に全部は難しいという受講者については、まずは①と②だけを集中して聞くように指導している。また、応用的なタスクとして、余裕がある受講者にはメモを取りながら CD を聞かせ、聞き取れた情報を発表してもらったり、内容に関する教師からの質問に答えてもらったりしている。受講者は自分のレベルやコンディション（予習状況やその日の体調など）に合わせて聞き取り練習に取り組めるため、ストレスを感じることはない。単純であって有効な方法だといえる。

4.2 今後に向けての課題

レベルも学習目的も多様な受講者に授業を行うための工夫はこれからも続けていかなければならないだろう。それに加え、使用教材の見直しもしたい。学習意欲を向上させるには魅力ある教材が必要だ。5年、10年と年数が経過するにともない、教材の内容が実情にそぐわなくなっていくこともある。例をあげると、「電話をかけてホテルの予約をする」「ファックス送信をする」といった場面は、10年前はまだ一般的だったかもしれないが、現在では受講者の世代ではめずらしくなっている。

もう一つの問題として、「受講者がコースを修了して一体どれだけ聴解力を高めることができたか」という素朴な疑問が頭をかすめる。限られた授業時間内のできることに限界があるので、教室外での受講者の状況に合わせた自習方法の提案ができるよう考えていきたい。具体的には、①授業内では取り上げない課についてもワークシートを配布し自習を推奨する、② JLPT 対策を希望する受講者について何らかのバックアップをする、などがある。②については、学習計画を立てさせて定期的に状況確認をするのもいいだろう。教材の紹介や貸し出しもできればと思う。

5. おわりに

振り返ってみると、試行錯誤してきたのは潤滑なクラス運営のためだったにすぎないように思える。「受講者は授業を楽しんでいるか」「授業についてこられない受講者はいないか」「レベル的にやさしすぎて退屈に感じていないか」「授業に不満を持った受講者はいないか」といったことに気を取られ、その対処に必死だった。確かに担当を重ねるうちに、どのようなクラス構成であっても表面的な対応はできるようになった。では、それで受講者の聴解力がどれだけ伸ばせたかと問われると、教師としての自信が揺らぐ。よい聴解授業とはどんな授業だろうか。やはり、

受講者が着実に聴解力を伸ばしていく授業だろう。そのために何を改善すべきか課題も少し見えてきたが、もう少し考える必要がありそうだ。

注

- 1 2014年度前期コース開始時に JLPT N2 レベルの模擬試験を実施したところ、正答率は45%～78%（平均64.91%）だった。
- 2 岐阜大学留学生センターの日本語研修コースには日本語を集中的に学ぶ「集中コース」と専門の研究と並行して日本語が学べる「一般コース」がある。中級レベルであるCクラスについては、集中コースは週10コマ以上の履修が必修なのに対して、一般コースでは週1～5コマを集中コースとの共通開講科目から選んで受講する。
- 3 受講者数は2011年度前期から2014年度後期においては10名から15名だった。それ以前を含めると、20名を上回ることもあった。一般コースの受講者のうち、修了できなかった人数は2014年度前期が8名中7名、2014年度後期が8名中2名であった。集中コースは2014年度前期・後期とも全員が修了した。
- 4 「聴解演習C」の受講者には JLPT N2 合格者もめずらしくない。その場合、対策として N1 レベルを希望することになる。一方、受講者の中には N2 レベルでも難しすぎると感じる場合もあり、一斉に JLPT 対策をすることはできない。基本的に JLPT 対策は自習によって進めればよいと考える。

使用教材

- ボイクマン総子・宮谷敦美・小室リー郁子（2006）『聞いて覚える話し方 日本語生中継・初中級編2』くろしお出版
- 梶本総子・宮谷敦美（2004）『聞いて覚える話し方 日本語生中継・中～上級編』くろしお出版
- 宮城幸枝・太田淑子・柴田正子・牧野恵子・三井昭子（2011）『中級日本語音声教材 新・毎日の聞きとり50日下』凡人社
- 宮城幸枝・三井昭子・牧野恵子・柴田正子・太田淑子（2003）『毎日の聞きとり plus 40上巻』凡人社
- 佐々木仁子・松本紀子（2011）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N2 聴解』アスク出版

中上級学習者を対象とした読解授業

— 「文章理解 D」 授業報告 —

A Class Report of “Reading D” for Upper-Intermediate-Level Japanese Learners

加藤 由紀子

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける中上級学習者を対象とした読解授業「文章理解 D」について報告するものである。文章理解 D の受講者の大半が日研生（日本語・日本文化研究コースの学生）であり、日研生のコースは後期から始まり次の年度の前期で修了する 1 年コースであるため、それに合わせる形で文章理解 D の授業を計画した。本稿では、2013 年度後期から 2014 年度前期までの 1 年の指導や活動内容から、中上級および上級前期の読解授業のありかたを検討する。

1. はじめに

岐阜大学留学生センター日本語研修コースには集中的に日本語を学ぶコースがあり、日本語能力で A～D の 4 つにレベル分けされている。本稿は、集中日本語コース D（中上級レベル）の学生のうち、希望する学生が受講する読解クラス、「文章理解 D」の授業報告である。後期の集中日本語コース D を履修する学習者の所属は様々であるが、ほとんどが日研生（日本語・日本文化研究コースの学生）なので、文章理解 D の授業内容は必然的に日研生に合わせた授業となる。また、日研生プログラムは毎年後期から始まり、次年度前期で修了するという 1 年のコースである。そのため、後期に行なわれる文章理解 D が、次年度前期の文章理解 D（日研生対象）につながるという年度をまたいだ形態の 1 年計画となる。本稿では、2013 年度 10 月に始まり 2014 年度 7 月に修了した 13 期生に合わせて行なった中上級および上級前期レベルの読解クラスについて考えたい。

2. 授業実践

2.1 文章理解 D の履修者と授業の特徴

日研生は日本語あるいは日本文化に関して専門的な研究をすることを目的として留学しているので、自分の研究のために専門的な文章を読まなければならない。また、日研生とともに学ぶ他の留学生も中上級レベルなので、日本語のレベルを中上級から上級に高めたい、日本人が読む様々な形式の文章が読めるようになりたいという目的意識を持っている。ただ、日研生と異なるのは、自分の研究を 1 年でまとめて論文を書き、その成果を発表する必要がないという点である。また、後半（2014 年度前期）の授業は基本的に論文を書く日研生を対象にした授業なので、論文読解は学習目的に合わないと考えられる学生がいる可能性があると考え、授業開始時には学生に 15 回の授業の概要を伝えた。しかし、授業目的が異なるために授業に出ないという学生はおらず、授業を進めて行く中でも内容を変えてほしいという希望は出されなかったので、当初の目標と計画

通りに授業を進めた。ただし、読解教材のレベルは例年より低く変更せざるを得なかった。それは13期の日研生の日本語能力に差があったからである。その差のために、2013年度後期の日本語集中クラスはCとDに分かれて在籍することとなり、それに伴って文章理解のクラスもCとDに分かれることになった。また、学生の科目選択が変則的なものになったことから、日研生の1名は、2013年度後期は文章読解Cに在籍した。この2つの異なるレベルの学生が2014年度前期に文章理解Dに合流することとなったために教材のレベル変更をしたのである。

2.2 授業の方向性

文章理解Dのゴールとして設定したことは、「日常接する様々な日本語の文章が理解できる」「アカデミックな文章が読める」「研究のための資料や論文が読める」の3つである。これらのゴールを目指して、どう読解力を付けていくかが授業作成のポイントとなった。

読解力を構成する要素として、R.C. スカーセラ／R.L. オックスフォード（1997）は、文法能力、社会言語学的能力、談話能力、方略的能力の4つを挙げている。それらの能力を簡単にまとめると次のようになる。

- ◆文法能力：文法規則、語彙知識、綴り（日本語においては漢字仮名混じり文）や句読法などの規則を理解する能力
- ◆社会言語学的能力：テーマを理解するために必要な社会言語学的な背景知識を理解する能力
- ◆談話能力：主題との関連性、文章全体の結びつきや一貫性を理解するために必要な談話構造を予測する能力
- ◆方略的能力：様々な文章から必要な情報を効率よく取り出し、不足している知識を推測する能力

その中でも談話能力と方略的能力は、未知の内容の文章を読む時、特にアカデミックな文章を読む時には必要となる能力である。日研生の場合は、最終的な研究を進めていくために、様々なテキストスタイルの資料を読まなければならない。中でも、アカデミックな文章の読解は不可欠であり、そのための基礎力として、これらの能力を養う必要がある。しかし、文章理解Dを数年担当して、全体的にこれらの能力が他の能力に比べて低いと感じていた。R.C. スカーセラ／R.L. オックスフォード（1997）は、談話能力について、「教師は、学習者が読み物に盛り込まれているこれらの要素に注意を払うようにすすめる。」(pp.135-136)とし、方略的能力については、「言語クラスで指導され、訓練される」(p.136)として、授業の中でそれらの能力が養えると述べている。以上のことから、方略的能力と談話能力に注目した授業を行なうことは可能だと考え、その目標に向かう授業計画を立てた。

ただし、他の2つの能力「文法能力」「社会言語学的能力」の向上を無視したわけではない。社会言語学的能力については、選択するマテリアルを日本の社会事情理解につながるものにしてその能力を高めることを考えた。また、文法能力の指導についても、マテリアルを読解するために必要な事項の確認や解説は、これまで通り行なった。

注目する2つの能力を養うためのストラテジーは、館岡洋子の考え方を参考にした。『新版日本語教育事典』の言語習得・教授法の読解指導の箇所(pp.747-748)で、館岡洋子はトップダウン処理（「タイトルからの内容を推測する」「文章から内容を予測する」「主要部分とそれを支え

る詳細部分という構成を理解する」「前の情報と後の情報を関連づける」「文章の全体構造を考える」「文章全体の意味を考える」など)と、ボトムダウン処理(「文を母語に翻訳する」「単語の意味を考える」「文の意味を考える」「文法構造を考える」など)をバランスよく取り入れることが重要だとしている。また、ボトムアップのみに頼らず大きな流れで文章を理解させるためには、スキーマ¹を活性化させることが有効であると述べている。また、「読む目的、テキストのジャンルなどに応じて、精読、スキミング²、スキヤニング³、批判的な読み⁴など読み方を指導することが必要である。最終的には自分で読むものを探したり、適切な読み方で必要な情報を得たり楽しんだりできる自立的な読み手を育てることを目指したい。」(p.748)としている。また、ピア・リーディング⁵を授業に取り入れると、仲間から知識やストラテジーを学んだり、仲間と異なった理解から読み自体が変容したりすることから考えが深まると述べている。筆者はこのようなストラテジーは、方略的能力と談話能力を養うのに効果的だと考え、それらを使った授業を計画した。

前半(2013年度後期)では、様々なスタイルの文章を、読む目的に合わせて効率的に読むことを中心とした授業、後半(2014年度前期)では、アカデミックな文章の読解を中心とした授業を行い、最後に修了論文作成のモデルとなるような論文の読解に進んでいく流れにした。なお、1年を通して重視したことは、クリティカル(批判的)な視点⁶から教材を読み、自分の意見を論理的に構築する態度を持つようにすることである。奥田純子はクリティカル・リーディングを読解の基本姿勢とする教科書、『読む力 中級』(2011)と『読む力 中上級』(2013)を監修したが、『読む力 中上級』のプロローグで、「クリティカル・リーディングとは、テキストを読んで何が書かれているかを正確に理解したうえで、複眼的な視点から、その内容や構成を検討することです。『クリティカル(批判的)』といっても、欠点を探したり否定したりすることではありません。」(p.1)「情報をうのみにせず、自立的な主体としてもものを考える姿勢は、研究はもちろん、日常生活や仕事上のさまざまな場面で役立ちます。」(p.1)と述べている。クリティカル・リーディングという読解スタイルに慣れていない学生のことを考えて、授業を開始する前に、このプロローグのコピーを配布し、どのような目的のために、どのようなことをするのか説明してから活動を開始した。また、学習者の意識や考え方を導き出し、教室を協働のための環境にしていく教師の役割と授業活動の方法については、假屋園・中村・丸野(2009)を参考に授業を構成した。

2.3 2013年度後期

前半の中上級レベルの授業目標は主に次の5点である。

- 1) 総合的に日本語理解能力を高めるために、異なったテキストスタイルの文章が読めるようになる。
- 2) 読む目的やマテリアルによって読み方が変えられるようになる。
- 3) 速読の技術を身につける。
- 4) 新聞記事の読解でクリティカル・リーディングができるようになる。
- 5) 要約ができるようになる。

表1に授業の概要をまとめる。

表1 2013年度後期の授業概要

週	授業内容	宿題
1	1) 授業についてのオリエンテーション 2) 速読の練習① スキミングの練習 ・速く目を動かす ・言葉を見つける ・トピック探し	練習問題プリント
2	1) 宿題の答え合わせと解説 2) 速読の練習② スキミングの練習 ・内容推測 ・情報取り スキミングの練習 ・キーワード探し	練習問題プリント
3	1) 宿題の答え合わせと解説 2) 速読の練習③ スキミング練習の続き ・キーワード探し 総合的な練習 ・キーワード探しと内容予測を組み合わせる	問題プリント (主題・大意・要点をまとめる)
4	1) 宿題の答え合わせと解説 2) 速読の練習④ キーワードとキーセンテンスから文章を要約する	問題プリント (文章要約)
5	新聞記事を読む① 朝日新聞記事「『収入』と『やりがい』どちらが大切？」(朝日新聞2010/01/23)を読む ・見出しから記事の内容予測をする ・グラフから分かることを述べる ・記事を読む	新聞記事を読んでくる
6	新聞記事を読む② 1) 朝日新聞記事「『収入』と『やりがい』どちらが大切？」を読む ・クリティカルな視点から疑問を出すことの意味について ・内容を読みながらクリティカルな疑問を出す ・記事の内容について意見と論拠を述べ合う 2) 朝日新聞記事「早期教育は必要？」(朝日新聞2004/05/17)を読む ・早期教育の必要性、早期教育を始める年齢について意見を述べ合う ・文部科学省所管の国立教育政策研究所が行なった調査の結果を読む ・グループで記事の中にある2つの意見のうちひとつを選び、選んだ記事を各自読む	レポート (「収入」と「やりがい」のどちらが大切かについて)
7	新聞記事を読む③ 「早期教育が必要？」続き ・グループで祖川泰治と小柴昌俊の意見のキーワードとキーセンテンスを探す ・グループで出たキーワード・キーセンテンスを発表、板書する ・板書されたものを整理する (不要なものを重複しているもの削除、追加事項を書き入れる) ・要約する時のポイントの説明	試験の一部に使用する資料の読解

7	<ul style="list-style-type: none"> ・整理された内容を見て、文章にまとめる時にどう並べるとわかりやすいか考える ・言葉のつながり方を考えて、文章にまとめる 	
8	<ol style="list-style-type: none"> 1) レポート（6回目の授業の宿題）のフィードバック 2) 試験用に配布した資料についての質問に答える 3) 新聞「読者の声」を読んでまとめる <ol style="list-style-type: none"> ①「『太ってるな』子どもを泣かす男性」（朝日新聞2009/05/11） <ul style="list-style-type: none"> ・クラスでキーワード・キーセンテンスを出す ・要旨作成で重要な内容と書く順序を考える ・まとめかたのテクニック ②「大人げない大人は無視したら」（朝日新聞2009/05/15） <ul style="list-style-type: none"> ・各自マテリアルを読んで、要旨を書く ・書いたものを発表する ・まとめる時のポイントを提示し内容をクラスでチェックする ③「育てた動物食べる教育 疑問」（朝日新聞2009/05/15） <ul style="list-style-type: none"> ・育てた動物を食べる授業がどんなものか、そのような授業が始まった背景や意義を紹介する ・各自、記事の要旨をまとめる ・意見に対してどう思うか意見を述べる (クリティカルな視点からも考えて) 	<p>レポート（意見文）作成： 記事をひとつ選んで要旨と意見を書く</p>
9	試験実施	
10	<ol style="list-style-type: none"> 1) 試験のフィードバック 2) レポート（意見文）のフィードバック 基本的な意見文の構成を提示し、問題点を明らかにする 3) 速読で読む 「声 若い世代」（朝日新聞2013/11/30） 「グルメ誘う町おこし」（朝日新聞2013/12/16） 	<ol style="list-style-type: none"> ①意見文再提出 ②「若い世代」の中のひとつの意見を選んで要約する
11	<p>新聞記事「若者 クールで繊細」（朝日新聞2013/12/29）を読む</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見出しから、どういう内容か考える ・グラフが表している意味を考える ・本文を読まず、小見出しから興味のある箇所を選ぶ ・「恋愛観」のところで、一番興味があった内容や日本の若者の特徴を表していると思う箇所をグループで選び、それを選んだ理由を述べ合う 	<p>興味のある箇所を選ぶ。選んだ理由をまとめる。また、そのことについて自分の意見をまとめる</p>
12	<ol style="list-style-type: none"> 1) 要約（10回目の授業の宿題）のフィードバック 2) 新聞記事「若者 クールで繊細」 <ul style="list-style-type: none"> ・先週の5つの見出しの内容で、最も興味がある箇所を探す ・宿題で各自が選んだところを挙げ、選んだ理由をクラスで説明する。 ・説明に対してクリティカルな質問をする。それに答える 	
13	<ol style="list-style-type: none"> 1) ライトノベルを読む『幽霊の恩返し』（赤川次郎） 時の変化に気を付けながら、内容を読む <ul style="list-style-type: none"> ・出だしの段落と、次の段落との時間関係に注意する（文学の書き出しのスタイルに注目して） ・音読 ・言葉や表現の確認、主語の省略・内容の確認 ・最後の段落で話全体の見方が変わる手法 ・最後の段落の効果 2) 来週の試験の資料の一部を配布 <ul style="list-style-type: none"> ・内容にざっと目を通す 	試験用の資料を読む

14	試験実施 (試験のフィードバックは返却した答案用紙に詳しく書き込み、全体的なフィードバックはプリントにまとめて配布した)	
----	---	--

授業内容は以下の3つに大きくまとめることができる。

- ◆ 1週～4週目：『中上級者のための速読の日本語』を使用して、速読の基礎となるスキヤニング、スキミング、予測・推測の基本的な技術を学ぶ。
- ◆ 5週～12週目：速読の技術を使って実際の新聞記事を読み、必要な情報を手に入れる。要約の技術を学ぶ。
対立する結論を主張する複数のテキストを読み、それぞれの主張を読み取るクリティカル・シンキング（批判的な思考）の姿勢を構築する。
自分の意見を持つ。
- ◆ 13週～14週目：ライトノベルを使って、物語の展開手法を知る。

速読の授業を開始すると、語彙能力が低い学生が予想以上に多いことが分かった。その主な原因は、非漢字圏であるため漢字読解能力が十分にない、カタカナ語が理解できないという2点であった。また、全体的に見て、それぞれの語を結びつけて文としての意味が通るようにするための文法能力が低い傾向もあった。そのため、例年より易しい練習から始め、解説する時間を増やした。また、日本語読解能力の差が授業効果に大きく影響することを避けるために、速読以外の授業では、使用する1週間前に教材を渡すようにして予習を促し、読解力が低い学生も授業に十分参加できるようにした。なお、うまく要約できない、意見を文章にまとめられないという学生が多かったので、ほとんど毎回宿題を出し、宿題のフィードバックを確実にこなすようにした。課題を宿題にしたので、自分のペースに合わせて課題をこなすことができたためか、ほとんどの学生が期限を守ってきちんと提出した。

クリティカルな読みについては、一つのトピックについて、対立した意見やとらえ方の異なる意見を述べている複数のテキストを読ませたり、学生がそれまでに考えたことがない刺激を受けるようなマテリアルを選んだりすることで、クリティカル・シンキングという思考習慣が身に付けられることを目指した。それはクリティカル・シンキングがクリティカル・リーディングの基礎になるからである。「トピックの理解を深めるためにも複数テキストは必要である。」と大河内・深谷（2007）がしているように、複数の視点から考えることがクリティカル・シンキングを誘発して深い読解につながる。自国で受けた教育形態の影響もあって、初めはクリティカルな姿勢を持つことに戸惑いを見せる学生がいたが、徐々に慣れて的確な意見や思いがけない視点からの意見も出るようになった。クラス全体の読み方がクリティカルになったもう一つの大きな原因は、すでにこのような読み方に慣れていたヨーロッパやニュージーランドの学生の影響を全員が受けたことにある。つまり、学生の発言から、クリティカルな視点とはどういうものか、どのような形で意見を出すのか等を自然に学んでいったのである。また、自分の意見という正解のない答えを自分の力で生み出していけるようになった。これは、加藤由紀子他（2014）の中でも述べていることであるが、仲間の新しい視点や考え方に触発されて、意識下にあった自分の考えが表面化し、意見という形になったからだと考えられる。このように学習者が自ら学んでいくというクラス・ダイナミクスができていったので、教師の役割は多少の軌道修正をすることだけで

十分であった。これがまさに池田・館岡（2007）が言うところの「教室の協働学習」であろう。コースの終わりには、なるほどと思えるような意見をだれかが出すと、それを適切に評価する意見や、それに対するクリティカルな意見も出すこともできるようになった。ただ、読み取れないまま意見を述べる学生や、他の学生の意見に圧倒されたためか、あまり発言できない学生がおり、個人差が目立つようになった。

日本文学を研究テーマにしたい学生がいることを想定してショートショートのような軽い読み物を読んだが、十分に時間が取れず、しかも小説的な表現スタイルの文章を理解するのが難しい学生が多かったため、内容を理解することが精一杯で、楽しむというところには至らず、不消化に終わってしまった。

2.4 2014年度前期

後半の上級前期レベルの授業目標は主に次の5点である。

- 1) 読む目的やマテリアルによって読み方を変えられるようになる。
- 2) アカデミックな文章の読解ができるようになる。
- 3) 論文の構成を知る。
- 4) 論文の書式を知る。
- 5) 内容を把握して適切にまとめることができる。

表2に授業の概要をまとめる。なお、授業で使用した教材は第1～11週は『大学・大学院留学生の日本語③論読解編』から選んだもの、第12,13週は『上級日本語教科書 文化へのまなざし』から選んだ論文（pp.11～18）である。

表2 2014年度前期の授業概要

週	授業内容	宿題
1	1) 授業についてのオリエンテーション 2) アカデミックな文章の構成を学ぶ ・全体の構成と段落の関係 ・段落の中の構成（中心文と支持文） ・段落の中の中心文を見つける練習 3) キーワードを探す ①教材1「異文化適応」 ②教材2「衝動買いを誘導する」	教材「衝動買いを誘導する」 各段落のキーワードを選び、段落の要旨を書く
2	1) 「衝動買いを誘導する」（先週からの続き）を読む ・宿題で書いたものを基にワークシートのアウトラインの空欄箇所を埋める ・書いたものの確認 ・アウトラインを見ながら、文章の構成がどうなっているか考える 2) 引用文の書き方を学ぶ ・引用の効果 ・引用のルール 原文のままを書き写す場合と、内容をまとめて書く場合の書式の違い	接続表現、接続詞と例文のプリントを読んでくる

2	<p>3) 「『まじめ』という言葉」を読む</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブレインストーミング ・プラス評価かマイナス評価か ・段落ごとに内容をスキミングする ・引用部分に注意しながら、本文をまとめる ・引用した文献を参考にして、1960年以降の人々の考えの変化についてまとめる 	
3	<p>1) 宿題（1回目の授業）のフィードバック</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語表現における接続詞と副詞の重要性の説明 <p>2) 「がん告知」を読む</p> <ul style="list-style-type: none"> ・がん告知についての意見を理由とともに述べる ・本文を各自黙読で読む ・要約の仕方の説明（中心文がある文章と中心文がない文章） ・例として挙げてある第1段落の要約のしかたの確認 ・第2段落を各自要約する ・第2段落の要約をクラス全体で行う 	<p>「がん告知」の3段落～7段落を、段落ごとに要約する</p>
4	<p>1) 宿題（3回目の授業）のフィードバック</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が書いてきた要約を発表する ・パラフレーズの方法を考える ・段落の要約を並べたものを、文全体として要約する ・引用したい内容によって要約する部分を選定して、まとめる方法 <p>2) 図を論文の中に入れた場合の説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「多様化の中のテレビ」での図の紹介と説明方法を見る 	<p>教材「多様化の中のテレビ」を要約する</p>
5	<p>1) 宿題（4回目の授業）のフィードバック</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィードバックの後、自分の要約文を修正する <p>2) 事実（データ）についての説明の文型と筆者の考えを示す文型、論の進め方に注目して文章を読む</p> <ul style="list-style-type: none"> ・段落のキーワード、キーセンテンスを見つける ・段落を要約する ・どのように論が進められているか ・データの説明をする文はどれか、どういう形になっているか ・筆者の意見を示す文はどれか、筆者はこの事実についてどう考えているか 	
6	<p>まとめの試験実施</p>	
7	<p>1) 試験のフィードバック</p> <p>2) 論文を読む①「企業内研修にみる文化摩擦」</p> <p>①全体構成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験や調査を中心にした論文と理論型論文の基本的構成 ・章の中に何を書くか（文系と理系の論文構成の違い） ・研究テーマによる書き方の違い ・読み手を意識した文章 <p>②序論</p> <ul style="list-style-type: none"> ・序論の論文における役目 ・序論に書かれる内容・文型・表現 ・実際に論文の序論を読んで、論理展開の構造を考える 	

8	<p>1) 試験のフィードバック (各自の解答用紙を見ながら)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 注意点を細かく見る <p>2) 論文を読む②</p> <p>①本論 1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 論文に用いる理論展開、分類、定義、考察、課題の達成のための表現法を知る <p>②本論 2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 結果と考察の組み立て ・ 文型と表現 ・ 段落の進め方 	<p>試験でうまくできなかった問題を書き直す</p>
9	<p>論文を読む③ 本論 2 : 結果と考察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 結果提示、結果からわかること、結果の判断、原因考察 	
10	<p>1) 論文を読む④ 本論 3 : 論の展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各章の論の展開 ・ 話題を次に進める手法 ・ 効果的な論の進め方 ・ 引用の必要性 <p>2) 教材に書いてある内容について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ クリティカルな視点から自分の意見を述べる 	<p>レポート : 自分の意見をまとめる</p>
11	<p>1) 論文を読む⑤ 本論 4 : 論の展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれの章の内容 ・ 論理展開と、全体のまとめ ・ 効果的な論理展開の方法 <p>2) 結論</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 構成と論理展開 ・ 結論の役割 <p>3) 論文全体の内容を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 内容的に同意するものはどれか、理由は何か ・ この論文の狙いは何か 	<p>論文の構成をまとめる</p>
12	<p>「言語教育と異文化間リテラシー」を読む</p> <p>1) 全体を見る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 構成はどうなっているか ・ 章立てはどのような関係にあるか ・ どういう内容を扱った論文か <p>2) 序論を読む</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれの段落の内容をまとめる ・ 段落がどういう構成で並んでいるか ・ 本論に導くために、どういう表現を使っているか <p>3) 本論①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本論を読んで段落ごとに内容をまとめる ・ その章の構成を考える 	<p>章の構成をまとめる (序論・本論)</p>
13	<p>「言語教育と異文化間リテラシー」を読む</p> <p>1) 宿題のフィードバック</p> <p>2) 本論②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本論を読んで段落ごとに内容をまとめる ・ 章の内容をまとめる <p>3) 結論</p>	<p>章の構成をまとめる (本論・結論)</p>

13	4) 全体のまとめ ・章の書き出しとまとめの関係 ・論理の進め方（どうい内容を示すのか） ・どうい内容が論を進めるのに効果的か	
14	まとめの試験実施	
15	1) 試験のフィードバック ・全体的によくできていた所、問題点の確認 ・学生からの質問を受ける 2) 沖縄の文化についての文章を読む ・スキャニング技術を使って	

授業の内容は以下の3つに大きく分けられる。

- ◆1週～6週目：アカデミックな文章の基本構造がはっきりした比較的易しい教材を使って、全体の構成と使用する文体の基礎を学ぶ。
内容を要約する。
- ◆7週～11週目：章立てのある比較的易しい論文を読む。
段落の要約から章の要約を考える。
各章の使用文型を知る。
- ◆12週～15週目：修了論文のモデルとなる論文を読む。
論文の構成と章立てを知る。
各章の果たす役割を知る。
使用文型や形式を知る。
章の書き出しとまとめの書き方を知る。
効果的に論を進める方法を知る。
全体のまとめ

基本的には2013年度後期に続く授業である。ただし、前年度に文章理解Cに入っていた日研生1名と日本社会文化プログラムの学生1名が、2013年度後期から文章理解Dにいた日研生9名に加わったため、コースの初めは、その調整を兼ねた復習になる文章を選んだ。また、それぞれの段階を経てスムーズに論文読解に進んでいけるようにと考えて、第1～11週は『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』の中から、第12、13週は『上級教科書 文化へのまなざし』の中から文章構成の分かりやすいものを選んだ。2014年度前期から文章理解Dに入った学生のために、コースの初めに2013年度後期に時間をかけた新聞記事読解の復習を入れることも考えたが、日本の新聞記事は、ひとつのトピックについて様々な情報や考えを集めるという構成で書かれているものが多く、論文の論理展開と異なった文章構成になるので、論文構成スキーマ形成の妨げになることを恐れて入れないことにした。

マテリアルはアカデミックな文章や論文に特化したもので、段階的に難度を高めていくようにしたためか、文章構造や論理展開はよく理解できるようになった。しかし、章の中の段落の展開、段落の中の文の構成や関係などというような細かな点までは考えられない学生が数名いた。

2.5 改善すべき点

2013年度後期と2014年度前期の授業を通して特に伸ばしたいと考えた能力は「談話能力」と

「方略的能力」であった。2013年度後期は、速読の練習をしてから実際の新聞記事の読み取りへと進めていったので、「談話能力」「方略的能力」の基礎がかなりできた。しかし、実際の新聞記事がなかなか読み取れない学生が数名いたので、当初の予定を変更してさらにいくつかの新聞記事を読むことにした。その変更によって、社会言語学的能力やクリティカル・シンキングを養うことができた。しかしその一方で、普通なら中上級レベルの学生が読解の時間に学ぶエッセイや説明文というテキストスタイルの学習が盛り込めなかった。つまり、新聞記事を読むためのスキーマ形成はある程度できたが、他のテキストスタイルについてのスキーマ形成に役立つ授業にならなかったということである。これは2013年度後期の反省すべき点である。

後半の2014年度前期は、より高度な談話能力・方略的能力の育成と、論文構造スキーマの形成を目指した上級前期レベルの授業を計画した。アカデミックな短い文章から、徐々に難しいものへ、そして論文へと進めていったので、全体的に見ると無理なく談話能力と方略的能力を伸ばすことができたようである。その一方で、受講者の日本語能力に差があることを心配するあまり、効率的に力を伸ばすことを重視しすぎて、『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』の中からのマテリアルを中心にしてしまったことが反省点である。学生からの発言が前の学期より少なくなったのは、トピックが目新しさを欠き学生の興味・関心を引くことができず単調な授業になってしまったためだと思われる。つまりトピックが古いと、内容が学習者にとって既知のもので、伊東・横山・福岡・高野(2009)が言うように、「読み手はテキストを読み解くプロセスを経る必要がなく、内的スキーマのみを用いて解答に至ることができる。」(p.41)状態になってしまったのであろう。トピックについてあまり真剣に考えなくても結論が出せる、チャレンジなことが少ない授業は、学習者にとって物足りない授業になるということである。このような問題を出さないようにするためには、学習者が読解力を伸ばす「しかけ」として、学生が積極的に考えたいようなマテリアルを用意する必要がある。安全に目的地にたどり着くことだけを考えず、前述の『読む力』の中にあるようなクリティカル・リーディングができるマテリアルも入れるべきであった。

3. おわりに

他の授業で日本語能力が高められたこともあって、学生の読解力は徐々に伸びていった。しかし、2013年後期の初めにあった受講者間の能力差を最後までほとんど縮めることができなかった。その原因は授業の中でトップダウン・ストラテジー（前述したトップダウン処理を取り入れた活動を使った授業の方略）を多用したことにあるかもしれない。南之園博美(1997)は、一般に、トップダウン・ストラテジーを多用することによって読解が促進されるといわれるが、トップダウン・ストラテジーの使用頻度にかかわらず読解力に差が出ることや、トップダウン・ストラテジーを使用しながらも読解力が低い学生がいることを挙げた。その原因について、「テキストの言語情報を処理する能力が十分ではないため、それをトップダウン・ストラテジー（南之園の原文は「トッパーダウン」「ボトムアップ」と表示されているので、引用ではそのままの形を使用する。）を用いることで補償しようとしたが、それらに過度に依存しすぎて、正しい理解に結び付かなかったのではないか……トッパーダウン・ストラテジーが有効に働くためには、ボトムアップ処理が十分に、正確に行なわれることが前提となると考えられ、ボトム

アップ処理の未熟さをトッパーダウン処理が補うには限界がある、ということではないだろうか」(p.59)と述べている。筆者は日本語能力の低い学生のボトムアップ処理に必要な時間を考えて、授業で使用するマテリアルを1週間前に学生に手渡して予習する時間を与えたり課題を宿題にして提出させたりして、学生の日本語能力差からくる問題を少なくしようと考えた。しかし、日本語能力が、あるレベル以下だと、ボトムアップ処理に時間がかかるため、十分予習ができないまま授業を受けるという状態になってしまったのかもしれない。つまりマテリアルのレベルが一部の学生には高すぎたということである。R.C. スカーセラ/R.L. オックスフォード(1997)は「学習者はおもしろいと感じるリーディング教材を読む時、現時点の英語力をはるかに超えたものも読むことができる」(p.154)と述べている。習得目標言語が日本語の場合には、文中の「英語力」を「日本語力」と置き換えてもよいだろうが、「はるかに超えたもの」にも限度があるということなのだろう。学習者の日本語能力に開きがあるクラスで、日本語能力が高い学習者も低い学習者も共に力を伸ばすことができるマテリアルの選択はどうあるべきか、どのような学習環境をどう提供していけばよいかについては今後検討していく必要がある。また、学習者とマテリアルに合わせて、様々なストラテジーの組み合わせや学習項目の選定、提出順なども考えていく必要がある。なお、加藤他(2014)の中で述べたことであるが、第二言語習得の授業においても、社会的知識を広げたり論理的思考力を高めたりすることは可能である。このような効果が得られるように、学習者が興味や関心を持って読めるマテリアルを探す努力や、授業中の活動をよりよいものにしていく努力を続けていかなければならない。

注

- 1 館岡洋子(2011)は、「スキーマ(図式/schema/schemata/schemas)とは環境との相互交渉の際に主体が使う知識の枠組みや活動の枠組みを指し、具体的にはさまざまな表現をとりうるが、機能的には1つとみなしうるまとまりを言う。」(pp.9-10)としている。また、西郡・鈴木(1994)は「トッパーダウン処理の遂行は、読み手の既有知識の全体がうまく構造化・系列化されていることが前提となる。このような一つのまとまった既有知識をスキーマと呼ぶ。」(p.77)としている。このように、文章の一般的な枠組みの概念のようなものである。
- 2 読み物の中から、その時に必要な情報だけをできるだけ速く探すこと。(『中・上級者のための速読の日本語[第2版]』参照)
- 3 要点や大意をつかむこと。キーワードを見つけ、先の予測、分からない部分の推測、前後からの類推をしながら文章全体を読んで、要点や大意をつかむこと。(『中・上級者のための速読の日本語[第2版]』参照)
- 4 クリティカル・リーディングのところで詳しく述べる。
- 5 館岡洋子(2011)は、「学習者同士が助け合いながら対話的に問題解決を行ない、テキストを理解していく読みの活動を『ピア・リーディング』と呼び、「読解授業においてピア・リーディングが有効である」(p.89)として、ピア・リーディングを取り入れた授業のコンセプト、実践・効果・教師の役割などについて詳しく述べている。また、館岡(2005)では、ピア・リーディングの意義と可能性について「相手と対話しながらも、同時に自分自身と対話しているのである。他者との対話という相互作用の中で、内省を深めることによって、

必要があれば自分自身が変わることになる。自分をとりまく周囲との相互作用の中で自己を変えることにより、動的に学習が起こっていると考えられる。」(p.160)としている。このピア・リーディングの基になっているのはピア・ラーニング(協働)という概念である。池田・館岡(2007)は、理論と実践から教室の協働学習のあり方について述べている。

- 6 道田(2005)は、批判的思考は研究を深めるために欠かせない姿勢であるとして、「じっくり考えるためには、もちろん当該領域に関する知識や、考え方についての知識、技能などを持ち合わせているほうがよいであろう。しかし、最も大切なものは、批判的に考えようとする『態度』を持っていることである。」としている。多面的な視点から考えること、自分の意見さえも客観的に見ることができる姿勢のことで、良質な意見や理論を構築するために最も重要なものであると考える。

参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著(2002)『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』
アカデミック・ジャパニーズ研究会編著(2001)『大学・大学院留学生の日本語①読解編』
池田玲子・館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために—』ひつじ書房
伊東祐郎・横山淳子・福岡理恵子・高橋愛子(2009)「アカデミック・ジャパニーズにおける読解力」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集35』pp.31-46
大河内祐子・深谷優子(2007)「複テキストはいかに統合的に理解されるか：読解中の活動に注目して」“Cognitive Studies” 14(4), pp.575-587
岡まゆみ(2013)『中・上級者のための速読の日本語(第二版)』The Japan Times
奥田純子監修(2013)『読む力 中上級』くろしお出版
奥田純子監修(2011)『読む力 中級』くろしお出版
加藤由紀子・伊藤かな・藤森秀美・三輪郁子(2014)「読解を意見表明につなげるための連携授業」『岐阜経済大学論集47巻2・3号 pp.131-155
假屋園昭彦・永田孝哉・中村太一・丸野俊一(2009)「対話を中心とした教室デザインおよび教師の対話方法の開発研究」『鹿児島大学教育学部 教育実践研究紀要』第19号、pp.123-163
館岡洋子(2005)『ひとりで読むことからピア・リーディングへ 日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』東海大学出版会
館岡洋子(2005)「言語習得・教授法 B 外国語教授法 読解指導」日本語教育学会編集『新版日本語教育事典』pp.747-748、大修館書店
東京大学 AIKOM 日本語プログラム 安藤安月子・丸山千歌(2005)『上級日本語 文化へのまなざし』東京大学出版会
西郡仁郎・鈴木美加(1994)「日本語の読解過程における概念スキーマの提示効果」『留学生日本語教育センター論集』20、東京外国語大学 pp.77-94
道田泰司(2005)「批判的思考から研究を考える」『日本化学会情報化学部会報』-jlc.jst.go.jp, pp.54-60
南之園博美(1997)「読解ストラテジーの使用と読解力との関係に関する調査—外国語としての

日本語テキスト読解の場合―』『世界の日本語教育』7、国際交流基金 pp.31-44
R.C. スカーセラ／R.L. オックスフォード（1997）『第2言語習得の理論と実践 タペストリー・
アプローチ』 牧野高吉・菅原永一訳，松柏社

年 報 編 (2014年 4 月～ 2015年 3 月)

1. 日本語研修コース	87
2. 日本語・日本文化研修コース	102
3. 日本社会文化プログラム	105
4. 全学共通教育	107
5. 留学生指導	108
6. 留学生センター年間行事	118
7. 留学生センター交流ラウンジの利用について	129

資 料

岐阜大学外国人留学生数	131
-------------------	-----

1. 日本語研修コース

1.1 集中コース：第36期（2014年4月～9月）

1.1.1 スケジュール及び受講者

- 4月10日（木） 開講式
- 4月11日（金） 授業開始
- 7月31日（木） 授業終了

日本語研修コース第36期は従来と同様、初級から中上級の4レベルのクラスを開講した。ここに、学内公募による留学生20名（うち、研究生11名、大学院修士課程4名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）5名）、及び留学生センター所属の留学生（日本社会文化プログラム）4名の計24名が受講することになった。

プレイスメントテスト及び面接の結果、Aクラス（初級レベル）が7名、Bクラス（初・中級レベル）が6名、Cクラス（中級レベル）が6名、Dクラス（中上級レベル）が5名となった。

1.1.2 各クラスの時間割と受講者・授業報告

[Aクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A [富田]	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [富田]	総合日本語A [六郷]	総合日本語A [田辺]
2	総合日本語A [野原]	総合日本語A [六郷]	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [三輪]	総合日本語A [河合]
3	総合日本語A [石井]	文章表現A [吉成]		口頭表現A [三輪]	
4	パソコン演習 [野原]				

授業報告（Aクラス担任：吉成）

初めて日本語を学習する人から母国で日本語を学習したことがある人までの計7名（協定校からの学部所属の交換留学生2名、学内公募の研究生5名）が受講した。受講者の国籍は、オーストラリア(2)、中国(3)、バングラデシュ、モンゴルであった。「総合日本語A」では8名の教員によるティーム・ティーチングによって授業が進められ、日本語初級文法を学ぶ。『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を使用し、ドリル練習や文

作、会話など口頭練習を中心に授業が行われる。学生には授業外での予習・復習を求め、学習した文法項目の理解度を確保するための文法復習テストを6回実施した。また技能科目として、まとまった文章を書くための作文のクラス「文章表現A」、『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』をメインテキストとして日常会話を学ぶ「口頭表現A」、コンピューターの基本操作（日本語入力の仕方、インターネットを使用した自律学習法、発表用ソフトの利用など）を学ぶ「パソコン演習」の授業がある。

今学期は7名でスタートしたが、1名は学期後半から出席しなくなり、途中放棄することとなった。またもう1名は最後まで授業に出席していたが、成績が振るわず修了規定が満たせなかった。学習方法のアドバイスなど授業外でも指導を行なったが、懸命に学習する姿勢があまり見られなかった。成績が良い学生は授業内の態度だけでなく、自宅学習にも時間をかけて勉強しているが、その姿勢が欠けていたように思う。

課毎の内容や語彙が定着するよう、授業内で課の学習が終わった時間に復習クイズとして語彙と文法の確認テストを行なった。学生にはよい復習の機会になったようだが、勉強したばかりの内容が身に付いていないこともわかり、がっかりすることも多かった。特に語彙は忘れていくことが多いため、より使用頻度の高い語彙にしぼるなど、復習クイズも工夫していきたい。

文章表現Aとパソコン演習のクラスが連携し、学期末に行われる「プレゼンテーション発表会」の今学期のテーマは「国のおすすめの観光地」であった。発表のための準備の段階では質問を予測して答えを考えておいた人もいたからか、フロアとのスムーズなやりとりができた。最後の発表会においても、自主的に発表練習に取り組んでいた学生はよい発表ができていた。語学学習は学習者本人の積極的な態度が重要だと感じた今学期であった。

[Bクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1		総合日本語B [橋本]	総合日本語B [村田]	総合日本語B [野原]	総合日本語B [橋本]
2		口頭表現演習 BC [橋本]	聴解演習 B [富田]	口頭表現B [六郷]	文章表現B [田辺]
3				総合日本語B [石井]	文章表現B [村田]

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Bクラス担任：橋本）

Bクラスは初中級レベルの受講者5名（学内公募の研究生4名、修士課程1名）で、小

さなクラスになった。受講者の国籍は、中国(4)、ベトナムであった。9月の修了判定の結果、修了規定を満たさなかった1名をのぞき4名が修了した。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで初級文法を正確に使いこなすことを目標にしてきたが、日本語研修コース全体のレベル設定を見直し、Bクラス終了時に中級レベルに達することを目標とした。

Bクラスでは、前半で『中級へ行こう』をベースに初級文法の復習と運用練習を行ない、後半で『中級を学ぼう 中級前期』（スリーエーネットワーク）をベースに中級レベルの文法を学習した。総合日本語Bでは、この2冊の文法練習を扱い、本文読解は文章理解B、作文の部分は文章表現Bで扱った。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。また口頭表現については、モノローグ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

今期のBクラスは目標設定を上げたため、従来より難しい内容であったが、学生達は最後まで真面目に取り組んだ。学生が5名と少ない人数であったこともあり、丁寧に進めることができた。自発的に発言する学生が多く、積極的に日本語を使おうとする努力が見られた。課題にも積極的に取り組み、質問も多く出て、活発なクラスになった。

[Cクラス]

時間割：総合日本語Cは必修、技能科目は選択。合計10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語C [吉成]		総合日本語C [吉成]		総合日本語C [河合]
2	聴解演習C [石井]	口頭表現演習BC [橋本]	口頭表現C [田辺]	総合日本語C [野原]	文章理解C [橋本]
3	漢字 [吉成]	文章表現C [城戸]		文化 [森田]	
4				総合日本語C [橋本]	

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Cクラス担任：吉成）

受講者は中級前期レベルの学習者6名（日本社会文化プログラム学生3名、協定校からの大学院所属の交換留学生1名、学内公募の修士課程学生1名、研究生1名）、国籍はア

アメリカ、タイ、中国(2)、ベトナム、ロシアであった。「総合日本語 C」の水・木・金曜日の3コマで『中級を学ぼう（中級中期）』（スリーエーネットワーク）を中心に、各担当が作成する副教材を使用しながら、中級文法項目を学習し、読解や作文などを行なった。課毎にテーマを決めた文法項目を学ぶ時間も設けた。メインテキスト終了後、担当者毎に活動のテーマ（長文読解、ディベートなど）を決めて授業を進めた。毎週金曜日は文法の時間とし、日本語能力試験 N2 程度の文法項目を学ぶ時間とした。毎週月曜日は日本人学生との合同授業で言語学の基礎知識を学びながら、「読む・聞く・話す・書く」活動を通して日本語力を高める演習の時間とした。技能科目として7科目が用意され、少なくとも5科目を選択することになる。

まじめな学生が多く、それぞれが宿題や課題に取り組んでいることがよくわかり、宿題の提出状況も問題がなかった。人数が少なかったこともあり、授業内で個別に指導することもいつもよりできたかもしれない。学期が終わるころには日本語力の伸びを感じることができた。ただし、日本社会文化プログラム学生1名の欠席が多く、出席や成績等の修了要件を満たすことができなかった。

今学期から教科書のレベルを「中級前期」から「中級中期」にあげたが、十分ついていくことができた。さらに難しい課題などに挑戦する活動など教師間の連携を強化し、指導に当たっていききたい。

[Dクラス]

時間割：総合日本語Dは必修、技能科目は選択。合計7科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [石井]	総合日本語D [加藤]		総合日本語D [土谷]	
2	文章理解D [太田]	聴解演習D [城戸]	文章理解D [村田]		総合日本語D [村田]
3				文化 [森田]	口頭表現D [橋本]

授業報告（Dクラス担任：土谷）

本学期のDクラス受講者は、7名（日本語・日本文化研修留学生2名、日本社会文化プログラム学生1名、協定校からの大学院および学部所属の交換留学生2名、学内公募の研究生1名、同修士課程学生1名）、受講者の国籍は、韓国、中国(3)、ドイツ、ニュージーランド、ベトナムであった。日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）は、秋学期にDクラスを履修し、春学期は全学共通教育科目等を履修するのが理想だが、今期（13期）日

研究生2名に関しては、プレイメントテストの結果からCクラスから始めるのが妥当と判断し、先学期（2013年秋学期）Cクラス、本学期Dクラスを履修した。技能クラスに関しては、本学期のDクラス学生の選択科目であるとともに、先学期にDクラスの単位を取得した日研究生8名と日本社会文化プログラム学生（以下社会文化生）1名の必修科目でもあるものがあり、クラスサイズが大きくなる科目が生じた。

本学期の総合Dでは、例年にない配慮が強いられた。日研究生は春学期に修了小論文の執筆があるが、Dクラスの日本語の学習と、小論文執筆が重なることを過重なストレスと感じる学生がおり、その対応に少なからぬ時間を使わざるを得なかった。個人面談に時間を割き、試験やクイズの軽量化（毎週実施する漢字クイズや学期中3回実施する筆記試験の内容変更等）をし、教科書の語彙リストを特別に準備して希望者に渡した。すると、それを見た他の学生も、自分も漢字、語彙で苦戦していると訴えて、日研究生と同様の配慮を求めてきた。Dクラスの担任をして10年近くになるが、このような学生にとって楽な授業をしたことはない。確かに過去の学生と比して日本語力が足りないと感じられ、レベル調整は必要だったのかもしれないが、反面甘すぎたのではないかという思いもある。もう少し嘯み応えのある授業にしてもついてきて日本語が伸びそうな学生もいたが、本学期の授業はそのような学生にとってはあまり益がなかったことも悔やまれる。

総合D以外の技能クラスでも、授業内容を易しくしたというコメントが各授業担当教員より寄せられた。このような傾向が、本学期のみであったのか、今後も続くことなのか、注視していく必要がある。

留学生センター主催の日本文化ワークショップを今年度春学期にも2回開催し（5月14日（水）郡上踊りワークショップ、7月2日（水）能楽ワークショップ）、それらを授業の振替として学生に参加を促した。両ワークショップについては、p.119、p.121を参照されたい。

1.2 一般コース

4月11日（金）授業開始

7月31日（木）授業終了

[科目名と受講者]

クラス名(レベル)	科目名	受講者数
一般A 1（入門）	総合日本語A 1	6
一般B（初中級）	総合日本語B	6
	聴解演習B	
	文章理解B	
一般C（中級）	総合日本語C（演習）	8
	総合日本語C（文法）	
	聴解演習C	
	文章理解C	
	漢字	

[時間割]

		月	火	水	木	金
1	一般A 1		総合A 1 [六郷]	総合A 1 [田辺]	総合A 1 [石井]	
	一般B			総合B [村田]	総合B [野原]	総合B [橋本]
	一般C	総合C（演習） [吉成]				
2	一般A 1	総合A 1 [富田]	総合A 1 [加藤]			
	一般B	聴解演習B [富田]				
	一般C	聴解演習C [石井]			文章理解C [六郷]	
3	一般A 1	総合A 1 [野原]				
	一般B					文章理解B [村田]
	一般C	漢字 [吉成]				
4	一般C				総合C（文法） [橋本]	

授業報告

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、初級（A1、A2）、初中級（B）、中級（C）の3レベルを設定しているが、初級後半に当たるA2クラスを受講する学生が例年少なく、今期はいなかったため、週6コマで初級文法を終了するクラス（A1）を開講した。

初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多かった。特に今期は週6コマとコマ数が多く、その分1週間の学習量が多く、進度も速い。教科書として『みんなの日本語』を使用したのが、このような受講状況で文法・語彙積み上げの教科書をベースに授業を進めるのは難しいと感じた。

初中級以上のレベルになると、初級をどのように学習したかで学生のレベルに差が生じる。特に、集中コースのAクラスで半期15コマで集中的に学習した学生と、一般コースで初級を学習した学生とでは、理解力はともかく、口頭能力に大きな差が生じている。その差を埋めるだけの口頭能力の養成は、一般コースでは難しいので、クラスでは初中級レベル（B）、中級レベル（C）の文法項目の学習・理解に留まっているのが現状である。

初中級クラス、中級クラスは、集中コースの授業から総合日本語、技能クラスの一部を受講する。専門の授業で忙しい中、受講者は熱心に授業に参加していた。

1.3 集中コース：第37期（2014年10月～2015年3月）

1.3.1 スケジュール及び受講者

10月10日（金）	開講式
10月14日（火）	授業開始
12月25日（木）～1月5日（月）	冬季休暇
2月10日（火）	授業終了

日本語研修コース第37期は従来と同様、初級から中上級の4レベルのクラスを開講した。ここに、国費教員研修生1名と国費研究留学生2名、学内公募による留学生18名（うち研究生15名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）3名）、及び留学生センター所属の留学生16名（うち日本語・日本文化研修コース10名、日本社会文化プログラム6名）の計37名が受講することになった。

プレイスメントテスト及び面接の結果、Aクラス（初級レベル）が11名、Bクラス（初中級レベル）が9名、Cクラス（中級レベル）が7名、Dクラス（中上級レベル）が10名となった。ただし、これらのクラス人数は最終的に各クラスに所属していた人数であり、学期が始まってから、クラスの変更や、集中から一般コースへコースを変更するものもあった。

1.3.2 各クラスの時間割と受講者・授業報告

[Aクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 A [石井]	総合日本語 A [吉成]	総合日本語 A [田辺]	総合日本語 A [野原]	総合日本語 A [河合]
2	総合日本語 A [野原]	総合日本語 A [六郷]	総合日本語 A [石井]	総合日本語 A [三輪]	総合日本語 A [田辺]
3	総合日本語 A [野原]	文章表現 A [吉成]		口頭表現 A [三輪]	
4	パソコン演習 [野原]				

授業報告（Aクラス担任：吉成）

まったく初めて日本語を学習する人や母国で日本語を学習したことがある人、前期に一般A1で学んだことがある人など、学習経験は異なるが初級学習者でまとめられる11名

(教員研修生1名、日本社会文化プログラム学生1名、学内公募の研究生9名)が受講した。受講者の国籍はアメリカ、インドネシア、エクアドル、タイ、中国(5)、バングラデシュ、ベトナムであった。学期当初は集中Aクラスで学んでいたが、専門分野の研究時間との調整がうまくいかずに一般A1に移った人や(2名)、習得状況を勘案して学期開始1ヵ月後に集中Bクラスから移動してきた人(2名)もいた。熱心な学生が多く、授業の出席率も全般的によかった。宿題や課題の提出等もまじめにこなしていたが、初めて日本語を勉強する2名はなかなか成績が伸びず、補講時間を設けて対応しなければならなかった。それでも1名は成績不良のため、修了不可という残念な結果となってしまった。

「総合日本語A」では8名の教員によるティーム・ティーチングによって授業が進められ、日本語初級文法を学ぶ。『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』(スリーエーネットワーク)を使用し、ドリル練習や文作、会話など口頭練習を中心に授業が行われる。また技能科目として作文のクラス「文章表現A」や日常会話を学ぶ「口頭表現A」そして日本語入力などコンピューターを使った「パソコン演習」の授業がある。

後期は授業期間が14週となっており、授業スケジュールは前期(15週)に比べて忙しいものになっているはずだが、授業後の学生アンケートでは授業スピードの速さについては特に問題はなかったようだった。ただ「もっと練習がしたかった」という意見もあり、授業内での口頭練習時間が短くなっていたとも考えられる。教員間で情報を共有し、授業内活動について工夫をしていきたい。

授業では会話の練習が少ないと思っていたからか、何名かの学生は積極的に交流ラウンジでのチューターとの時間を利用して話をしている姿をよく見かけた。これまでのAクラスの学生からは日本語が上手ではないので恥ずかしいという気持ちでなかなか利用できないという意見を聞いていたが、このような機会をどんどん利用するよう働きかけていきたい。

本学は人数が多めではあったものの、クラスのまとまりはよく、授業を行う上で特に問題はなかった。しかし、上述したように日本語がなかなか身につかない学生がおり、クラス内でのレベル差に気を使うことが多かった。ペア練習の相手は教師が行なったり、席順にも配慮した。文字の読み書きが最後まできちんとできなかったことを考えると、初期の段階でできないことの自覚を持たせ、最初から厳しく指導していく必要があったのではないかと反省している。

恒例となっている学期末に行われるプレゼンテーション発表会では、「私の国の○○(例：有名人、観光地、祭りなど)」として、自国を紹介する内容とした。原稿完成までに何度も書き直しをするのだが、今学期はその作成段階で時間をとられてしまい、発表練習が不十分であったように思う。授業時間が短い中でも手順や活動に工夫し、万全の準備が

できるよう考えていきたい。今学期の発表会でもAクラス担当の日本語教員、各学生の指導教員や研究室の学生、そしてBクラス、Cクラスの学生など大勢の人に参加していただいた。発表した学生たちは大勢の前で発表する緊張感と達成感を感じたようだった。

[Bクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [富田]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [六郷]	総合日本語B [田辺]
2	聴解演習B [富田]	口頭表現演習BC [橋本]		口頭表現B [村田]	文章理解B [村田]
3	文章表現B [石井]				

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Bクラス担任：橋本）

今期のBクラスは初中級レベルの受講者9名（学内公募の研究生5名、協定校からの学部所属の交換留学生2名、日本社会文化プログラム学生2名）であった。受講者の国籍は、アメリカ(2)、オーストラリア(2)、中国(4)、ペルーであった。2月の修了判定会議の結果、修了規定を満たさなかった2名をのぞき、5名が修了し、2名（日本社会文化プログラム学生）が単位を取得した。

総合日本語Bでは、前期に引き続き、『中級へ行こう』『中級を学ぼう 中級前期』（スリーエーネットワーク）の2冊を使用してクラスを進めた。

Bクラスでは、前半で『中級へ行こう』をベースに初級文法の復習と運用練習を行ない、後半で『中級を学ぼう 中級前期』（スリーエーネットワーク）をベースに中級レベルの文法を学習した。総合日本語Bでは、この2冊の文法練習を扱い、本文読解は文章理解B、作文の部分は文章表現Bで扱った。また口頭表現については、モノローグ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

[Cクラス]

時間割：総合日本語Cは必修、技能科目は選択。合計10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語C [吉成]	総合日本語C [六郷]	総合日本語C [吉成]	総合日本語C [石井]	
2	聴解演習C [石井]	口頭表現演習BC [橋本]	口頭表現C [加藤]	文章理解C [六郷]	
3	漢字 [森田]	総合日本語C [加藤]	文章表現C [城戸]	文化 [森田]	

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Cクラス担任：吉成）

中級前期レベルの学習者7名（日本社会文化プログラム学生1名、日本語・日本文化研修留学生4名、学内公募の研究生2名）が受講した。受講者の国籍はアゼルバイジャン、アメリカ、オーストラリア、スウェーデン(2)、中国(2)であった。専門授業時間との都合がつかず、一般コースに移った人がいたり、数週間Dクラスで学んだ後Cクラスに移動する人がいたり、どのレベルの技能科目を受講するのがなかなか決まらず、クラスとして落ち着くまでに少し時間がかかってしまった。

「総合日本語C」の火曜日～木曜日の3コマでは『中級を学ぼう（中級中期）』（スリーエーネットワーク）を用いて中級文法項目を学習し、読解や作文などを行なった。中級では語彙力をつけることも大切であるため、毎日授業のはじめに語彙クイズを実施した（出題範囲は『日本語総まとめN2 語彙』より抜粋したプリント配布済み、各自で学習）。他に総合日本語Cは総合演習として日本人学生と合同で言語学を学ぶ授業、そしてN2レベルの文法を学ぶ授業の5コマで構成されている。技能科目として7科目が提供されているが、「漢字」は非漢字圏の学生に限られている。このうち少なくとも5科目を選択することになる。

授業内の活動ではレベル差は気にするほどではなかったが、テストの成績が振るわない学生が数名おり、授業の進度を調整したり、副教材を作成したり、宿題等の課題を再提出させるなど、教員間で連携をとりながら指導に当たった。本人の努力もあり、成績が伸びた学生もいるが、あまり成長の見られない学生もいた。学期が終了して振り返ってみると、応用的なことがあまりできなかったためか、クラス全体を見ても、大きく日本語力が上がったとは感じられない。日本語でコミュニケーションは取れるものの、正しく日本語を使うことができないことが気にかかる。今学期のCクラスの特徴かもしれないが、中級レベルだからこそ、正しい日本語を身につけられるよう、受講者にその意識を持たせること

や、教材や授業内容にも工夫して今後の授業を考えていきたい。

[Dクラス]

時間割：総合日本語Dは必修、技能科目は選択。合計7科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [土谷]	総合日本語D [土谷]		総合日本語D [村田]	文章表現D [村田]
2			総合日本語D [城戸]	聴解演習D [石井]	口頭表現D [橋本]
3				総合日本語D [森田]	
4		文章理解D [加藤]			

Dクラスには日本語・日本文化研修コースの学生（以下日研生）が含まれるが、日研生は上記以外に日研生専用科目を受講する。

授業報告（Dクラス担任：土谷）

本学期のDクラス受講者は、総合日本語Dの履修を基準とすれば10名（日本語・日本文化研修留学生6名、日本社会文化プログラム学生2名、協定校からの学部所属の交換留学生1名、学内公募の研究生1名）であった。受講者の国籍は、韓国(2)、スリランカ、タイ(2)、中国(2)、ベトナム(2)、ロシアである。日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）については、総合日本語と技能日本語クラスとで履修クラスレベルが異なる（CまたはD）学生がいたため、科目によって人数が増減する。

本学期の最大の問題点・混乱点は、上記の日研生の履修クラスレベルであった。本校の日研生は、日本語能力試験N2合格程度を受け入れの目安としており、Dレベル（中上級）から学習をスタートすることを想定している。しかし、実際には学期当初のプレースメントテストの結果、Cレベル（中級）に入る学生も若干名いる。本学期は日研生全10名のうち7名がD、3名がCにプレイスされた。Cにプレイスされた学生は、総合日本語はC、技能クラスはDを従来履修させてきた。

しかし、学期開始後、複数の日研生が迷走した。Dレベル技能クラスが難しすぎるから技能クラスも部分的または全面的にCレベルにしたいと希望する学生や、Dレベルにプレイスされて数週間勉強してからCレベルに移りたいと言い出す学生などが発生し、その対応に追われた。後者については、Dレベルで十分やっていけると思われていた学生であったため、申し出には驚いた。本人はレベルを下げて、ある意味楽に学習できたのかもしれないが、果たして適切な対応だったのか、今でも疑問が残っている。

従来の想定に合致しないレベルの日研究生を受け入れざるを得なくなってきた現状を鑑み、今後は総合日本語がCレベルであれば技能クラスもCとしたほうが適切であろうと考えている。

クラス変更の混乱を別とすれば、本学期のDクラスは、真面目で和やかな雰囲気の良いクラスであった。口数の少ない学生もいるにはいたが、概ね発言も活発で、授業運営もしやすかった。学生の出身国がバラエティに富んでいたのも授業に豊かさを生んだと思われる。

次年度の改善予定を付す。日研究生人数の増加によって日本語研修コース学生の文章表現D（秋学期）履修を見合わせてきたが、次年度はクラスの増設によって履修が可能になる見込みである。

1.4 一般コース

10月14日（火） 授業開始
 12月25日（木）～ 1月5日（月） 冬季休暇
 2月10日（火） 授業終了

[科目名と受講者]

クラス名(レベル)	科目名	受講者数
一般A 1（入門）	総合日本語A 1	14
一般B（初中級）	総合日本語B	4
	聴解演習B	
	文章理解B	
一般C（中級）	総合日本語C（演習）	12*
	総合日本語C（文法）	
	聴解演習C	
	文章理解C	
	漢字	

*一般Cの漢字クラスの受講者は、非漢字圏学生対象科目のため、2名であった。

[時間割]

		月	火	水	木	金
1	一般A 1			総合A 1 [富田]		
	一般B			総合B [富田]	総合B [六郷]	総合B [田辺]
	一般C	総合C（演習） [吉成]				
2	一般A 1		総合A 1 [加藤]		総合A 1 [六郷]	総合A 1 [河合]
	一般B	聴解演習B [富田]				
	一般C	聴解演習C [石井]			文章理解C [野原]	
3	一般C	漢字 [森田]	総合C（文法） [加藤]			

授業報告

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、初級、初中級、中級の3レベルを設定している。初級レベルについては初級前半、初級後半の2レベルを設定しているが、初級後半レベルの受講希望がなかったことから、今期は初級前半（日本語未習者対象）のクラス（A1）のみを開講した。初中級、中級については前期と同じである。

一般A1クラスはこれまで『みんなの日本語 初級』を使用していたが、研究等で十分学習時間の取れない学生が多く、既習項目・語彙の理解を前提とする文法・語彙積み上げ式の教材では十分な学習ができないため、今期から『学ぼう！にほんご 初級1』（専門教育出版）を使用することにした。この教科書も文法積み上げ式ではあるが、学習項目が少なく、ゆっくりと学習が進められると考えた。しかし、授業以外で学習をする時間がないためか、最初のひらがな学習でつまずき、ひらがなの読み書きができないまま学習を続ける学生が多かった。こうした学生は今期に限らず何名かはおり、途中でクラスに参加しなくなるのだが、今期は最後まで日本語学習を続ける学生が多かった。文字学習はともかく、授業内容が学生達に合っていたのだと考えられる。

2. 日本語・日本文化研修コース

2.1 第13期（2013年10月～2014年8月）概要

第13期生は下記のように、大使館推薦の国費留学生3名（ベトナム・フンドン大学、同・フェ外国語大学、ニュージーランド・カンタベリー大学）、大学推薦の国費留学生4名（スウェーデン・ルンド大学、タイ・カセサート大学、韓国・木浦大学、中国・江南大学）、私費留学生3名（各大学との交流協定による交換数の枠内で、スウェーデン・ルンド大学、中国・電子科技大学、中国・広西大学）の合計10名だった。

第13期 履修／修了生（アルファベット順）

ブロムベリ， ニクラス（Blomberg, Ake Niclas Fredrik）	スウェーデン・ルンド大学
フェルト， アダム（Falt, Adam Erik）	スウェーデン・ルンド大学
江 洋（Jiang, Yang）	中国・江南大学
ジュリアン， レネイ（Julian, Renee Johanna）	ニュージーランド・カンタベリー大学
高 美景（Ko, Mi Gyeong）	韓国・木浦大学
レ， ティ・タン・タオ（Le, Thi Thanh Thao）	ベトナム・フンドン大学
グエン， ゴック・タン・タム（Nguyen, Ngoc Thanh Tam）	ベトナム・フェ外国語大学
ルアンシュアムアン・ジェンチラー（Ruangchuanuan, Jenjira）	タイ・カセサート大学
楊 心怡（Yang, Xinyi）	中国・電子科技大学
張 思思（Zhang, Sisi）	中国・広西大学

約1年間にわたる期間中、学生たちは、前半の秋学期に日本語と日本文化の科目を集中的に取り、後半の春学期には日本語と日本文化の授業に加えて、日本人学生と一緒に全学共通教育で開講されている授業を履修した。さらに能狂言・歌舞伎の鑑賞、大相撲の観戦、郡上八幡春祭りの体験、陶芸の実作、美濃小倉太鼓・茶道の実習など、直接伝統的な日本文化に触れる機会を持った。

前期生（第12期生）の中には、後半の春学期になると勉学に身が入らず、その結果修了論文も不十分な出来だったため、コースを修了できなかった学生がいた（指導が適切だったか、コーディネーター間で検証を行い、反省すべき点は次期以降に生かすことにした）。今期生にはそのような学生はいなかったが、勉学に対する熱意という点では、全般的に過去の履修生たちと比較して低調だったように感じている。

2.2 論文作成と発表会

岐阜大学の日本語・日本文化研修コースの特色のひとつは、修了論文の作成を重視していることにある。第13期生たちも例年通り、秋学期を終えて後半の春学期になると、それぞれの関心にしたがってテーマを設定し、指導教員のもとで論文の作成を行った。論文のテーマと指導教員については下記の通りであるが、今期生も文化関係のテーマ設定が多かった（内容は硬軟さまざまにバラエティに富み、例年以上にユニークだったように思う）。

論文提出後の8月3日には、今期生で8回目となった「留学生は“日本”をどう見たか」と題する研究成果発表会を、岐阜市立図書館の共催を得て開催した。前回に続き今回もJR岐阜駅からすぐ近くの本学サテライトキャンパスで行ったが（ここ4年間ほど市立図書館の新築・移転のため、会場は転々としている）、猛暑のさなか多少分りにくい場所にも関わらず、本学関係者のほか、多数の市民の参加があり（この発表会もすっかり定着して、参加者約100名の内には、毎年必ず参加してくれるファンもいる）、充実した発表会となった（履修生たちにとっては特別な緊張を強いられる機会だが、他方で励みになっていることも事実のようである）。

論文テーマと指導教員

ブロムベリ, ニクラス (Blomberg, Ake Niclas Fredrik) スウェーデン・ルンド大学
「日本には「徒弟教育」があるか—日瑞の高校教育における企業実習を中心に—」
(指導教員：森田晃一)

フェルト, アダム (Falt, Adam Erik) スウェーデン・ルンド大学
「おまえに本をクレルー方言における授与動詞「やる」と「くれる」の使用—」
(指導教員：土谷桃子)

江 洋 (Jiang, Yang) 中国・江南大学
「災害と多文化共生—岐阜市・岐阜大学の取り組みを中心に—」
(指導教員：森田晃一)

ジュリアン, レネイ (Julian, Renee Johanna) ニュージーランド・カンタベリー大学
「日本とニュージーランドの庭園の比較—池泉庭園と枯山水を中心に—」
(指導教員：太田孝子)

高 美景 (Ko, Mi Gyeong) 韓国・木浦大学
「韓日笑芸の盛衰—漫談と漫才にみる文化的相違—」
(指導教員：森田晃一)

レ, ティ・タン・タオ (Le, Thi Thanh Thao) ベトナム・フンドン大学

「ベトナム労働力輸出と研修・技能実習制度」

(指導教員：土谷桃子)

グエン, ゴック・タン・タム (Nguyen, Ngoc Thanh Tam) ベトナム・フエ外国語大学

「日越女性の社会進出の変遷—仕事に対する考え方の変化を中心に—」

(指導教員：太田孝子)

ルアンシュアムアン, ジェンチラー (Ruangchuamuan, Jenjira) タイ・カセサート大学

「長良川鵜飼の文化戦略—ユネスコ「世界無形文化遺産」への登録は可能か—」

(指導教員：森田晃一)

楊 心怡 (Yang, Xinyi) 中国・電子科技大学

「オノマトペにおける日本語と中国語の比較

—よしもとばなな『キッチン』を例として—」

(指導教員：土谷桃子)

張 思思 (Zhang, Sisi) 中国・広西大学

「海女の仕事と現状—三重県志摩地区を中心に—」

(指導教員：太田孝子)

3. 日本社会文化プログラム

3.1 受講概要

日本社会文化プログラムは2007年度に開講した。学術交流協定を結んでいる大学とからの交換留学生のうち、日本語、あるいは日本文化を学ぶ希望を持つ学生を留学生センターで受入れ、このプログラムによる総合的な日本語・日本文化教育を行なっている。本プログラムは4つのコースを設けており（異文化理解コース1、異文化理解コース2、日本文化入門コース、日本社会文化コース）、各学生のレベルに合わせてコースを設定している。

3.1.1 第14期（2013年度後期～2014年度前期）

2013年度後期に第14期の2名を迎えた。留学期間は1年間である。1名は日本社会文化コースに入り、所定の単位を取得し、コースを修了した。1名は日本文化入門コースに入ったが、授業を欠席することが多く、成績が修了要件を満たさなかったため、修了できなかった。

イ・ガヨン	韓国	ソウル科学技術大学	日本社会文化コース修了
-------	----	-----------	-------------

3.1.2 第15期（2014年度前期～2014年度後期）

2014年度前期に第15期の3名を迎えた。留学期間は1年間である。4名のうち2名は日本文化入門コース、1名は日本社会文化コースに入り、所定の単位を取得し、コースを修了した。

スィームアン・ガニッター	タイ	カセサート大学	日本文化入門コース、 日本社会文化コース修了
ロ・ケイセイ	中国	内蒙古大学	日本文化入門コース、日本社会文化 コース修了
トウ・インコ	中国	電子科技大学	日本社会文化コース修了

3.1.3 第16期（2014年度後期～）

2014年度後期に第16期の4名を迎えた。4名とも留学期間は1年間である。2014年度後期は、1名は異文化理解コース1、2名は異文化理解コース2を受講し、所定の単位を取得した。もう1名は日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得したが、2015年4月以降に留学を継続することができなくなり、半年間の留学期間で帰国した。

ヒューズ・マロニーニコル	アメリカ	ノーザンケンタッキー大学	異文化理解コース1修了
ディアス・ジョナサン	アメリカ	サンディエゴ州立大学	異文化理解コース2修了
ボーン・カーシー・クリスティン	アメリカ	ノーザンケンタッキー大学	異文化理解コース2修了

3.2 社会文化プログラム専用科目

このプログラムでは、日本文化を実践的に学ぶ機会を提供するため、「日本文化へのいざない」という科目を設けている。2013年度前期の「日本文化へのいざない」は、2012年度に引き続き、本学客員教授で、茶道江戸千家副家元である川上紹雪氏に茶道に関する講義をお願いした。茶道に関する講義と共に、実際に茶道を体験する機会があり、日本文化理解の入門として、受講生には大変得るものがあった。

4. 全学共通教育

4.1 概要

留学生センター教員はそれぞれ、岐阜大学全学共通教育科目も担当している。日本語及び日本事情科目、人文科学科目の授業、また日本人学生と留学生の合同授業など、多様な内容・形態の授業を提供している。

4.2 2014年度 前学期

科目	授 業 名	時間	担当	備 考
日本語及び日本事情科目	日本語DⅠ—文章表現—	月3	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	日本語DⅢ—聴解—	火2	土谷	日本語・日本文化研修生、日本社会文化プログラム学生も受講
	日本事情CⅠ	火3	森田	
	日本事情AⅠ	火4	森田	
人文科学科目	日本語学入門—言語使用を考える—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本語口頭表現	火2	橋本	日本語研修コース集中B・Cクラスも受講
	異文化論—一年中行事（人の一年）に見る世界の諸地域—	火3	森田	日本事情CⅠと同時開講
	日本近世史—近世都市史—	水2	森田	

4.3 2014年度 後学期

科目	授 業 名	時間	担当	備 考
日本語及び日本事情科目	日本語DⅡ—文章表現—	月3	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	クロス・カルチャー・コミュニケーション	火2	太田	日本語・日本文化研修生も受講
	日本事情CⅡ	火3	森田	
	日本事情AⅡ	火4	森田	
人文科学科目	日本語学入門—言語使用を考える—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本文学—近世文学の世界—	月2	土谷	
	異文化論—多文化関係論—	火3	太田	クロス・カルチャー・コミュニケーションと同時開講
	日本語口頭表現	火2	橋本	日本語研修コース集中B・Cクラスも受講
	異文化論—通過儀礼（人の一年）に見る世界の諸地域—	火3	森田	日本事情CⅡと同時開講
	日本近世史—近世文化史—	水2	森田	

5. 留学生指導

本稿では2014年4月から2015年3月までの1年間に留学生指導部門が行なった主な活動をまとめ、以下に報告する。

1. 留学生に対する指導・相談活動

1.1 指導部門の体制

後述する相談には留学生指導担当教員と技術補佐員粥川美重子氏の二人で対応した。留学生センター建物の構造上、相談者が最初に会うのが技術補佐員であるため、メールや電話で予約していたり相談者指名の学生以外は先ず技術補佐員が相談内容を確認し、その内容によってどちらが対応するかを判断してもらうという方法をとった。大きな問題が起こった時は二人で面談し、内容・事柄によっては相談者の指導教員、関連部署の担当者、留学生支援室職員等とも相談しながら、問題の解決に当たった。

二人体制が確立し、相談室は以前より充実したと言えるが、留学生・日本人学生とも予約なしに各自の都合で来室するケースも多く、相談者に合わせて対応した。また、技術補佐員が大学事務の全体を把握していることもあり、学内の事務部門からの相談も多かった。今期の相談内容別件数・概要は以下の通りである。

1.2 相談の概要

1.2.1 相談件数とその内容

① 留学生からの相談

(a) 学業関係 (175件)

授業・研究関係、単位の不足・未履修・留年・復学・研究室の変更等の進学・復学・進路関係・学業上の問題（学生との面談および科目担当者・指導教員・留学生支援室・学部事務との相談・連絡）、大学院進学・受験関係（入試の手続き等についての問い合わせ・来訪、提出書類・研究計画書等の記入・記入方法の説明、文章のチェック、修了生からの進学関連の問い合わせ、専門分野の教員との面談、など）、日本語関係（オリエンテーション、全学共通教育・日本語研修コースの日本語の内容、プレースメント・テストの日程、教室、時間割の問い合わせ、レベルの変更など）、研究室での諸問題、インターンシップ、資料提供、など

(b) 生活一般 (88件)

各種事故への対応、インターネット開設、銀行関係（口座引き落としの手続き、カード紛失など）、サマースクール参加関係、留学生の家族に関する相談、就職関係、趣

味対応（ピアノ借用）、忘れ物対応、など

(c) 経済問題（19件）

経済的問題（授業料滞納、家賃滞納など）、奨学金関係（奨学金の種類・内容、決定の方法に関する質問、各奨学金への申請・手続き、など）、貸付制度の利用・返却手続き、アルバイト・求職、アルバイトでのトラブル、など

(d) 住宅・住居問題（8件）

国際交流会館関係（入居時の説明、入居延長などの手続き）、民間のアパート探しなどの問い合わせ、チューター間の問題・話し合い、留学生支援室会館担当者との話し合い、など

(e) 健康問題（28件）

健康診断・保健管理センター関係（留学生健康診断の実施に関する話し合い、保健管理センターとの諸連絡、インフルエンザ、など）、サマスク生・交換留学生の病気、など

(f) 入管関係（17件）

資格外活動許可の申請者との面談・申請書の説明・記入・関係者との連絡など、一時帰国、ビザの更新、など

(g) 市役所関係（5件）

外国人登録、国民健康保険加入手続き・保険料関係、など

(h) トラブルの相談（32件）

学生の私的トラブルへの対応、紛失物、人間関係・研究室のトラブル、など

② 日本語研修生・日研生関係（75件）

来日時の説明・諸対応、各種オリエンテーション、レベル変更・勉学に関する諸問題、進路の変更（早期帰国）、会館入居・退去、他大学大学院受験関係、進路・再留学関連、弁論大会関係、学研災加入手続き、など

③ 日本人学生からの相談（286件）

留学に関する全般的質問（サマースクールを含む）、協定校等への応募から出発・帰国後の勉学・進路等の相談、勉学計画書、留学中のメールでの諸相談、学業その他の相談、課外活動の運営・内容に関する諸相談、大学祭・各種イベント関係、サマースクール報告書関係、留学生の紹介依頼、チューター業務上の相談、広報関係（生協学生委員会、オープンキャンパス用冊子）、危機管理オリエンテーション関係、など

④ 大学内外関係（225件）

本学学部事務からの問い合わせ（留学生の受け入れに関する相談、大学協定・派遣関係、奨学金関係、弁論大会、日本語コースの受講関連、入試用パンフ、ガイドブッ

ク作成・校正、援助会支援要請、国際担当理事資料作成依頼、中国語広報誌、など)、岐大OB・OG関係、危機管理マニュアル、ラウンジチューター関係、留学生センター長選考・引き継ぎ関係、郡上イベント関係、サマースクール(受入・派遣全般、チューター関係、など)、親からの留学相談、アパート関係、留学生センター長会議協議・承合関係、非常勤講師・岐阜大教職員からの相談、他大学からの相談、新聞取材、大垣北高英文チェック関係、国際交流団体関係、学研災関連(事故後の対応)、など

計 958件

1.2.2 相談の特徴

今年度多かった項目は、①日本人学生からの相談、②大学内外関係、③学業関係の順であり、昨年と同じように留学生より日本人学生の来室が多い日もあり、留学生指導担当教員としては複雑な気持ちを味わうこともあった。メールによる相談も多かった。減少した項目は入管関係、市役所関係、健康問題、住宅・居住問題、経済問題である。ビザの更新、再入国関係、国際交流会館関係などの諸手続きは留学生支援室が担当しているからであり、一方で留学生の出身国の景気を反映し、留学生の経済問題関連の相談は減少した。以下に、相談の特徴、課題等を記しておきたい。

①では、サマースクール及び短期留学に関する相談・帰国後の進路相談が大半を占め、全学部にわたる日本人学生から、留学に関する諸々の相談が寄せられた。メールでの相談も多かった。「留学」を志向する学生が増加していることは、「留学フェア」(本年は4月23日実施、後述)の参加者数(本年は100人)からも感じられるが、相談内容は交換留学に関する相談が中心で、交換留学が無理ならその準備として語学留学かサマースクールに参加したいというケースがほとんどであった。留学先に関する下調べをし、TOEFLの準備や受験をしてから相談に来る学生は少なく、留学先(国・大学)や渡航時期さえ考えず、TOEFLが要求されていることも知らずに漠然と訪れる学生が多く、留学が簡単に実現するものと思い込んでいることに驚いた。語学力が“大きな壁”である傾向は変わらないにもかかわらず、センターの校費で購入した英語・ハングルなどの問題集・CDなどは例年より利用率が低く、学生の頑張りがあまり感じられなかった。しかし、留学者数は例年とほとんど変わらずTOEFLスコアもクリアしているので、相談に来室する層とは違う学生たちが実際に留学を実現させているのが実情だといえる。

また、留学相談に来訪した学生と一緒に付き添ってきた学生から、留学をしたいと思っても経済的にとても無理だ、すでに育英資金の借入もしているのに、たとえ奨学金が受領できていても留学する余裕がないという発言も聞いた。

通常は留学をしたいという前提で相談を受けているので、教育における経済的格差の現実に直面し、やるせない思いにかられた。

交換留学では、14年4月にはドイツに1名、8月にはスウェーデンに2名、アメリカに2名留学、15年2月にオーストラリアに1名留学した。ソウル科学技術大学でのサマースクールが契機となって、2015年3月に1名がソウル科技大に留学した。また、本年初めてリトアニアのヴィータウタス・マグヌス大学へ1名が留学する予定だったが、残念ながら本人の体調不良により直前に取り止めとなった。サマースクールは、計23名（オーストラリア20名、韓国3名）が参加した（後述）。

一方、懸念事項だった「大学間学術交流協定に基づく交換留学生（短期派遣）の語学基準に関する申し合わせ」（2013年3月に承認、非英語圏への交換留学希望者にもTOEFL-iBT55を課す）は、2014年1月28日の国際戦略本部会議でようやく廃止された。新たに承認された交換留学生（短期派遣）の語学基準に関する申し合わせは、「1. 交換留学を希望する場合は、協定大学への申請を行う時点で、協定大学の定める語学基準を満たすものとする。2. 上記の基準を満たさない場合は、協定大学への申請を行わないものとする。」であり、2014年4月1日から施行、2013年度以降の入学者に対して適用となった。

②大学内外関係の相談では、学研災による事故処理の継続分、広報・ガイドブック関係等々の他、今年度は大垣北高校より留学生に英文エッセイの添削の依頼があり（スーパーグローバルハイスクール事業のサポート）、留学生センターに在籍している留学生5名を添削者として選出した。12月～3月の間に全2回、一年生全員（322名）分の添削を行い、3月19日には、生徒たちによる「英語のプレゼンテーション」に添削をしたうちの3名が参加して、英語で質問やコメントをした他、有意義な交流の時を持った。留学生にとっても、貴重な経験となったようだ。

③学業関係では、休学中の留学生（元国費留学生）の復学関連の相談、大学院入試に関する相談、単位未履修・不足関連の相談が多かった。休学中の留学生とは5月から相談が始まり、年度末まで多くの面談を重ねた他、指導教員はじめ関係者との話し合い等にも参画した。その結果、いくばくかの不安は残るものの、2015年度から復学へとこぎつけることができた。

他方、大学院入学を希望する留学生への対応も多かったが、中には1) 研究生として入学したものの、適切な指導を（一度も）受けなかった。しかし、本学で学びを続けたいので他の研究科を受験したい、2) ある研究科を修了後も日本にいたのだが、在留期間が切れるため別の研究科を受験したい、という相談があった。話を聞くうちに、1) は専門性や能力を測られることなく同じ国の先輩の紹介である研究室に簡単に受入られたものの何の指導も受けず、留学生センターの日本語を履修していた、しかし日本語のクラスもアル

バイトで休みがちだった、などの問題を内包していることが分かり、2) は別の分野での学びを希望するようになり専門学校を受験しようとしたところ、「修士を終えた者が専門学校を受験するのはおかしい」という理由で入管が認めなかったため、別の研究科への受験に切り替えることを考えての相談だったことが判明した。いまだに1) のような受入の問題が存在していること、2) のような本来の学びとは程遠い理由を入管が言っていることは驚きであった。

また、経済的な問題のため滞在を半年で切り上げたいという交換留学生からの相談もあった。話し合いの結果、この留学生の場合は帰国が最善の策だと関係者一同納得することができたのだが、優秀な学生だっただけに残念という気持ちが残った。2012年度第1回国際戦略本部会議で支給取り止めが決議された「交換留学推進制度（受入）奨学金」の復活を願って関係者と話し、再度議事に上げるところまでこぎつけたが、早期の復活を期待している。

1.2.3 留学生相談部門としての活動

① 新規渡日者に対するオリエンテーション

2014年4月の渡日者に対しては4月17日（水）に、10月の渡日者に対しては10月23日（水）に、日本語・英語、日本語・中国語による生活に関するオリエンテーションを実施した。中国語の通訳は、留学生に依頼した。各学部事務の留学生担当者にも出席を呼びかけた。

日本語研修コース、日本語・日本文化研修プログラムのクラス別オリエンテーション、国際交流会館での到着時の説明及びオリエンテーションなどを計画通り行なった。また、本年度の国際交流会館の防火訓練は11月19日に実施した。

② 留学報告会

毎年開催している「私達の留学の“真実”」を12月10日（水）に実施した。報告者は、留学（スウェーデン：ルンド大学、アメリカ：サンディエゴ州立大学、オーストラリア：シドニー工科大学、ドイツ：エルフルト大学）、サマースクール（オーストラリア：グリフィス大学2名、韓国：ソウル科技大学）、交換留学生による大学紹介（アメリカ：サンディエゴ大学1名、韓国：木浦大学2名）など、様々な方法により海外で学んだ留学体験者7名、留学生3名が、パワーポイント等を使いながら各自の留学体験を詳細に発表し、大学を紹介してくれた。参加者は62人であり、報告・質疑応答終了後に、発表者との交流・質問の時を持った。今年度は筆者が「留学ラブ（サークル）」の顧問を辞めたこともあり、「留学ラブ」の協力ではなく、奨学金を受給してオーストラリアのサマースクールに参加した4名に司会と受付をお願いした。

帰国した留学体験者が提出する報告書（留学の長所・短所、費用、語学レベル、出発までの流れ、留学先でのある一日、生活・活動環境、コメントなど）をまとめた小冊子を参加者に配布した。

③ 派遣学生に対する事前研修

本年度短期留学に出発した学生は7名（韓国1名、ドイツ1名、アメリカ2名、スウェーデン2名、オーストラリア1名）であり、2～3月及び8～9月に1年間の留学に出発した。各自の出発前には事務の担当者迫氏とともに事前研修を実施し、危機管理のビデオも見てもらって注意を促した。帰国後にも面談をして留学中の聞き取りを行い、意見は次の留学に反映するよう心掛けた。留学中には、各自から毎月留学報告が届いたので、返事を出した他、相談にも乗り、励ましの言葉を送り続けた。

相談に来室した学生は20余名いるのだが、多くは TOEFL スコアの不足、親の反対、準備不足、就職との関係などにより留学を断念している。韓国やドイツへの留学生は毎年一定の人数を保っており、渡航先の言語の学習歴や能力試験の結果だけで留学できるよう規則を改定した効果は出ていると言える。前述したとおり、ようやく、懸念材料であった非英語圏への交換留学にも TOEFL-iBT55を課すという「申し合わせ」を廃止することができたので、学生には一層の頑張りを期待している。

④ サマースクール説明会と事前研修

一昨年より実施されるようになった「留学フェア」（4月23日）には100人の参加があり、盛会であった。筆者自身はオーストラリア・グリフィス大学と韓国・ソウル科学技術大学のサマースクールについて説明し、個別の質疑・相談等にも対応した。さらに4月16日、5月14日の両日に、グリフィス大学のみでの説明会を実施した。5月中旬に説明会を行ったのは初めてだったが、連休明けの落ち着いた時期に再度宣伝することができ、効果的だったと感じている。ソウル科学技術大学は定員が3名だったため AIMS のみで募集した。木浦大学からは何の連絡もなかったため、今年は見送りとした。

留学フェアの開催時点ですでに、グリフィス大学のサマースクールは15人分の奨学金（Jasso）を獲得していることを発表したため、定員ちょうどの20名の応募があった。奨学金の支給に関しては6項目の支給要件（成績評価係数、志望動機書、家計基準、他の奨学金との関連、等）に基づいて審査し、13名選出した。また、昨年設置された「岐阜大学短期海外研修奨学金助成」を1名が受給し、別の1名が優秀学生賞（40万円）を受給する等、昨年度の学生に比べ、恵まれた状況でサマスクに参加することができた。

参加決定後、6月16日～7月18日までの5週間、週3回（月曜日、水曜日、金曜日、1回2時間）計15回にわたって英語研修を実施した。今年も前期の試験期間を考慮して週3回に集中させたが、好評であった。講師はジュリエット・ヒルさん（シドニー工科大学

からの交換留学生)、ロアン・マオさん(シドニー工科大学からの交換留学生)、武田憲人君(教育学部英語教育4年、12年度 Lund 大学へ留学、小学生時代をアメリカで過ごす)、平田百さん(地域科学部4年、12年度シドニー工科大学へ留学)、金武梨佳さん(教育学部生涯教育課程4年、13年度サンディエゴ州立大学へ留学)の5名であった。

7月23日には講師(海外留学生安全対策協議会服部誠氏)を招いて全渡航者を対象に「危機管理オリエンテーション」を実施して出発に備えた他、7月29日14:30よりソウル科技大学、8月6日13:30及び7日11:00よりグリフィス大学の各参加者に対し、出発前オリエンテーションを実施した。当日は生協、事務、派遣担当教員の他、前年度の参加者にも来てもらい、全般にわたるアドバイスを受けることができた。

今年度のグリフィスサマスクのリーダーからは、期間中に3回詳しい報告があり、帰国直後の連絡もあったためサマスクの様子がよく分かったが、ソウル科技のリーダーからは一度も連絡がなく、残念だった。帰国後には参加者全員と会い、サマスクの報告を聞くことができた。また、12月10日の留学報告会「私たちの留学の“真実”」でも、2校の代表者が力を入った報告をしてくれた。加えて、グリフィスサマスクの参加者は思い出を模造紙2枚にまとめてくれたが、報告会終了後は留学生センターのラウンジに展示し多くの人に見てもらっている。

上記2大学でのサマスクール(派遣)に関しては『岐阜大学夏期短期留学 サマスクール2014』を参照していただきたい。また、巻末に語学研修に関するアンケート調査を載せたので、それをご覧いただきたい。

(上述の「岐阜大学短期海外研修奨学金助成」は学部学生で6ヶ月未満の短期海外研修を行おうとする者を対象に、所属学部長の推薦に基づき奨学生を選考、支給額は1人10万円を限度に、年間20人程度に奨学金を支給するものである。)

3. 今期をふり返って

今期も多岐にわたる相談が寄せられたが、本文にも幾例か記したように、数名の留学生の個人的な相談に長期間関わることになり、背後にある問題を考えさせられた1年であった。特に留学生の受入に関しては委員会等を通して地縁・血縁等による受入や専門性及びその質を考慮しない受入等の問題点を指摘し改善をお願いしてきただけに、いまだに国の先輩の口利きだけで受入られたという事実を知った時は愕然とした。本学でも「留学生の質の向上」を謳ってはいるが、一方で、その努力が水泡に帰すようなことが起こっていることは残念であり、特に今回留学生を受入れた教員は国際戦略本部会議の関係者だっただけに問題の大きさを感じた。研究生の指導にも、部局や指導教員によって温度差があることも判明している。折を見て再度喚起を促していきたいと考えている。

その一方で、すでに卒業・修了した留学生たちが訪問してくれたり、メール等で近況を寄せてくれたことは嬉しい出来事であった。中には10年ぶりに訪ねてくれた元留学生もいたため、今さらの感はあるが、「芳名録」を用意し技術補佐員に管理してもらうことにした。

他方、多くの日本人学生との出会いもあった。そのほとんどは留学を巡って出会った学生達であるが、中には留学中に新しい目標を持ち、志望する大学に再入学した学生もいた。このように努力している姿に接することができたことは大きな喜びであった。

上記のような個別の相談に加えて、留学フェア、サマスク（派遣）に関する一連の業務、ラウンジ行事（七夕まつり、新春パーティ）、ラウンジチューター関係、サマスク（受入）諸行事、留学報告会（「私たちの留学の真実」）等々多様な行事に関わってきたため多忙な一年であったが、大きな問題が起こらなかったことは幸いだったと思っている。

国際関連の委員会は、次年度より国際戦略本部会議からグローバル推進本部会議へと名称が変わり、国際化を推進していく機関として責任を担っていくことになるが、委員の一人として、留学生・日本人学生にとって意味のある企画をし、支援をしていく部署であるよう努めたいと思っている。

短期留学（サマースクール）事前研修アンケート集計結果 （グリフィス大学、ソウル科学技術大学）

対象者（受講者）：23人（回収数：16人、回収率：69.6%）

1. 渡航先について

グリフィス大学 14人 ソウル科学技術大学 1人 その他（ 大学）
無記入 1人

2. 事前研修に参加した回数について

参加回数

4回1人、5回2人、6回3人、7回4人、8回1人、9回1人、10回2人、
11回1人、10回以上1人

3. 参加できなかった理由（1で参加回数、3回以下の方）（記入者なし）

a 授業・ゼミ等があった b サークル活動があった c アルバイトがあった
d その他（ ）

11. 事前研修全体を通して、意見・提案等なんでも結構ですので記入してください。

(記入者数：7人)

- ・事前研修のおかげで、授業の英語も含め、ほぼ毎日英語に触れることができました。留学に不安もあったが一緒に行くメンバーと仲良くなれたし、オーストラリアのことを知ることができた。講師が留学生と留学経験のある日本人で、いろいろとためになる話をたくさん聞けたし、交流できてよかった。
- ・事前研修はあるべきだと思った（あってよかった）。
- ・先生がフレンドリーですごくてのしかったです。
- ・いろいろと勉強になりました。ありがとうございました。
- ・良かったと思います。水曜日担当の先生が、留学経験者の日本人だったので、わかりやすくとてもためになりました。
- ・研修を通して英語を話す楽しさを知った。英語を話すことに抵抗がなくなり、積極的になれた。
- ・その国に行ったことがある先輩から、現地の話も聞けたのでよかった。サマースクールに行く人とも話せたから楽しかった。ありがとうございました。

6. 留学生センター年間行事

留学生センターでは年間を通じ、様々な行事を行なってきた。2014年度（2014年4月～2015年3月）の年間行事を一覧にまとめ、主な行事内容について報告する。

2014年

4月

- ・日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（4月10日）
- ・日本語研修コース授業開始（4月11日）

5月

郡上踊りワークショップ（5月14日）

6月

- ・岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）8週間コース受入開始（6月4日）
- ・岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）4週間コース受入開始（6月25日）

7月

- ・能楽ワークショップ（7月2日）
- ・ラウンジチューター企画“七夕まつり”（7月9日）
- ・岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）修了式及び歓送会（7月23日）

8月

- ・日本語研修コース授業終了（8月1日）
- ・日本語・日本文化研修留学生論文発表会（8月3日）
- ・日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム修了式（8月21日）

9月

木浦大学校人文大学日語日文学科創設25周年記念シンポジウム「韓日両国の人文学者が見た韓日・日韓関係（その回顧と展望）—東日本大地震と最近の両国関係を視座に入れて—」招待発表（森田晃一教授）（9月27日）

10月

- ・日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（10月10日）
- ・日本語研修コース授業開始（10月14日）

11月

- ・着物着付け体験（11月2日）
- ・全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議（11月7日）

- ・日本語・日本文化研修留学生 郡上エクスカージョン（11月15日）

12月

- ・十二単に触れる特別講義（12月3日）
- ・インド工科大学グワハティ校（Indian Institute of Technology, Guwahati, IITG）訪問（土谷桃子准教授）（12月4日～9日）
- ・留学報告会「私達の留学の“真実”」（12月10日）
岐阜ハウジングギャラリー県庁前展示場見学（「現代日本の社会」「文化」科目合同課外授業）（12月12日）

2015年

1月

- ・ラウンジチューター企画 “日本のお正月”（1月14日）
- ・岐阜大学活性化経費（教育）ポスター報告会（1月20日～29日）【平成25年度募集分】テーマ：日本文化（郡上踊りと能楽）ワークショップ（平成25年5月15日、6月19日開催）

2月

日本語研修コース授業終了（2月10日）

3月

ノーザンケンタッキー大学副学長及び国際教育センターエグゼクティブディレクターとの懇談（3月6日）

6.1 郡上踊りワークショップ ～浴衣を着て郡上踊りをおどろう！～

留学生センターは、地域密着を志向しており、特に郡上市とは、サマースクール（受入）のホームステイをお引き受けいただくなど、深く強い関係を結んでいる。郡上には全国に知られた郡上踊りがあり、郡上市との連携をさらに深めるために、そして留学生に岐阜ならではの文化を体験してもらうために、2012年度から5月に「郡上踊りワークショップ」を開催している。2012年度は単発開催だったが、2013年度からは「能楽ワークショップ」と合わせて留学生と日本人学生のための日本文化ワークショップ（郡上踊りと能楽）～踊って、謡って、体験して～と題し、シリーズ化をしている（能楽ワークショップについては、121ページ参照）。郡上踊り、能楽を合わせたワークショップは、昨年度に引き続き、岐阜大学活性化経費（教育）に採択された（申請者：留学生センター長竹内豊英教授）。

講師には、郡上八幡博覧館の熊澤里重氏をお願いした。例年講師として来学している遠

藤光生氏（郡上踊り口明方お囃子会会長）が急用で来られなくなるというアクシデントがあったが、熊澤氏の協力で無事開催することができた。留学生参加者の浴衣の着付には、例年通り美濃市「せびあ会」にご協力いただいた。

同ワークショップは、2014年5月14日（水）13:30～15:00、岐阜大学柳戸会館1階ホールにて開催した。開催に先立ち、12:30～13:30に浴衣の着付をした。色とりどりの浴衣を目の前にし、どれを着せてもらおうかと嬉しそうに悩んでいる留学生の姿が印象的であった。日本語・日本文化研修留学生、日本社会文化プログラム学生、日本語研修コース履修生等、総勢約40名が「かわさき」「春駒」の踊りの輪を作った。



踊りの講師は当初2名を予定していたが、急遽1名となり、その代わりに日本人学生に輪の中央で踊りの手本を示してもらった。日本人だから踊れるというわけではなく、ともに悪戦苦闘する姿がかえって親近感を抱かせ、楽しさが倍増したようである。踊りの名手コンテストも行い、名手3名に賞品が出るというサプライズもあり、大いに

盛り上がった。ワークショップは、かわさき、春駒をそれぞれ10分ノンストップで踊り続けるというハードな運動で締めくくられたが、終了後も写真撮影に忙しい学生たちであった。

手探りで始めた本ワークショップも3回を数えることができ、留学生センター行事として定着したのではないだろうか。自分が学んだ岐阜には郡上踊りという素晴らしい文化があったのだと、岐阜を離れたのちも心に刻んでほしいと願っている。

6.2 岐阜大学サマースクール（受入）

岐阜大学サマースクール（受入）は、国際戦略本部が掌握する全学事業であるが、留学生センターが実際の運営を担当している。今年度は、1988年度の開始から数えて、27回目の実施となった。参加者は、ルンド大学（スウェーデン）から17名、木浦大学（韓国）から4名、計21名を迎えた。本学学生が務める宿舎チューター13名とともに、濃密で有意義な日々を過ごした。日程は、8週間コース（6月2日（月）～7月23日（水））および4週間コース（6月25日（水）～7月23日（水））であった。

今年度の本プログラムは、8週間コース・4週間コースともに、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）の平成26年度留学生交流支援制度（短期受入れ）奨学金に採択され、各学生に大いに益した。

実施の詳細については、留学生センターホームページにて報告している。参照されたい（ホームページアドレス：http://www1.gifu-u.ac.jp/isc/jp/international/summer_school/）。

6.3 留学生と日本人学生のための能楽ワークショップ ～見て、聞いて、体験して～

留学生センターでは、2010年度より全学の留学生・日本人学生を対象とした能楽ワークショップを毎年実施している。このワークショップの元となったのは、2005年度からサマースクール（受入）で実施してきた能楽の講義・実演で、その楽しく充実した内容を全学の学生に体験してほしいという思いから受講対象者の幅を広げている。昨年度からはさらに拡大し、本ワークショップと5月に行われる郡上踊りワークショップ（119ページ参照）を合わせて、「留学生と日本人学生のための日本文化ワークショップ（郡上踊りと能楽）～踊って、謡って、体験して～」と題した一連の文化体験ワークショップとしている。今年度も、2011年度から採択されている活性化経費（教育）に引き続き採択され（申請者：留学生センター長竹内豊英教授）、この行事が岐阜大学に根付いた、そして岐阜大





学が誇るべき価値あるものになっていると感じている。

今年の能楽ワークショップで特記すべきことは、例年別日で行っている能と狂言を同日に取り上げたことである。例年は、6月に全学対象として能、7月にサマースクール（受入）の日本事情講義の一環として狂言を行っていたが、昨年度から同日の開催ができないか、講師に打診していた。

昨年度は講師の予定が合わず別日実施としたが、今年度は7月2日に能の講師（観世流シテ方味方團氏、同田茂井廣道氏）、狂言の講師（大蔵流狂言方山口耕道氏、同茂山良暢氏）、全4講師の都合がつくということで、新たな試みに挑戦した。講師には、事前にこちらの要望（学生参加型であること、能と狂言の対比を実感できる要素があること、実演鑑賞を含むこと）を連絡し、内容の詳細については一任した。

今年度の同ワークショップは、2014年7月2日（水）13:00～15:30、岐阜大学柳戸会館1階集会ホールにて開催した。舞台は、前日に講師の安全に配慮した堅牢なものを設営した。12:30に開場し、参加者は、サマースクール（受入）参加学生21名を含む留学生47名、日本人学生11名、教職員12名、合計70名であった（受付簿による）。

当日のワークショップの内容・順序は以下の通りである。

- ① 能の鑑賞：「石橋（しゃっきょう）」
- ② 能楽の歴史についての講義
- ③ 能面と狂言面の比較
- ④ 能の謡「高砂」の体験
- ⑤ 狂言の名乗り「末広がり」の体験
- ⑥ 能と狂言の喜怒哀楽の表現方法（説明と体験）
- ⑦ 狂言の鑑賞：「寝音曲（ねおんぎょく）」
- ⑧ 能装束の着付け（代表学生1名への着付け）

それぞれに興味深く学生を引き付けていたが、やはり特記すべきは能と狂言を明確に対比した③と⑥ではないだろうか。講師の先生方は「能はシリアス担当」「狂言はコメディ担当」と端的な表現をしつつ、③では、同じ女性を表す面でも、能の「小面（こおもて）」と狂言の「乙（おと）」では醸し出す雰囲気があるで違うことや、恐ろしい「般若」（能面）、ユーモラスな「嘯（うそふき）」（狂言面）などの面がそれぞれの芸能の特色を顕著に示していることを十分に教えてくださった。⑥では、能の泣き方である「シオリ」や、

狂言の「大笑い」を全員で体験した。学生のみならず、教職員にとっても珍しく貴重な体験であった。

能と狂言を同日に取り上げることは、上記のような興味深い点があるのは事実だが、知識のない学生にとっては両者が混乱する恐れも考えられる。それを避けるため、サマースクール（受入）では、ワークショップ当日の午前中に能楽の基本を学ぶ日本事情講義を行った。また、全学共通教育日本語科目（DⅠ、DⅢ）、総合日本語Dでは授業の一部に事前学習を含ませ、特に聴解を目的とする全学共通教育日本語DⅢでは、能と狂言を取り上げた視聴覚教材を用いて理解を促進した。このような工夫も効果があったと考えられる。

本ワークショップの参加については、留学生の日本語力に制限はないため、必ずしも講師の話を十分理解できない学生もいる。しかし、そうではあっても狂言「寝音曲」では、ここぞという笑いのポイントでは必ずどっと笑いが起こる。芸能の力が言語も国籍も超えることを毎年実感する現象である。能装束の着付けでは、サマースクール（受入）参加学生のヴィルマさん（スウェーデン・ルンド大学）がモデルとなり、豪華な装束と能面を身につけた。学生たちは、カメラ片手に舞台に熱い視線を注いでいた。

今年度初の試みであった能と狂言を合わせたワークショップの実施は、大いなる成功であったと総括できる。受講者アンケートでは、能と狂言を分けて行ったほうがいいのか、同日に扱ったほうがいいのかを聞いたが、同日を支持するコメントが圧倒的であった。以前にも参加したことがある学生からは、今回のほうがより両者の対比が分かって面白かったという意見が得られた。また、受講サイドからのみならず、実施サイドの講師の先生方からもなかなか面白かったとの高い評価を得、来年度も先生方のご都合がつけばまたご一緒いただけるとのお言葉をいただいた。能の味方先生、田茂井先生、狂言の山口先生、茂山先生と、留学生センターが築いてきた信頼関係があつてこそそのワークショップの実施である。先生方に深く感謝しつつ、来年度を楽しみにしたい。

参加者アンケート集計結果（抄出）（※原アンケート用紙は日本語・英語併記）

1. あなたは留学生ですか、日本人学生ですか。

留学生 46 日本人学生 8 その他 5

2. 今回のワークショップについて、どこで知りましたか。

授業で 33 ポスター 4
留学生センターホームページ 1 岐阜大学ホームページ 2

- 岐阜大学留学生センターからのメール 3
 AIMS-Gifu 3 くちコミ 6 その他 9

3. このワークショップに参加する前に、能を観たことがありましたか。

- 見たことがある 14 見たことがない 45

4. ワークショップの中で、何がおもしろかったですか。(複数回答可)

- 能の舞 28 狂言の劇 39 講師の話 24 謡 22
所作(動き) 18 面 25 着付 26 その他 3

5. 全体として、このワークショップはどうでしたか。

- とても良かった 44 良かった 15 ふつう 0
悪かった 0 とても悪かった 0

6.4 日本語・日本文化研修留学生(日研生)郡上エクスカーション

留学生センターは、サマースクール(受入)(121ページ参照)、郡上踊りワークショップ(119ページ参照)等で、郡上市とは密接な関係を有している。特に郡上八幡国際友好協会(GIFA)からは毎年度多大なるご協力を賜っている。2013年度春学期に行なった日本語・日本文化研修留学生(以下日研生)の郡上エクスカーションも、GIFAにお力添えをいただき実現した。

同エクスカーションは参加した12期日研生にも大変好評で、ぜひ恒例行事にしたいと考えていたのだが、諸事情により翌年度の13期生については実施に至らなかった。今年度の日研生(14期生)については、日研生来日前から準備を整え、2014年11月15日(土)に日研生9名(1名が病欠)、引率1名で郡上に向かった。

前回の郡上エクスカーションは4月に行なったが、今回11月に変更したのには理由があ





る。日研究生コースは10月にスタートするが、開始後しばらくの間は、日本語のみで行なわれる授業や新しい生活環境に緊張し、日研究生同士もなかなか馴染めないこともあり、孤独感を募らせる日研究生が発生する。よって日本での生活に慣れてからのエクスカージョンより、緊張感と孤独感がまだまだ強い時期に、学外の心優しい方々と触れ合っ

て緊張をほぐし、日研究生同士の親睦を深めるという意味で、11月が適切と判断した。参加が義務の行事ではなく、希望者のみの参加としたが、全員が参加希望を申し出た。当日1名が残念ながら病欠したが、訪問した9名は愉快的時間を過ごすことができた。

郡上では、まずGIFAの皆様と郡上が発祥の地であるスクリーン印刷で自分オリジナルの手拭を作ったり、町並みを散策したりした。お座敷でゆっくり昼食を採ったあとは郡上八幡城に向かい、折りしも開催中の「郡上八幡城下町紅葉祭り」のイベントの1つ、天守閣前での和太鼓演奏に飛び入り参加させてもらった。時折小雨の降るあいにくの天気だったが、晴れ間の一時、城から虹が見えるという僥倖に恵まれ、日研究生は盛んにカメラのシャッターを切っていた。

大学の授業では、他のクラスメートの日本語に圧倒されて口をつぐんでいる学生が、郡上の方に話しかけられて笑顔で長い会話をしている様子を見るにつけ、エクスカージョンを実施して良かったと実感した。今回の日研究生うち2名は一昨年サマースクール（受入）で郡上にホームステイをしている学生で、その時のホストファミリーがわざわざ駆けつけてくださり、学生との旧交を温めている姿にも、地域に支えられている岐阜大学を痛感した。

昨年度中絶させてしまった本エクスカージョンだが、今後は恒例行事として継続できるよう心がける所存である。つつがなくこの行事を行なうために、郡上への往復には大学のマイクロバスをチャーターする、万が一に備えて事前に参加学生には学生教育研究災害傷害保険に加入させる、といった細かい配慮も怠らないようにしたい。そして改めて、GIFAを初めとした郡上の皆様への感謝を記しておきたい。

6.5 インド工科大学グワハティ校 (Indian Institute of Technology, Guwahati, IITG) 出張

岐阜大学の「第3期以降に向けての将来ビジョン (2025年に向けて)」の概念図では、教育、研究、社会貢献の中央に国際化が掲げられている。その具体的な事項が7項目挙げ

られているが（2014年11月28日版）、その2点目が「インド・アッサム地域事業展開」である。アッサム州はインド北東部の州で、バングラデシュ、ブータン、中国、ミャンマーと接している。岐阜大学では、同州のインド工科大学グワハティ校（Indian Institute of Technology, Guwahati、以下 IITG）、アッサム大学（Assam University）との協働教育を計画している。IITG については数週間の超短期プログラムとジョイントディグリー教育の準備が目下進行中である。準備の一環として、2014年12月に岐大の関係教員が現地を視察することとなった。IITG との協働教育の主たるプログラム内容（食品・バイオテクノロジー分野、環境・エネルギー分野）は応用生物科学部と工学部が構築するが、日本語教育について留学生センターへの助力が打診され、この視察へは筆者（土谷）が加わった。筆者の任務は、IITG から岐大が受け入れる IITG 学生の日本語教育の現状確認と、岐大生が IITG に留学した場合の生活環境等についての確認であった。以下に視察の概略を記す。

1. 日程・訪問者等

出張期間：2014年12月4日（木）～9日（火）

出張先：インド工科大学グワハティ校（Indian Institute of Technology, Guwahati, IITG）

出張者：学長補佐小山博之教授、大学院連合農楽研究科海外連携コーディネーター加藤晴也客員教授、応用生物科学部西津貴久教授、保健管理センター西尾彰泰准教授（以上4名は12/3より出張）、応用生物科学部長岡利シニア教授、同石田秀治教授、留学生センター土谷桃子准教授（以上3名は12/4より合流）

2. IITG における日本語教育

同大学の日本語教育については、徳間望氏にうかがった。徳間氏は、2011年10月から2013年10月まで国際交流基金ニューデリー日本文化センターに勤務し、その任期中に IITG で行なわれた日本語サマーコースを担当した。同大学では正規科目としての日本語授業はなく、同氏が担当したサマーコースが唯一の日本語教育プログラムであった。徳間氏はその時の経験を踏まえて今後の IITG における日本語教育に関わる予定の人物である。

アッサム州を含むインド北東部には日本語教育機関が皆無で、2013年5月に開講された IITG のサマーコースには希望者が殺到したという。定員20名のところに340名の申込があったため、急遽クラスを増設し、40名が受講した。受講者の学習意欲は総じて高く、今後日本語教育を行なうことに一定の手応えが感じられたとのことである。

徳間氏とは、岐阜大学が超短期プログラムを実施して IITG 学生を受け入れる場合、IITG でどこまでどのように日本語を教えるか、それを岐大でどう引き継ぐかについて、

教材、授業方法等詳しく相談することができた。超短期プログラムは、最も早く実現に漕ぎ着けた場合、2015年12月開講が目される。それまでに岐大側のハード、ソフト両面の受入れ体制を整えておく必要がある。

3. IITG への岐大生派遣

筆者自身が今までアジア地域を訪れたことがなく、今回のインド訪問には正直なところ安全面で不安を感じていた。岐大生を派遣することになった場合、学生たちが筆者と同様の不安を持つことは容易に想像できる。その不安を軽減する情報を得ることも目的のひとつであった。

当然のことであるが、日本に住んでいるのと同じ感覚で生活することはできない。怪しげな人物の存在や激しい交通事情などには、気を引き締める必要がある。夜間外出や人々が無秩序に集まる行事への参加などは、常識的な判断で控えるべきである。現地の信頼できる友人と行動をともにすることを強く勧められた。

とはいうものの、IITG のキャンパス内は別世界といった様相で、キャンパスへの入り口は監視が行き届き、各建物にはセキュリティーガードがいる。日本人留学生こそいないが、各国からの留学生も在学している（イスラエル、イラン、エチオピア、ガーナ、韓国、スペイン、シリア、シンガポール、ベトナム、ポルトガル、マレーシア、ミャンマー、モンゴル）。ホステルと呼ばれる学生寮や課外活動を楽しむ建物や運動場も整備されている。数名の留学生と話をしたが、IITG での生活には満足しているということであった。

岐大生が IITG に行った場合に想定される大きな困難の 1 つは、言語であろう。英語力が十分でない学生が派遣可能か心配なところである。IITG では中等教育段階までに英語を十分学べなかった学生や、インド英語に慣れていない学生のための英語補講があるそうなので、それらを受講することが解決策になるかもしれない。岐大生の派遣が現実化してきたときに詳細を詰める必要があるだろう。

今回の IITG 視察は、新学期が始まった10月になってから突如メンバーに加わるようにとの連絡が国際戦略本部からあり、大急ぎでビザの手配をしたり、授業の調整をしたり、出発前にはかなりの混乱が生じた。結果として視察の成果は非常に大きかったが、今後本事業に留学生センターが関わっていく場合、既存の業務負担とどう折り合いをつけていくかは重要な課題である。全学の国際戦略を鑑みながら、冷静にかつ必要に応じて迅速に対応していくことが必要であろう。

6.6 岐阜大学活性化経費（教育）ポスター報告会

平成25年度募集分の活性化経費（教育）のポスター報告会が岐阜大学図書館にて行われた（2015年1月20日～29日）。留学生センターの「日本文化（郡上踊りと能楽）ワークショップ」が採択されており、以下のポスターを掲示して報告した。

留学生と日本人学生のための
日本文化ワークショップ
（郡上踊りと能楽）
～踊って、謡って、体験して～

活性化経費採択者：
守富寛（留学生センター長・教授）
森田晃一（留学生センター教授）
土谷桃子（同准教授）

概要およびねらい：

1. 岐阜大学の留学生及び日本人学生に、岐阜の地域文化「郡上踊り」と、日本の伝統文化「能楽」を学ぶ機会を提供する。
2. 身体の動きや体験を通した双方向型授業で日本文化の一端を学ぶ。

郡上踊り「春駒」練習風景



能楽ワークショップ（講師の演舞）



実施日時・場所：
郡上踊りワークショップ
平成25年5月15日（水）
13:30～15:00
柳戸会館集会ホール
能楽ワークショップ
平成25年6月19日（水）
13:30～15:00
柳戸会館集会ホール

能面の説明



講師：
郡上踊りワークショップ
郡上踊り口明方お囃子会会長
遠藤光生氏
浴衣着付け協力：美濃市せびあ会



能楽ワークショップ
観世流シテ方 味方團氏
同 田茂井廣道氏

能装束の着付け



能の楽器の実演体験



参加者：
郡上踊りワークショップ
留学生約30名、日本人学生約10名、教職員5名 合計約45名
能楽ワークショップ
留学生53名、日本人学生15名、教職員11名 合計78名

経費の使途・額の概略（45万円）：
講師謝金・交通費 17万円
舞台設営・看板等 26万円
会議費・消耗品費等 2万円

郡上踊りWS参加者集合写真



能楽WS参加者集合写真



能楽ワークショップ参加者アンケート：

1. このワークショップに参加する前に、能を観たことがありますか。
 見たことがある 8 ない 43
2. ワークショップの中で、何がおもしろかったですか。
 舞 26 講師の話 28
 謡 22 所作 19 面 33
 楽器 30 着付け 30
3. 全体として、このワークショップはどうか
 とても良かった 35
 良かった 15
(普通、悪かった：0)

能楽WS参加サマースクール(受入)学生



7. 留学生センター交流ラウンジの利用について

平成24年4月に「国際交流ラウンジ」が留学生センターに設置され3年が経過した。ラウンジチューターの活動も3年目に入り、継続して担当しているチューターも増え、新しく加わったチューターの指導役も務めてくれている。そのおかげもあり、ラウンジの活動や留学生支援も軌道に乗ってきた感がある。今年度は前期10名、後期10名の日本人学生がラウンジチューターとして配置された。

ラウンジでは、チューターによる日本語学習支援のほか、教育用パソコン、プリンター、大型ディスプレイを整備し、学習・情報収集の場として多様な活動が展開されている。ラウンジでは飲食も許可（ゴミは持ち帰りが原則）されており、ラウンジで昼食を取りながら日本人学生と留学生が談笑する和やかな場面がみられる。昨年からラウンジの壁面に、サマースクール（派遣）参加学生が留学報告会用に作成したポスターや、活性化経費（教育）報告会用ポスター、チューター企画イベントの様子をまとめたポスター等を掲示している。センターに来訪する留学生、日本人学生、教職員等が興味深く閲覧している姿も見られるようになった。

チューター活動時（授業開講日の午後3時から5時の2時間）以外では、サマースクール（派遣）説明会、サマースクール（受入）チューター説明会、サマースクール歓迎会（8週間コース）、日本語研修コースガイダンス、日研生ゼミ、個人チューターの指導等、多目的に活用された。さらに、今年度はサマースクール（受入）事業の一環として、「役員との昼食会」が本ラウンジで開催された。サマースクールの様子を役員の方先生方に知っていただくよい機会になると同時に、参加学生にとっても普段交流を持つことが難しい先生方と親しく言葉を交わす貴重な機会となった。

また、チューターの企画による留学生向けのイベントが今年度は2回開催され、平成26年7月6日（水）に「日本の七夕祭り」、同27年1月14日（水）には「日本のお正月」が行われた。チューターのリードにより、七夕祭りでは、墨と筆を使って日本語で短冊に願い事を書き、笹の葉に結び付けたり、折り紙を折ったりと日本人学生と留学生との交流が図られた。一方「日本のお正月」では、お正月の遊びであるカルタ取り、福笑い、百人一首（坊主めぐり）、書初め、折り紙、けん玉等を行った。中でも書初め、折り紙が盛況で、好きな漢字や言葉を書いたり、折り紙細工を皆で教え合ったりと、いずれも日本文化の一端を知る機会と日本人学生と留学生との良き交流の場となった。

ラウンジで開催している各種行事の様子は、岐阜大学HPお知らせサイト、岐阜大学学報、留学生センターHPに掲載してあるので参照されたい。

なお、年度ごとのラウンジの利用状況は次表のとおりである。

ラウンジの利用状況（チューター配置時のみ、他の時間帯は含まない）

年度	前期配置期間と利用人数*	後期配置期間と利用人数*	合計
26	4月14日～7月31日 543人	10月14日～2月10日 438人	981人
25	4月15日～8月2日 420人	10月10日～2月7日 333人	753人
24	5月28日～8月3日 310人	10月10日～2月8日 558人	868人

*人数には日本人学生を含む

利用者についてみると、毎年後期の利用者が比較的少ないが、今期は日本語研修コース A クラスの受講生や医学部の留学生がよくラウンジを活用しており、昼食、パソコン、談話、日本語学習等様々な活動が見られた。ラウンジに来る留学生はその年ごとに特徴があるが、国籍を問わず社交的な留学生がラウンジを利用する機会が多いように感じる。また、ラウンジのパソコンやプリンターを活用し、レポート等の作成や印刷するために来訪する留学生も見受けられる。今期は日本人学生のラウンジ利用者がこれまでより少なかったのは残念であった。

七夕まつり



新春イベント「日本のお正月」



サマースクール「役員との昼食会」



ラウンジチューター



資料

2015年3月 現在

岐阜大学外国人留学生数（在籍別）

学部 区分	教育研究科 教育学部		地域科学部 地域科学研究科		医学研究科 工学部		工学研究科 工学部		応用生物科学 研究科 応用生物科学部		連合農学 研究科		連合創薬 医薬情報研究科		流域圏科学 研究センター		生命科学総合 研究センター		留学生 センター		計		男女 別合計		総 合計	
	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費		国 費
学部																										
修士	1	3	4	13	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
博士																										
研究性	1	3	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
特別研究生	3	2	5																							
外国人特別研究生																										
特別聴講生																										
日本語・日本文化研修生																										
小計	1	4	16	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
合計	5	16	10	77	22	16	23	8	21	6	8	11	3	1	6	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

上段は男性、下段（網掛け）は女性

岐阜大学留学生センター紀要 2014

執 筆 者

太	田	孝	子	留学生センター教授
土	谷	桃	子	留学生センター准教授
田	辺	淳	子	留学生センター非常勤講師
三	輪	実	希	留学生センター非常勤講師
石	井	由	美	留学生センター非常勤講師
加	藤	由	紀子	留学生センター非常勤講師

編 集 委 員

竹	内	豊	英	留学生センター長（編集委員長）
太	田	孝	子	留学生センター教授
森	田	晃	一	留学生センター教授
橋	本	慎	吾	留学生センター准教授
土	谷	桃	子	留学生センター准教授
吉	成	祐	子	留学生センター准教授

岐阜大学留学生センター紀要 2014

2015年7月発行

岐阜市柳戸1番1

編集兼
発行者 岐阜大学留学生センター
責任者 竹内豊英

印刷所 西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地

Bulletin of the International Student Center
Gifu University
2014

Preface : TAKEUCHI Toyohide	1
1. Articles	
OHTA Takako The Rika (Ewha) Girl's High School during the Japanese Colonization of Korea : Focusing on "Gwangju Student Independence Movement"	3
TSUCHIYA Momoko Theaters in <i>Inaba</i> area of Gifu: <i>Suehiro-za</i> and <i>Kunitoyo-za</i>	21
2. Research Notes	
TANABE Junko A Study on Shadowing Materials for Japanese Language Learners: Aiming for Development of Conversational Proficiency	37
3. Class Reports	
MIWA Miki A Class Report of "Conversation A" for Novice Japanese Learners	49
ISHII Yumi A Class Report of "Listening Comprehension C" for Intermediate Japanese Learners	61
KATOYUKI Yukiko A Class Report of "Reading D" for Upper-Intermediate-Level Japanese Learners	73
4. Annual Report (2014.4-2015.3)	

Published by
The International Student Center
Gifu University, Gifu 501-1193, Japan